



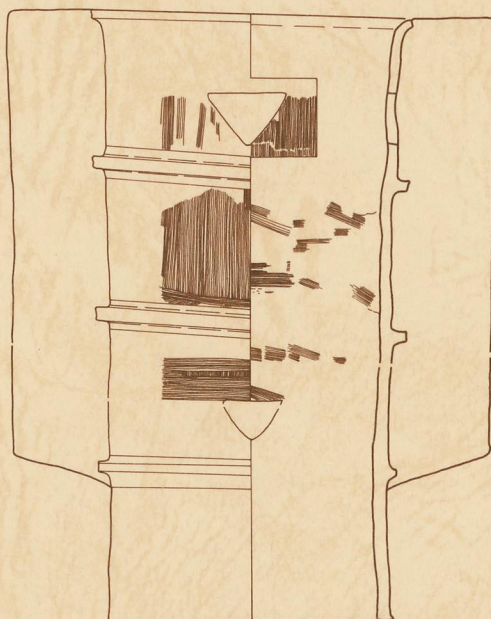
鳥取県鳥取市

布勢総合運動公園整備事業第2期計画に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

寄
贈

里仁古墳群

〈32・33・34・35号墳の調査〉



1985

財団法人 鳥取県教育文化財団

序 文

里仁古墳群は、鳥取市の市街地西方に位置し、今回調査した4基の古墳は、西の眼下に湖山池を、北は千代水平野を経て日本海が一望できる丘陵の尾根に連なって築造されていた。

昭和60年に開催される第40回国民体育大会の主会場が隣地に設けられたことに伴い、会場の周辺一帯が布勢運動公園として整備されることから、県の委託を受けて発掘調査を行ったものである。

調査の結果、4基とも古墳時代中期の方墳で、埋葬施設は箱式石棺、木棺、埴輪棺等が検出された。特に注目されるのは鱗付壺円筒、壺埴輪、家形埴輪及び多数の豎櫛が出土したことで、因幡地方における古墳研究の一助ともなれば幸いである。

おわりに、この調査にあたり全面的に御協力いただいた地元の皆さんをはじめ、関係各位に対し心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

昭和60年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

東 宗 像 遺 跡 正 誤 表

頁	誤	正
1 P 5行	「陰田遺跡調査団」	「米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団」
9行	「陰田遺跡調査団」	「米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団」
124 P 挿図 187	同筒埴輪	円筒埴輪
挿図 188	周 構	周 溝
142 P 13行	天井石	蓋 石 (2ヶ所)
14行	天井石	蓋 石
159 P 挿図11、番号6備考	1部未調査	1部未調査
169 P 挿図 254	東宗像遺跡地形横断面 ^x 画図	東宗像遺跡地形横断面図
205 P 挿図 285	西5号横穴出土遺物実測図 ^x ②	②削除



例 言

1. 本報告書は1984年度鳥取県布勢総合運動公園第2期整備計画に伴う鳥取市里仁、大桝に所在する里仁32・33・34・35号墳の発掘調査記録である。
2. 出土遺物の整理は松岡朋子、神矢紀子、吉次恭子の協力を得て、調査員が行なった。
3. 遺跡、遺構の実測は(株)鳥取建設技研の協力を得て調査員が行なった。遺物の実測は調査員が行ない、小谷春江、桑崎知早子が補助した。
4. 遺跡、遺構の写直撮影は調査員が行ない、遺物の撮影は中原が行なった。
5. 図面の浄書は主に青木ちえ子が行ない調査員が補足した。
6. 本報告書の執筆は調査員が分担して行ない、中原が編集した。
7. 出土遺物、図面等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来的には鳥取市に移管する予定である。
8. 32号墳第1号埋葬施設第2号石棺出土の人骨については、鳥取大学医学部解剖学教室井上貴央先生に鑑定を依頼した。また33号墳出土鑄造鉄斧の化学分析・鉄器のX線撮影は奈良国立文化財研究所町田章、沢田正昭、秋山隆保の各氏に指導・協力をいただいた。
9. 現地での発掘調査において奈良大学教授水野正好氏の御指導をいただいた。
10. 本誌に掲載の地形図は国土地理院発行の5万分の1地形図「鳥取北部」「鳥取南部」を使用した。
11. 図中の方位は磁北をさす。
12. 発掘調査、整理作業中、下記の方々に御指導、御助言をいただいた。
赤木三郎、秋山隆保、小田富士雄、岡崎晋明、勝部明生、加藤隆昭、久保穰二郎、黒崎直、真田廣幸、清水真一、高木恭二、寺西健一、中野知照、根鈴智津子、土井珠美、野田久男、平川誠、平勢隆郎、船井武彦、松本岩雄、三宅博士、森下哲哉、柳沢一男、山名巖（敬称略、五十音順）
13. 発掘調査にあたって便宜をはかっていただいた土地所有者・地元の方々に謝意を表します。



写真1 調査前風景



目 次

序	
例 言	
目 次	
第1章 調査の経緯	
第1節 発掘調査に至る経緯	(中原) 1
第2節 発掘調査の経過	(//) 1
第3節 調査方法と体制	(山柁) 2
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	(中原) 3
第2節 歴史的環境	(//) 4
第3章 調査の内容	
第1節 調査の概要	(山柁) 7
第2節 里仁32号墳	(//) 8
第3節 里仁33号墳	(//)25
第4節 里仁34号墳	(中原)46
第5節 里仁35号墳	(//)50
第6節 古墳以外の遺構	(山柁)59
第7節 遺構外出土遺物	(//)62
第4章 遺構と遺物の検討	
第1節 墳丘・埋葬施設について	(中原)63
第2節 遺物について	(//)64
第3節 まとめ	(//)69
第5章 付 論	
第1節 里仁32号墳第1号埋葬施設第2号石棺より検出された人骨について70

鳥取大学医学部解剖学第2講座 井上貴央

挿 図 目 次

挿図1 里仁古墳群測量杭設定図 2
挿図2 里仁古墳群の位置 3
挿図3 鳥取市西北部遺跡分布図 5
挿図4 32・33・34・35号墳位置図 7
挿図5 墳丘実測図 8
挿図6 墳丘土層断面図 9
挿図7 32号墳墳丘模式図10

挿図 8	32号墳掘り割り内円筒埴輪等出土状況図 (A)	10
挿図 9	32号墳掘り割り内家形埴輪等出土状況図 (B)	10
挿図10	32号墳第 1 号埋葬施設 (第 1・2 号石棺) 蓋石検出状況及び土層断面図	折込
挿図11	32号墳第 1 号埋葬施設第 1 号石棺実測図	11
挿図12	32号墳第 1 号埋葬施設第 1 号石棺出土竪櫛実測図	11
挿図13	32号墳第 1 号埋葬施設第 2 号石棺実測図	12
挿図14	32号墳第 2 号埋葬施設実測図	12
挿図15	32号墳第 3 号埋葬施設実測図	折込
挿図16	32号墳第 3 号埋葬施設鱗付壺円筒埴輪実測図	14
挿図17	32号墳第 3 号埋華施設出土鱗付円筒埴輪・円筒埴輪実測図	15
挿図18	32号墳第 3 号埋葬施設出土埴輪実測図	16
挿図19	32号墳出土埴輪実測図① (円筒埴輪)	17
挿図20	32号墳出土埴輪実測図② (円筒埴輪)	18
挿図21	32号墳出土埴輪実測図③ (朝顔形埴輪)	19
挿図22	32号墳出土埴輪実測図④ (壺形埴輪)	20
挿図23	32号墳出土埴輪実測図⑤ (壺形埴輪)	21
挿図24	32号墳掘り割り内出土家形埴輪実測図	22
挿図25	33号墳墳丘実測図	25
挿図26	33号墳掘り割り内壺形土器・鉄斧出土状況図	26
挿図27	33号墳墳丘模式図	26
挿図28	33号墳墳丘土層断面図	折込
挿図29	33号第 1 号埋葬施設遺物出土状況図	27
挿図30	33号墳第 1 号埋葬施設実測図	28・29
挿図31	33号墳第 1 号埋葬施設出土鉄器実測図①	30
挿図32	33号墳第 1 号埋葬施設出土鉄器実測図②	31
挿図33	33号墳第 1 号埋葬施設出土鉄器類実測図③	32
挿図34	33号墳第 2 号埋葬施設実測図	33
挿図35	33号墳第 2 号埋葬施設出土鉄器実測図	33
挿図36	33号墳第 3 号埋葬施設実測図	34
挿図37	33号墳第 4 号埋葬施設実測図	35
挿図38	33号墳第 5 号埋葬施設実測図	35
挿図39	33号墳出土鑄造鉄斧実測図	36
挿図40	33号墳掘り割り内出土土器実測図①	37
挿図41	33号墳掘り割り内出土土器実測図②	38
挿図42	33号墳第 3 号埋葬施設出土鱗付円筒埴輪実測図①	39
挿図43	33号墳第 3 号埋葬施設出土鱗付円筒埴輪実測図②	40

挿図44	33号墳第3号埋葬施設出土円筒埴輪実測図	41
挿図45	33号墳第3号埋葬施設出土埴輪実測図	42
挿図46	33号墳第4号埋葬施設出土鱗付円筒埴輪実測図	43
挿図47	34号墳墳丘実測図	46
挿図48	34号墳墳丘土層断面図	47
挿図49	34号墳第1・2号埋葬施設実測図	48
挿図50	34号墳第3・4・5号埋葬施設実測図	49
挿図51	35号墳墳丘出土土器実測図	50
挿図52	35号墳墳丘実測図	51
挿図53	35号墳主体部石棺粘土被覆状況図	52
挿図54	35号墳墳丘土層断面図	折込
挿図55	35号墳主体部石棺蓋石検出状況及び土層断面図	折込
挿図56	35号墳主体部石棺実測図	53
挿図57	35号墳主体部石棺内遺物出土状況図	54
挿図58	35号墳主体部棺外遺物出土状況図	54
挿図59	35号墳主体部石棺出土鉄器実測図	55
挿図60	35号墳主体部石棺出土竪櫛実測図	56
挿図61	35号墳主体部石棺出土玉類実測図	57
挿図62	第1号木棺墓実測図	59
挿図63	第1号集石遺構及び出土土器実測図	60
挿図64	第2・3号集石遺構実測図	61
挿図65	遺構外出土遺物実測図	62
挿図66	調査区全体図	折込
挿図67	里仁2号墳出土鱗付円筒埴輪実測図	66
挿図68	32号墳第1号埋葬施設第2号石棺人骨出土状況図	70

挿 表 目 次

挿表1—①	32号墳出土土器観察表	23
挿表1—②	32号墳出土土器観察表	24
挿表2	32号墳第1号埋葬施設第1号石棺出土竪櫛一覧表	24
挿表3—①	33号墳出土土器観察表	43
挿表3—②	33号墳出土土器観察表	44
挿表4	33号墳出土鉄器・砥石観察表	45
挿表5	35号墳出土土器観察表	57
挿表6	35号墳主体部出土鉄器一覧表	57
挿表7	35号墳主体部石棺出土竪櫛一覧表	58
挿表8	35号墳主体部石棺出土玉類一覧表	58

挿表 9	集石遺構・遺構外出土土器観察表	62
挿表10	鳥取県内竪櫛出土地名表	65
挿表11	里仁古墳群調査遺構一覧表 (1984)	68
挿表12	里仁古墳群古墳一覧表	69

図 版 目 次

図版 1	里仁古墳群 (調査区) 全景航空写真
図版 2	32号墳墳丘、第 1 号埋葬施設第 1・第 2 号石棺蓋石検出状況
図版 3	32号墳第 1 号埋葬施設第 1・第 2 号石棺、第 2 号石棺人骨出土状況
図版 4	32号墳第 2 号埋葬施設、第 3 号埋葬施設埴輪棺出土状況
図版 5	32号墳第 3 号埋葬施設埴輪棺出土状況、同埴輪棺本体
図版 6	32号墳墳頂部・掘り割り内遺物出土状況
図版 7	33号墳墳丘、第 1・第 2 号埋葬施設
図版 8	33号墳第 1 号埋葬施設土層断面及び標石、同遺物出土状況
図版 9	33号墳第 1 号埋葬施設遺物出土状況
図版10	33号墳第 2 号埋葬施設、同遺物出土状況
図版11	33号墳第 3 号埋葬施設、同完掘状況
図版12	33号墳第 4 号埋葬施設、第 5 号埋葬施設
図版13	33号墳掘り割り内土器・鉄斧出土状況、第 1 号木棺墓
図版14	34号墳墳丘、墳頂部埋葬施設
図版15	34号墳第 1 号埋葬施設、第 2 埋葬施設
図版16	34号墳第 4 号埋葬施設、第 5 号埋葬施設土層断面
図版17	35号墳墳丘、主体部石棺・掘り方
図版18	35号墳主体部石棺・蓋石、主体部石棺
図版19	35号墳主体部棺内遺物出土状況
図版20	第 1・2・3 号集石遺構
図版21	32号墳出土遺物①第 1 号埋葬施設第 1 号石棺出土竪櫛・第 3 号埋葬施設埴輪
図版22	32号墳出土遺物②埴輪 1
図版23	32号墳出土遺物③埴輪 2
図版24	33号墳第 1 号埋葬施設出土遺物鉄器
図版25	33号墳第 1 号埋葬施設出土遺物鉄器・砥石
図版26	33号墳出土鉄器
図版27	33号墳第 3 号埋葬施設埴輪
図版28	33号墳出土遺物埴輪・土師器
図版29	35号墳主体部石棺出土遺物竪櫛他
図版30	35号墳主体部石棺出土遺物鉄器・玉類
図版31	第 1 号集石遺構出土土器、里仁古墳群出土埴輪調整手法

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

発見の契機 今回調査を行なった里仁32～35号墳の4基の古墳は、1973年「鳥取県遺跡地図」の段階ではその存在を知られていなかった。里仁古墳群の立地する里仁字岩ヶ谷には1972年高草清掃工場が塵介処理場として建設されており、ゴミ置き場とされた谷中央部は両側を削り取って埋め立てられている。削られた丘陵は切り立った崖面となっており、それが原因となって1983年大雨の後里仁32号墳の墳丘北半が自然崩落して崖面に2基の箱式石棺が露出、内1棺（第1号埋葬施設第2号石棺）には人骨が確認されるに至った。鳥取県埋蔵文化財センターと鳥取市教育委員会は現地を確認し、半壊した古墳（里仁32号墳）の後方尾根筋に新たに3基の古墳を発見した。露出した石棺は、鳥取県教育委員会文化課と鳥取市教育委員会が協議の上、応急の処置として、清掃工場を管理する東部広域行政管理組合によって埋め戻され、とりあえずの現状保存がはかられた。この時採集された円筒埴輪片が鳥取市文化財収蔵センターに保管されており、鳥取市教育委員会の御好意で、その一部を併せて報告することができた。

布勢総合運動公園整備計画 ところが里仁古墳群の一部を含む、布勢、里仁の一带は布勢総合運動公園として整備が進められており、すでに、1980年布勢総合運動公園整備事業に伴い、鳥取県教育文化財団が布勢グラウンド第1遺跡、第2遺跡、布勢グラウンド古墳群（里仁古墳群の1部）^{註1}の調査を行っており、調査結果は「布勢遺跡発掘調査報告書」にまとめられている。当該地の遺跡、古墳は調査後すべて消滅している。

第2期計画 その後、里仁32～35号墳の立地する支丘陵が、先述した布勢総合運動公園整備の第2期計画に伴う造成地区に当たったため4基の古墳の消滅が避けられない状況となり、鳥取県都市計画課と文化課が協議の結果、都市計画課が鳥取県教育文化財団に調査委託して、記録保存をはかることとなった。ここで、改めて4基の古墳は里仁32～34号墳と命名され、鳥取県教育文化財団、東部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査にあたった。

註1 『布勢遺跡発掘調査報告書』1981年。以下「布勢グラウンド第1・2遺跡」と呼称する。布勢グラウンド古墳群については第4章第3節挿表12を参照されたい。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査 発掘調査は1984年11月5日から開始され、降雪期を控えた関係で、12月一杯までを目安に進められ、12月23日に現地調査を終了した。現地説明会は12月16日に行なわれ、小雨模様にもかかわらず約70名の参加者があった。調査の経過については調査日誌（抄）を参照されたい。現地での発掘調査と併行して、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターにおいて整理が進められ、1985年3月20日すべての整理作業を終了した。

調査日誌（抄）

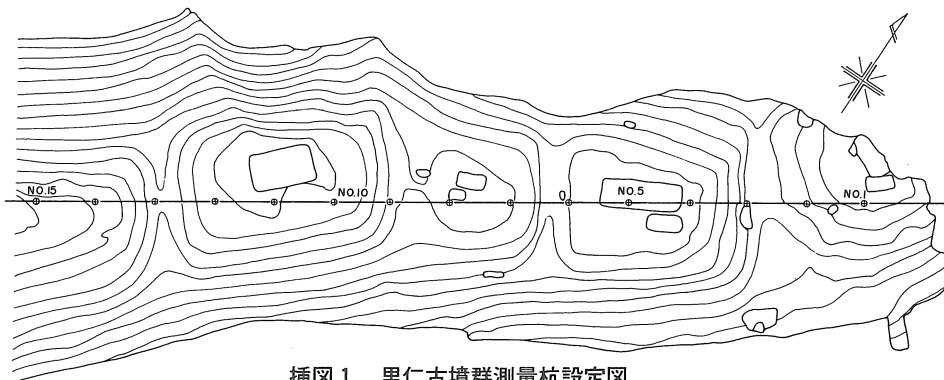
11月5日	調査開始。里仁32号墳から発掘を始める。	11月17日	33号墳北側掘り割り内において鑄造鉄斧、壺が出土。
11月6日	34号墳調査開始。	11月21日	33号墳墳頂部において2基の埋葬施設。同北側墳裾において埴輪棺（第3号埋葬施設）検出。
11月10日	32号墳墳頂部において埴輪棺（第3号埋葬施設）出土。35号墳調査開始。	11月30日	32号墳第1号埋葬施設第2号石棺人骨を確認。同第1号石棺において堅櫛出土。
11月11日	33号墳調査開始。	12月3日	奈良大学水野正好氏現地指導（～4日）
11月14日	34号墳埋葬施設完掘。		

12月4日 33号墳第1号埋葬施設において鉄器、砥石が出土。32号墳墳丘コンター測量開始。
 12月5日 35号墳第1号埋葬施設蓋石除去。鉄器・竖櫛・管玉・小玉が出土。
 12月10日 集石遺構調査開始。

12月12日 全景航空写真撮影（日本海航空に依頼）。
 12月14日 34号墳第4・第5埋葬施設検出。文化庁黒崎直調査官来訪。
 12月15日 33号墳第4・第5埋葬施設検出。
 12月16日 現地説明会。

第3節 調査方法と体制

調査方法 調査対象地区となったのは里仁古墳群が立地する丘陵尾根部2,800㎡である。発掘調査は調査員の指導の下、補助員、作業員が協力して行なわれた。遺構及び遺物の出土状況の実測・測量においては、尾根線軸に沿って基準線を通し、北東No.1から南西No.15までの基準杭を設定した（挿図1）。写真は黒白・カラー・カラーリバーサルの3種類を撮影している。



挿図1 里仁古墳群測量杭設定図

調査体制 里仁32～35号墳の発掘調査及び整理にかかわる調査体制は以下の通りである。

- 調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団
- 調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 東部埋蔵文化財調査事務所
 - 所長 太田垣甚一
 - 調査員 中原 斉
 - 同 山栞 雅美
- 調査指導 鳥取県教育委員会文化課
 - 文化財係長 亀井 熙人
 - 文化財主事 田中 弘道
 - 同 近藤 滋
 鳥取県埋蔵文化財センター
- 調査協力 鳥取市教育委員会 東部広域行政管理組合

発掘参加者 下記の方々に発掘調査作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。
 有田安子、稲本房枝、今崎豊子、植田貞子、上田順子、植田力三、太田則雄、大西美智枝、大西美智子、岡野芳子、岡本安子、加藤千代恵、岸田倉之助、岸本君子、窪田茂一、窪田とう、小谷育江、小谷光子、小谷美津子、杉本房子、竹中栄、竹中しづ枝、田中美智枝、田中芳一、田中義久、田辺千枝子、田脇さよ子、戸田喜美枝、土橋馨、中谷沢子、西尾昌子、西村涉、橋本あき子、浜本美佐子、浜本好子、林登志子、福田いく子、福田清子、福田末子、福田善一、福田千代子、藤森光恵、前田房子、松本クニ子、水原美智子、宮脇君江、村田由美子、森岡清野、森岡寿雄、守部まつえ、森みどり、森本スミエ、森本澄栄、森本美代子、米沢とし子（敬称略、五十音順）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

里仁古墳群は鳥取市北西部里仁字岩ヶ谷、大桝字村土居に所在する。

鳥取県 鳥取県は北は日本海に面し、南はなだらかな中国山地をひかえた東西100kmに及ぶ細長い県であり、面積3,492.65km²、人口61.3万人を数える。県土の75%は山林であり、生活領域は海岸に開けた沖積平野と山間の谷奥平野に展開している。旧国名でいえば東が因幡国、西が伯耆国であるが、地形的には伯耆国は西と東に分けられ、因伯を合わせて東、中、西部の3地域に分けられる。それぞれの地域には大河流域に形成された沖積平野が開けており、因幡は千代川下流の鳥取市、東伯耆は天神川中流域の倉吉市、西伯耆は日野川下流域の米子市を中心として発展している。米子市の北側弓ヶ浜半島先端部には日本海側随一の漁港境港をもつ境港市があり、漁業を中心に発達している。鳥取県は、この4市を中心に6郡、35町村で構成される。

鳥取市 県東部に位置する鳥取市は鳥取県の県庁所在地であり、周辺は東に岩美郡福部村、国府町、南に八頭郡河原町、郡家町、西に気高郡気高町、鹿野町に囲まれている。面積237km²、人口13万人余の地方都市である。鳥取周辺の地形をみると東、西、南の三方を山に囲まれ、北方には鳥取砂丘、日本海が広がっている。平野の中央部を千代川が流れ、南から北へと平野を二分して貫流し、日本海へそそいでいる。また、平野の西端には県下最大の潟湖、湖山池がある。

千代川、鳥取平野 千代川は中国山地の奥深く八頭郡智頭町に源を発する総延長56.8kmの大川で野坂川、袋川等大小の支流を合流し一大水系をなしている。鳥取平野はかつて洪積世～沖積世初期には鳥取湾（鳥取潟）と称される入海あるいは潟湖であって、縄文時代前期以後の海退による沼沢地化と、古墳時代以後に千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積により形成された沖積低地である。

湖山池とその周辺 里仁古墳群が位置するのは千代川左岸の湖山池南東岸近くであり、湖岸からの距離は1.3kmとなる。湖山池は周囲18km、面積7.25km²を測り、かつては入海だったものが砂州で湾口部が閉塞され潟湖化したものである。内湾の面影は旧海島である青島、天神山、山王山、足山などの岩島地形の波食窪に残されている。この地域の低地にはかつての沼沢地の拡大に伴い水性



挿図2 里仁古墳群の位置

植物が生育し、厚さ数メートルにも及ぶ「ガマクソ」と呼ばれる未分解植物遺体層（泥炭）の堆積が顕著にみとめられる。湖山池周辺の山地形は南西方に聳える高山などの1,000mクラスの山地から北方に段階的に高度を下げており、海拔400m以下の山地は起伏が小さく、湖山川、野坂川などの中小河川が山間をぬって放射状に分布している。里仁古墳群はこれらならかな山地形がいくつも枝分かれし、かつて入海中に岬状に突出したであろう風化花崗岩地帯の支尾根の1つに位置している。

参考文献 豊島吉則「鳥取の自然と人文・地形」『新修 鳥取市史』第一巻 1983

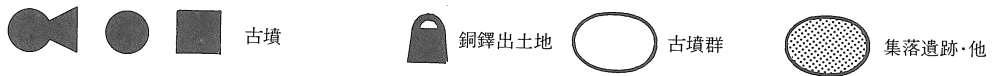
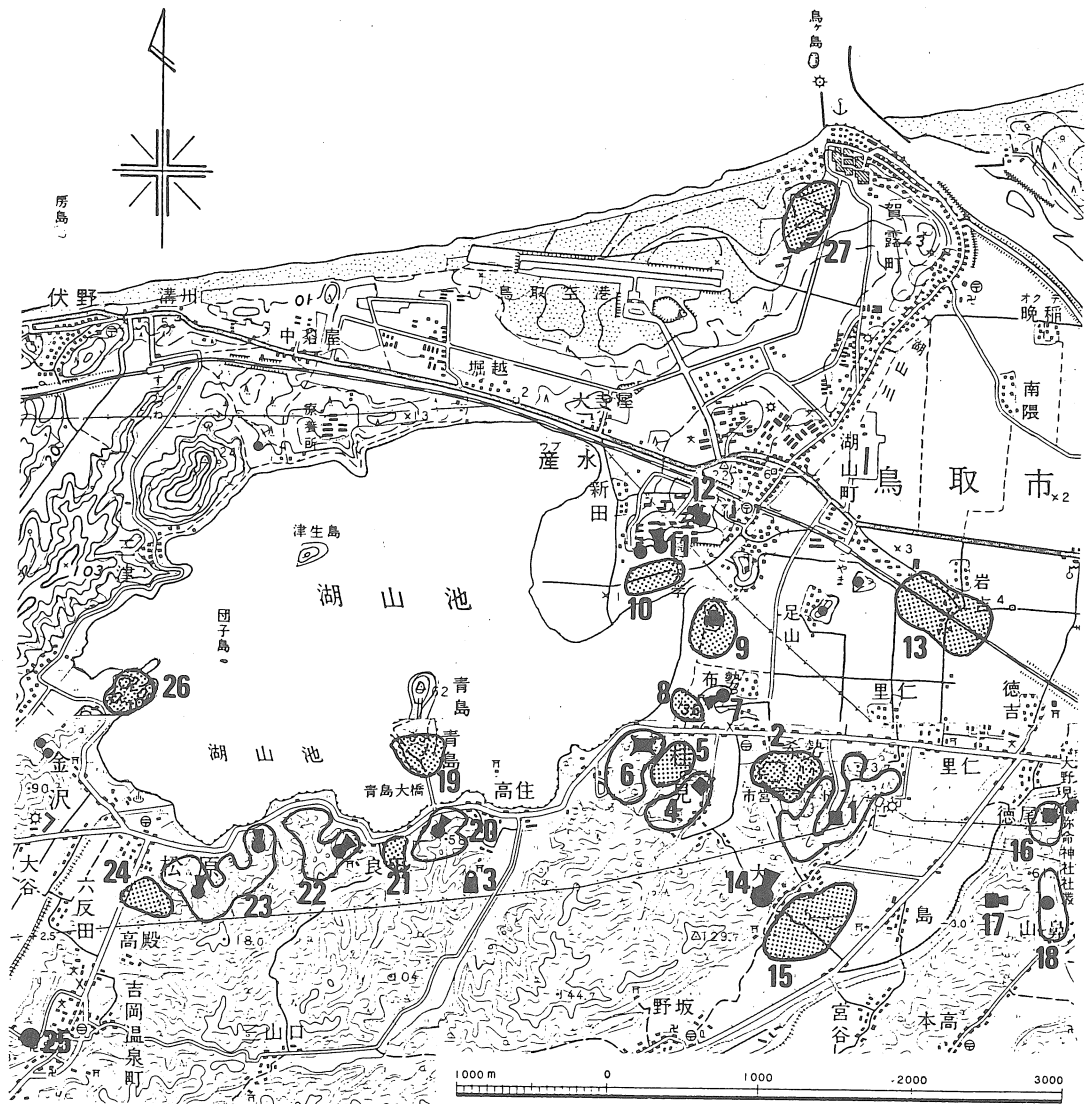
第2節 歴史的環境 一湖山池周辺一

湖山池 「湖山長者伝説」や冬の「石がま漁」で知られる湖山池はその周囲に原始、古代の遺跡の多いことでも有名である。とりわけ湖山池東、南岸は近年の開発事業などに伴い、貴重な遺跡の発見が相次いで大規模な発掘調査が行なわれており、鳥取市域でも遺跡の密集度の高い地域となっている。

縄文時代 この地域では低湿地の遺跡から縄文時代の遺物が数多く出土している。その時期は桂見遺跡（5）などでは、前期末まで溯れるようであるが遺跡が継続する現象はみられず、古くから著名な青島遺跡（19）を始め、桂見遺跡（5）、布勢グラウンド第1遺跡（2）では豊富な木製品や植物遺体と共に後期を主体とする土器群が検出されている。

弥生時代 弥生時代になると遺跡の数は増加し、肥沃な沖積低地を生産基盤とした初期農耕集落の広がりが見られるが、実際には縄文時代に続いて弥生時代の遺跡の多くが沖積平野内の地表下数mに存在しており、集落の実態は不明瞭なままである。前期の遺跡としては、青島遺跡（19）、東岸の湖山第2遺跡（10）さらに東側の千代川と湖山池の中間に位置する岩吉遺跡（13）がある。湖山第2遺跡では前期末頃の堅穴住居跡と推定される柱穴群が発見されている。中、後期になると前期の遺跡が継続して営まれ、集落規模も大きくなるようであるが、これら母村的集落から分村した小規模集落が各所に成立している。集落遺跡としては、湖山池南西岸の松原谷田遺跡（24）、岩本遺跡（26）、東岸の布勢グラウンド第2遺跡（2）、天神山遺跡（9）、帆城遺跡（8）、北岸には湖山第2遺跡（10）が知られており、発掘調査により住居跡を始めとした遺構と、多くの遺物が発見されている。この中で湖山第2遺跡（10）と、布勢グラウンド遺跡（2）で管玉未製品が検出され、玉作工房の存在が推定されるのは注目される。この他には、湖山池南東岸の高住において流水文をもつ扁平紐式銅鐸が出土している（3）。塞ノ谷遺跡（21）では火切臼、田下駄、梯子などの多量の木製品が出土しており、先述した青島遺跡（19）とともに通常の集落遺跡でなく、祭祀的な色あいの強い遺跡とされている。弥生時代の墳墓としては桂見の丘陵上に土壙墓群が散在するが、西桂見遺跡（6）では1辺64m、高さ5mの規模をみせる四隅突出型方形墓が後期末に出現しており、弥生時代の墳墓としては他を圧する存在である。

古墳時代 古墳時代になると湖山池周辺の丘陵上には隙間なく古墳が造られるようになる。前期古墳としては最近調査された桂見古墳群（4）があり、1辺28mの方墳である2号墳主体部の長大な箱式木棺からは舶載の内行花文鏡、斜縁獣帯鏡が出土して注目を浴びた。またこの時期の小



- | | | |
|-------------------------|----------------------|---------------------|
| 1. 里仁古墳群(36基) | 10. 湖山第2遺跡(縄文~中世) | 19. 青島遺跡(祭祀・縄文~弥生) |
| 2. 布勢グラウンド第1・2遺跡(縄文~中世) | 11. 三浦1号墳(前方後円・36m) | 20. 高住古墳群(12基) |
| 3. 高住銅鐸出土地(流水文銅鐸) | 12. 大熊段1号墳(前方後円・47m) | 21. 塞ノ谷遺跡(祭祀・弥生~古墳) |
| 4. 桂見古墳群(桂見2号墳・方28m) | 13. 岩吉遺跡(縄文~中世) | 22. 良田古墳群(34基) |
| 5. 桂見遺跡(縄文) | 14. 梶間1号墳(前方後円・90m) | 23. 松原古墳群(16基) |
| 6. 倉見墳墓群(四隅突出型方形墓) | 15. 大楠遺跡(弥生~中世) | 24. 松原谷田遺跡(弥生~平安) |
| 7. 布勢1号墳(前方後円・60m) | 16. 徳尾古墳群(古墳中期~中世) | 25. 葦岡長者古墳(吉岡1号墳) |
| 8. 帆城遺跡(縄文~中世) | 17. 古海36号墳(前方後方・60m) | 26. 岩本第1・第2遺跡 |
| 9. 天神山遺跡(縄文~中世) | 18. 古海古墳群(12基) | 27. 賀露第1・第2遺跡 |

挿図3 鳥取市北西部遺跡分布図

規模墳墓群としては西桂見遺跡の中の倉見古墳群（6）が調査されており、古墳時代前期の墓制の様相が明らかになりつつある。中、後期の古墳の多くは、倉見古墳群にみられるような中、小古墳であると思われるが、北東～南東岸にかけては布勢1号墳（9）、大熊段1号墳（12）、三浦1号墳（11）などの前方後円墳が全長50～60mの規模をもち、南東～南岸の里仁古墳群（1）、高住古墳群（20）、良田古墳群（22）、松原古墳群（23）、の中にも前方後円墳がみられる。前方後円墳として最大のものは里仁古墳群のすぐ南西に位置する桝間1号墳（14）であり、全長90mの規模を誇る。また、湖山池からは少し離れるが桝間1号墳と野坂川の谷をへだてた古海の丘陵中には全長63mの前方後円墳である古海36号墳（17）があり、最近調査された徳尾古墳群（16）では中期の方墳が発掘され、里仁32～35号墳とほぼ同時期の古墳として注目される。後期の横穴式石室をもつ古墳として知られるのは高住12号墳（20）、葦岡長者古墳（吉岡1号墳）（25）、山ヶ鼻古墳（古海13号墳）（18）のみであり、葦岡長者古墳は6世紀後半の両袖式横穴式石室、山ヶ鼻古墳は剝り抜き石棺式石室をもっている。この時代の横穴墓の存在は里仁周辺で知られているが、未調査のためその様相は全く不明で、消滅したものも多い。古墳時代の集落の多くは、弥生時代から引き続き営まれたものと考えられ、前記の湖山第2遺跡（10）、布勢グラウンド第2遺跡（2）の他大桝遺跡（15）などでも多くの遺構が発見されている。祭祀遺跡としての青島遺跡（19）、塞ノ谷遺跡（21）も古墳時代まで継続するようである。

歴史時代 湖山池周辺は、律令体制下には高草郡に組み込まれ、湖山池南東岸の地域は東大寺領高庭荘として開発されたことが史料に残されている。この頃の高草郡の中心は菖蒲廃寺、大野見宿禰神社のある古海郷周辺にあったと考えられ、高草郡衙の位置もこの周辺に求めることができよう。いずれにしても因幡国造浄成女に代表される古代因幡氏の本貫地は高草郡と考えられ、因幡国府のおかれた法美郡と共に古代因幡の中心地であったと思われる。

中世 その後、この地が歴史上に現われるのは15世紀になって因幡守護山名氏が布勢天神山城（9）を築城し、因幡支配の拠点としてからである。この時期の土壇墓、火葬墓が周辺丘陵から古墳の調査に伴って発見されており、考古学的知見が加えられている。いずれにしても、縄文時代～中世、現代に至るまで湖山池周辺は、因幡の中心として栄えたところであり、その背景には自然、文化、交通の母胎としての湖山池が今と変らぬ姿をみせていたことであろう。

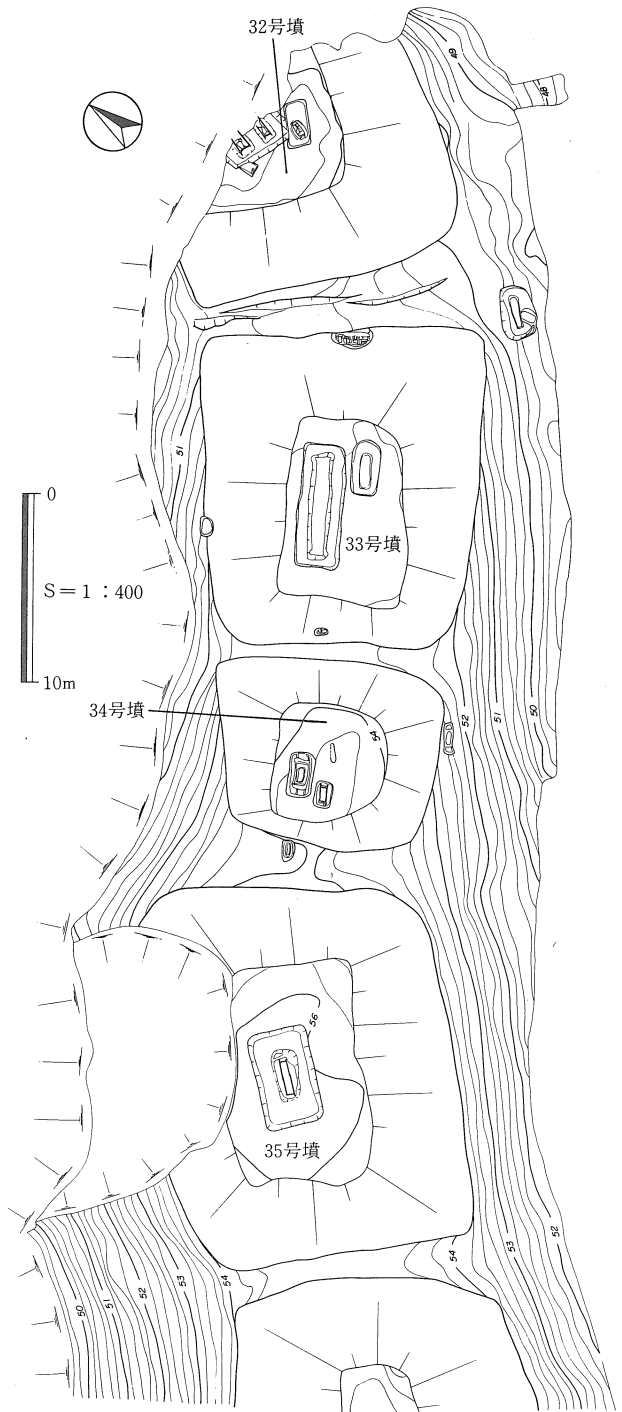


写真2 調査風景

第3章 調査の内容

第1節 調査の概要

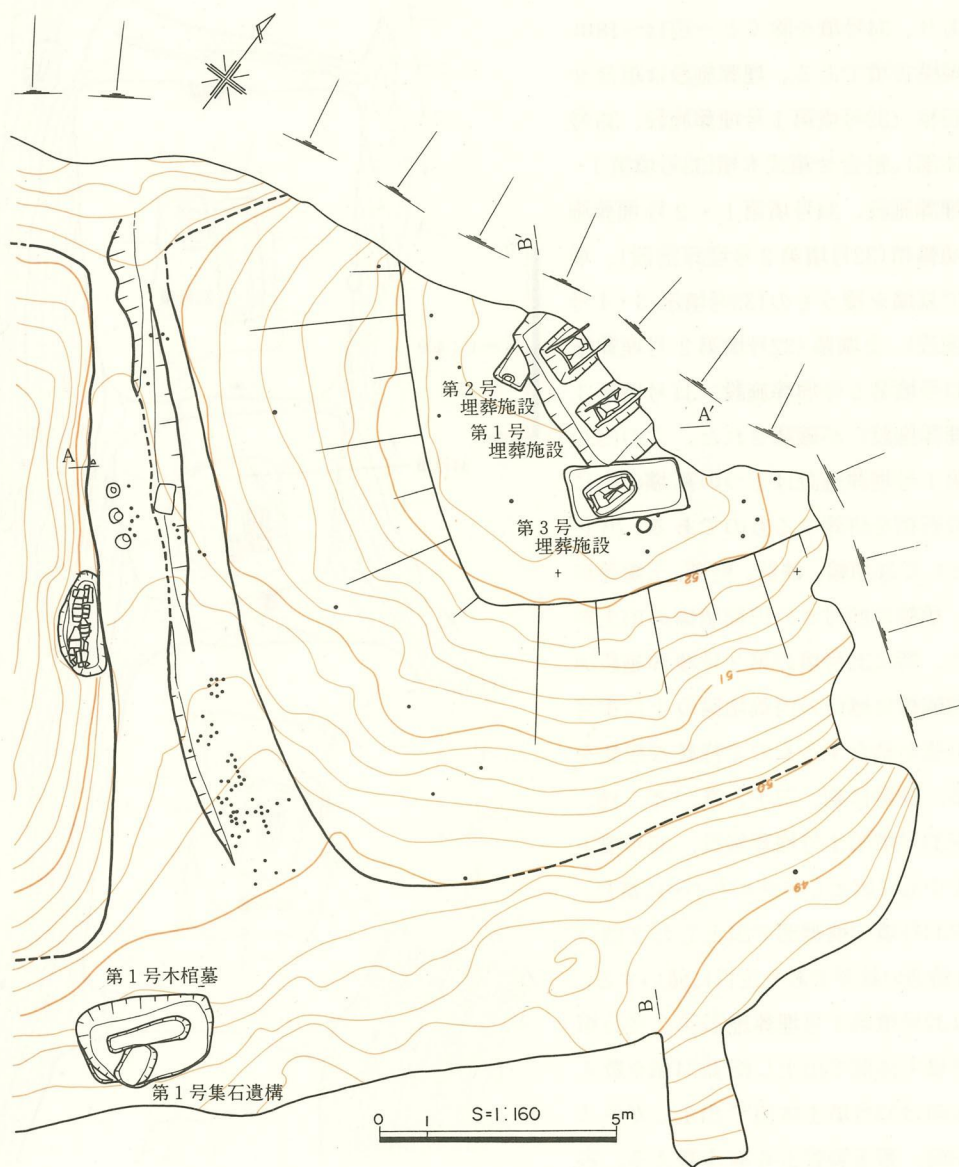
里仁古墳群は湖山池の東1.8kmにある北東へ延びる丘陵上に展開する古墳群である。今回調査対象となった4基の古墳は丘陵の最も高い所に位置する。1983年に新たに発見されたもので、北東側から32号、33号、34号、35号墳とした。全て方墳であり、34号墳を除くと一辺14~18mの中規模古墳である。埋葬施設は組合せ箱式石棺(32号墳第1号埋葬施設、35号墳主体部)、組合せ箱式木棺(33号墳第1・2号埋葬施設、34号墳第1・2号埋葬施設)、埴輪棺(32号墳第3号埋葬施設)、埴輪片で墓壙を覆うもの(33号墳第3・4号埋葬施設)、土壙墓(32号墳第2号埋葬施設、33号墳第5号埋葬施設、34号墳第3~5号埋葬施設)が確認された。この内32号墳第1号埋葬施設は1つの墓壙の中に2基の石棺を併葬するものである。出土遺物としては埴輪、鉄器、埴輪、玉類等がある。埴輪は鱗付きの円筒埴輪の出土が目立ち、特に32号墳の第3号埋葬施設出土の埴輪棺は鱗付きの円筒埴輪の上に複合口縁の壺が結合するもので特異な形態を呈する。鉄器は剣、刀子、鏃、斧、鉞、鏝等が33号墳第1号埋葬施設、35号墳主体部を中心に出土しバラエティーに富む。この内33号墳の埴裾部で出土した2個の鉄斧は鋳造の鉄斧であり注目に値する。埴輪は32号墳第1号埋葬施設第2号石棺と33号墳主体部で出土し総数34個を数える。玉類は35号墳主体部で出土しガラス小玉48個、碧玉製管玉6本を数える。古墳以外に木棺墓1、中世墓と考えられる集石遺構を検出した。



挿図4 里仁32・33・34・35号墳位置図

第2節 里仁32号墳 (挿図5～24、図版2～7、21～23)

里仁32号墳は南西から北東へのびる尾根が標高52m付近で北側へやや主軸をふる辺りに位置しており、今回調査した古墳の内最も尾根の先端に立地する。本古墳は調査開始時既に墳丘の北側が崩落しており、石棺が2基(第1号埋葬施設)崖面に露出していた。墳形は方形を呈する。墳丘は基本的には地山を整形した後に盛土を墳頂部及び墳丘側面に行うものである。尾根をその主軸に直交する方向で断ち割って溝を造り、その溝を北西、南東側で鉤状に曲げることによって墳形を造り出す。ただし南東側の斜面は地山を整形することなく、旧地形をほぼそのまま(挿図6、第18層上面)利用して盛土をする。その為墳丘の南東側の墳裾線は明瞭ではない。盛土は墳丘の

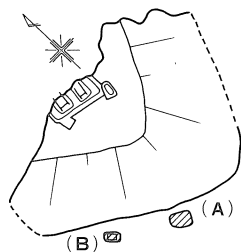


挿図5 32号墳墳丘実測図

北側ほど厚くなり、墳頂部において最大0.7mの厚さとなる。墳丘の規模は南西辺墳裾で約14m、南西掘り割り底から墳頂部まで1.8mの高さを測る。掘り割り幅は最大で2.1mを測る。掘り割りには33号墳のそれと切り合っており、土層断面（挿図6）より33号墳の周溝内埋土（第19層）を切



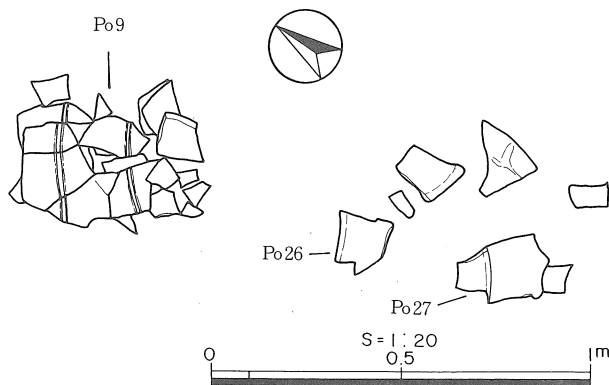
挿図6 32号墳墳丘土層断面図



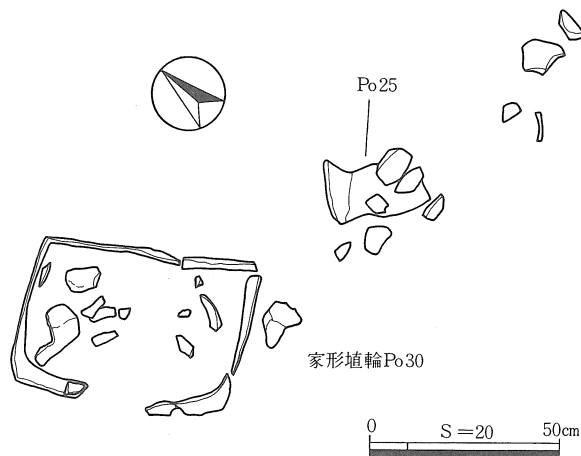
挿図7 32号墳墳丘模式図

り込んで造られているものと思われる。埋葬施設は墳頂部のみで検出された。第1号埋葬施設(挿図10~13、図版2、3)は墳頂部平坦面の中央と思しき位置で検出された。崖面に2基の箱式石棺が露出していたことから、当初切り合う2つの墓壙を想定したのであるが、精査の結果2基の箱式石棺を納める1つの墓壙が検出された。この墓壙は主軸をN-17°-Eにとり、上縁東西辺で推定380cm、南北辺92cm残存する。深さは65cmを測る。墓壙の中に、墓壙と主軸をほぼ一にして、0.53mの距離をとって2基の箱式石棺が納められる。いずれも北側部が破損している。

西側の石棺を第1号石棺、東側のそれを第2号石棺とする。第1号石棺(挿図10~12、図版2、3)は墓壙をさらに東西92cm、南北90cm以上、深さ33cmの規模で掘り込み、組合せ箱式石棺を納めるものである。石英安山岩質板状安山岩の板状節理^{註1}を利用して造った厚さ6cm程の板状の石を用いて小口石の外側に両側石を配し、床面には敷石を施す。規模は内法で長さ103cm(残存部)。南側幅55cm、北側幅50cm、高さ43cmである。棺の構築は墓壙の床面の南端に掘り込みを設け、小口石(高さ62cm、幅55cm)を埋め立てる。北側の小口石も同様に埋め立てられたのであろう。その際に楔状の石を小口石の背後に込め安定度を確保する。両側石も小口と同様に掘り込みを設けて埋め立てる。楔石は東側石の内面に1枚のみ見られる。その後敷石を施す。調査時において敷石が重なり合うのであるが、これは北側部の崩壊等によって後世に生じた石棺の歪によって生じたものであり、本来は整然と敷かれていたものと思われる。棺本体が組み立てられた後、側石及び小口石の上面まで覆う様にして粘土を巻く。これによって蓋石と壁石との密閉度が増すと共に壁石の安定度が増す。次に暗橙色土(挿図10第8層)を間層にして蓋石をのせる。蓋石は長さ120cm、幅98cmのものが1枚残るのみである。蓋石は1部に粘土が付くのみで、粘土で全体を覆う状況は呈していない。第2号石棺(挿図10、13、14、図版2、3)は東西辺70cm、南北辺108cm以上、深さ32cmの規模の掘り方内に納められ、内法が長さ108cm(残存部)、南側幅35.5cm、北側幅37cm、

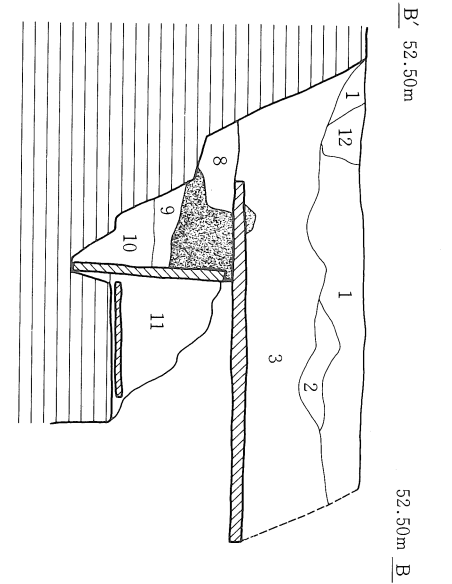
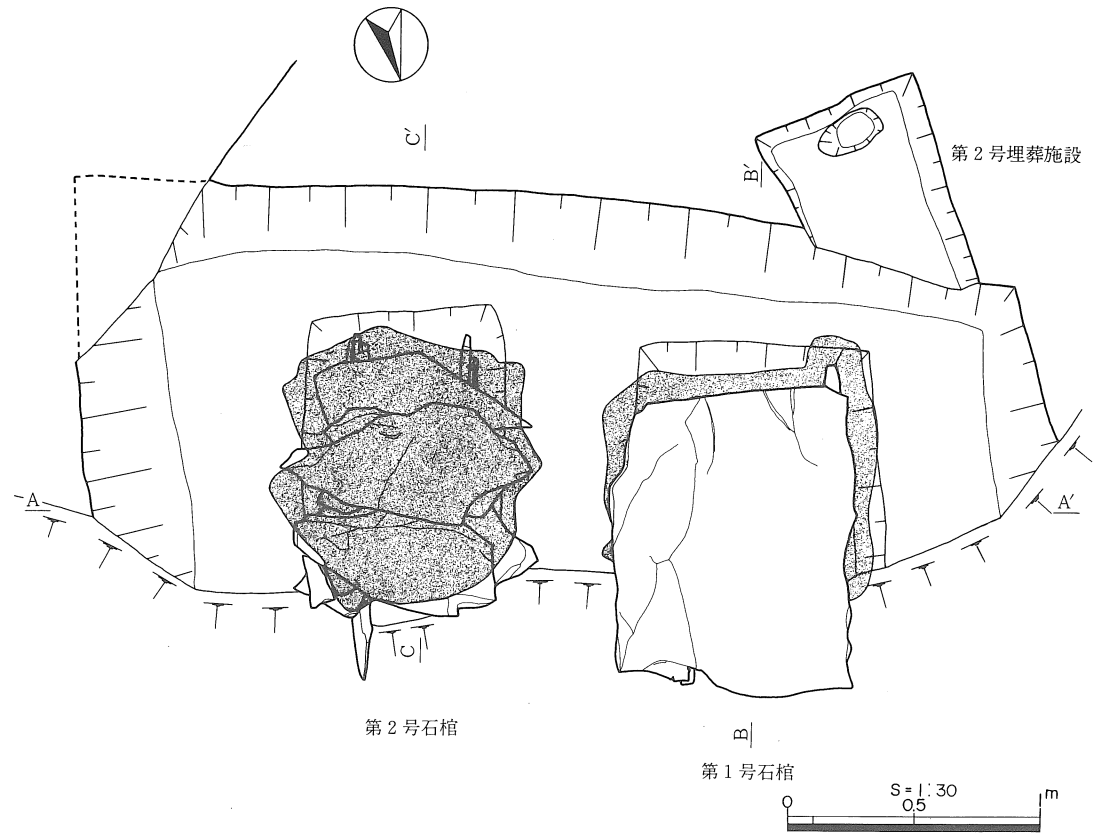
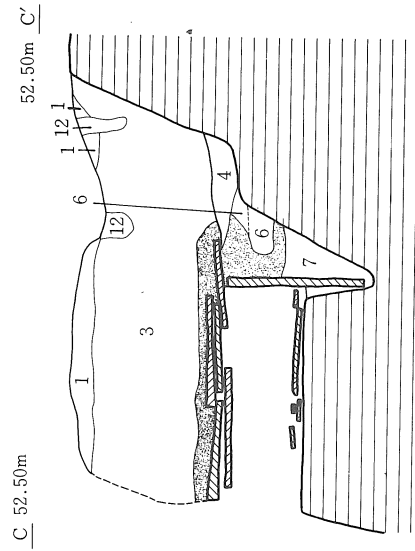
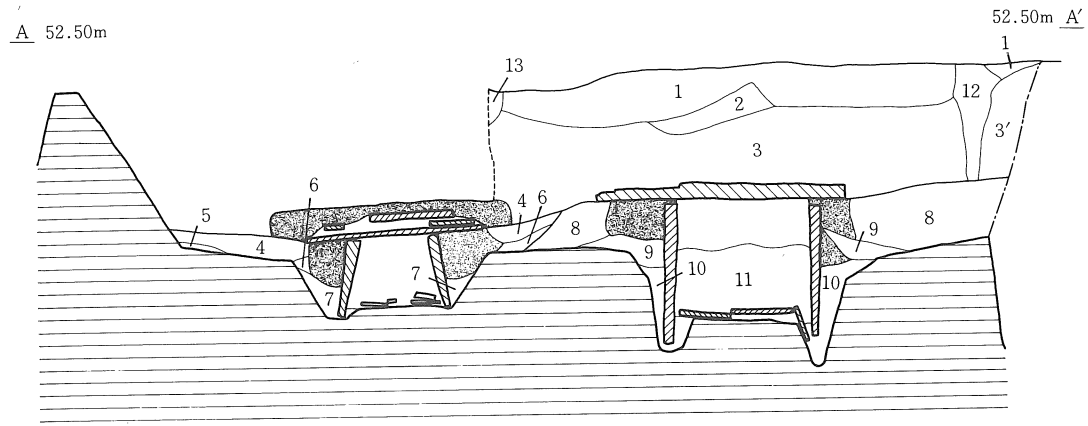


挿図8 32号墳掘り割り内円筒埴輪等出土状況図(A)



挿図9 32号墳掘り割り内家形埴輪等出土状況図(B)

1. 橙茶褐色土
 2. 暗灰色土を含む橙茶褐色土
 3. 暗橙褐色土
 - 3' 3よりやや暗い
 4. 暗茶褐色土
 5. 暗茶褐色土(粘土ブロックを含む)
 6. 淡橙灰褐色土
 7. 淡黄灰褐色土
 8. 暗橙色土
 9. 黄橙褐色土
 10. 暗褐色土
 11. 北側小口部崩壊時に入れられたと思われる土
 12. 木の根の攪乱
 13. 暗灰褐色土(後世の掘り込み)
- スクリーントーン 粘土



挿図10 32号墳第1号埋葬施設(第1号、第2号石棺)蓋石検出状況及び土層断面図

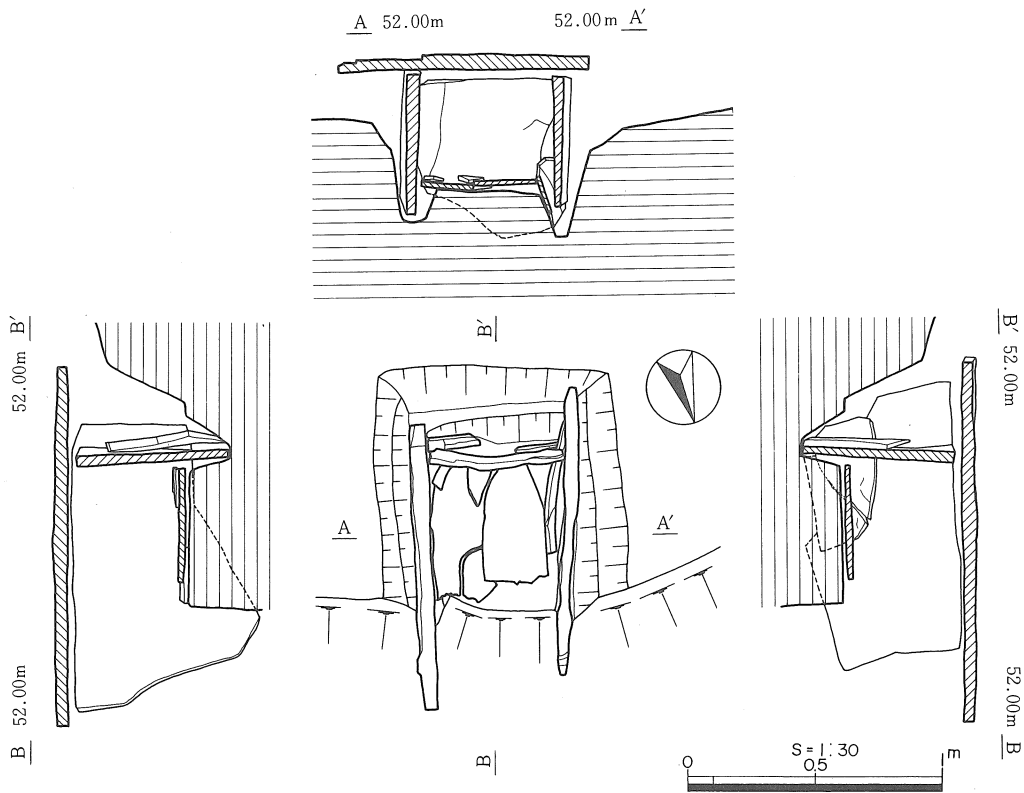


插图11 32号墳第1号埋葬施設第1号石棺実測図

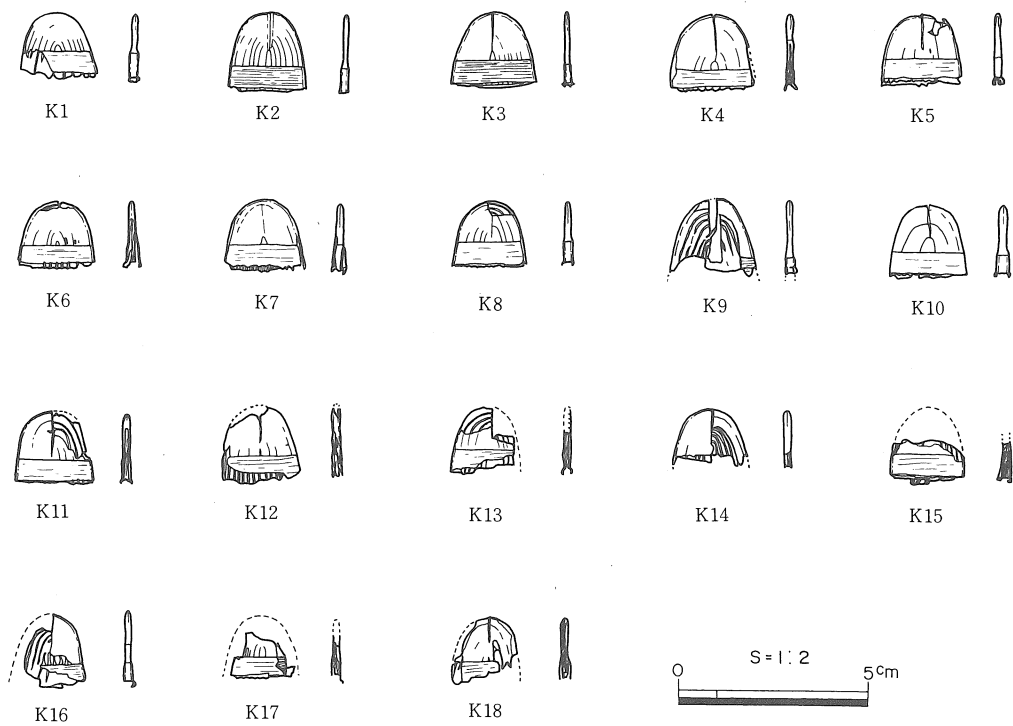
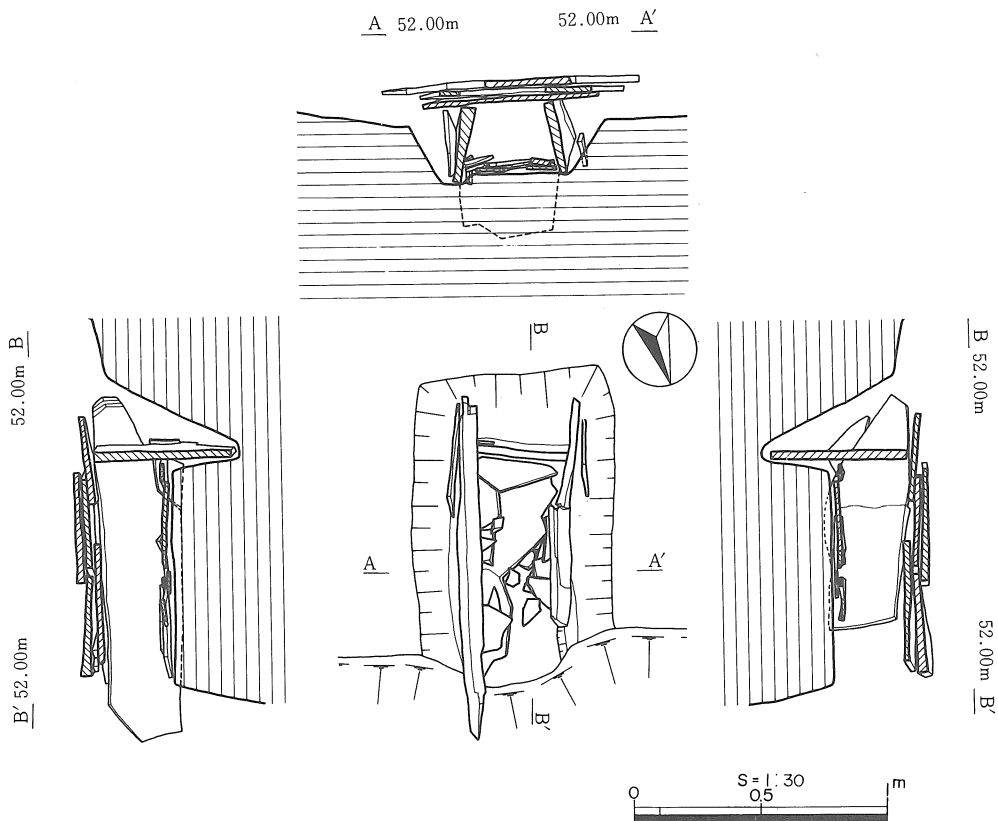


插图12 32号墳第1号埋葬施設第1号石棺出土豎櫛実測図

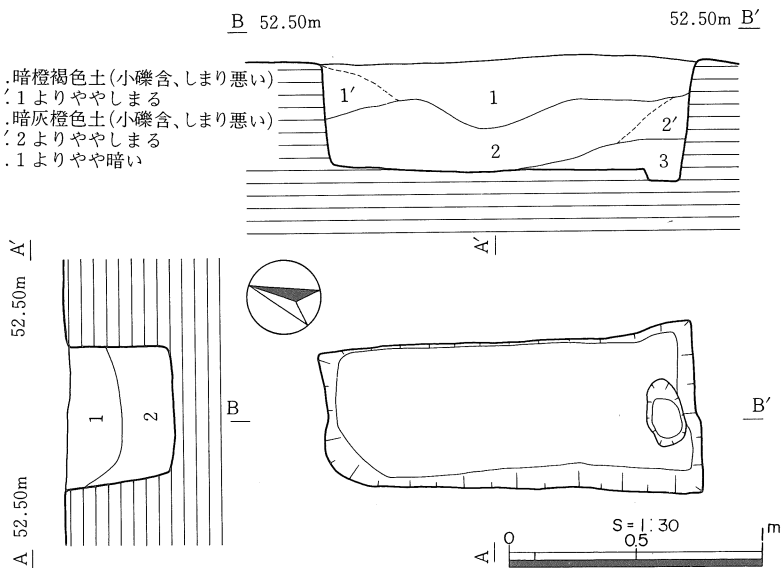


挿図13 32号墳第1号埋葬施設第2号石棺実測図

高さ29cmの規模をもつもので、第1号石棺より小型のものである。両側石はひどく傾いていた。棺材、構造、構築法は第1号石棺と同様のものである。但し蓋石に幅80cm～100cm、長さ40cm程度の石を数枚重ね合わせる点、その上に目張りの為の粘土が被覆されている点で第1号石棺と異なる。両石棺の蓋石、小口石、側石の内面は赤色顔料が残

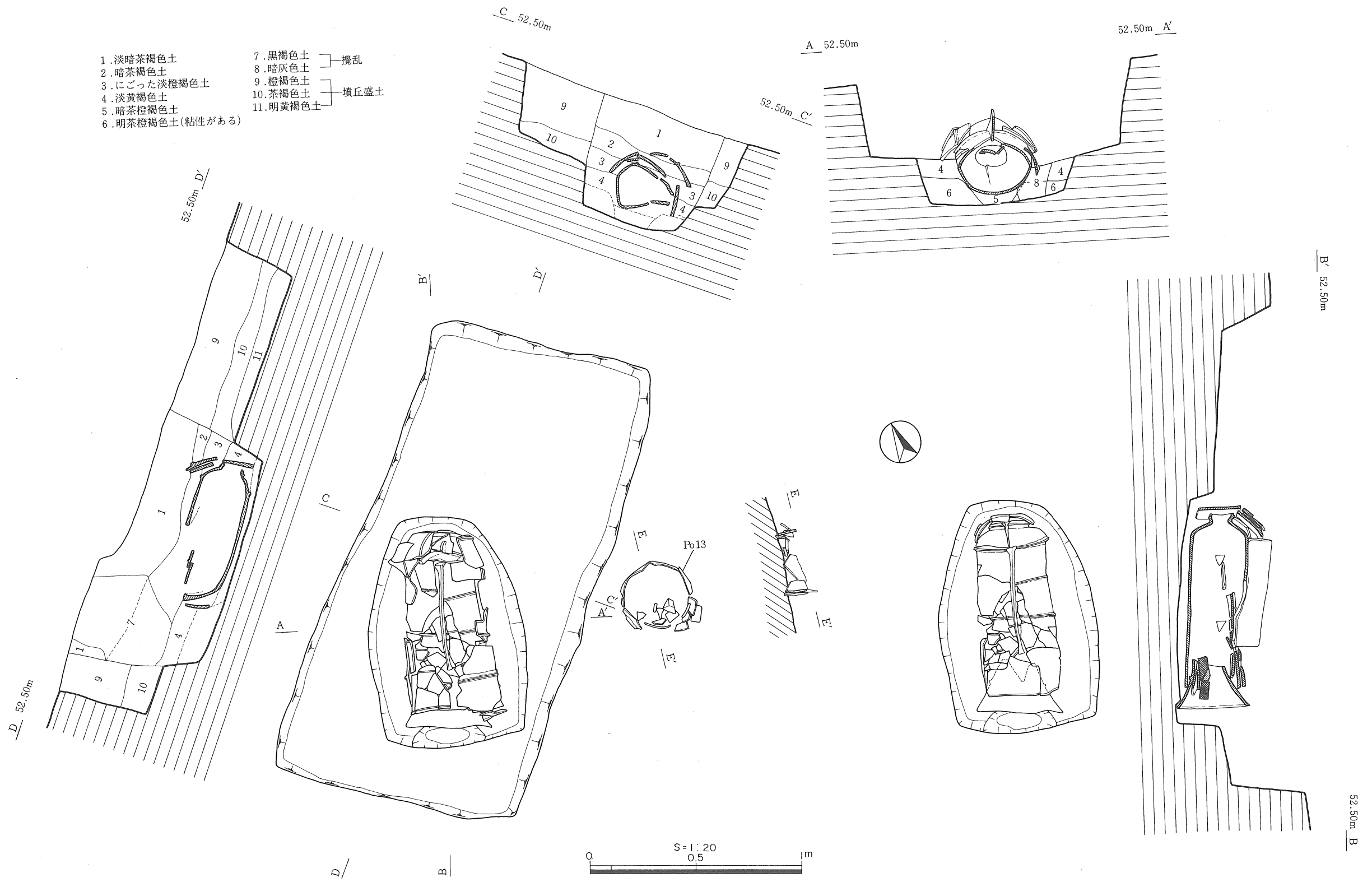
っていた。土層断面（挿図10）より第2号石棺は、第1号石棺の構築後第1号石棺を埋めた土をその蓋石が露呈するまで取り除き、その後第8層を掘り込んで構築されている。第1号石棺の蓋石の上に粘土が覆されていないのは、その際に蓋石を覆する粘土を除去し去ったからであろうか。第2号石棺構築後第1号石棺と

1. 暗橙褐色土（小礫含、しまり悪い）
- 1' 1よりややしまる
2. 暗灰橙色土（小礫含、しまり悪い）
- 2' 2よりややしまる
3. 1よりやや暗い



挿図14 32号墳第2号埋葬施設実測図

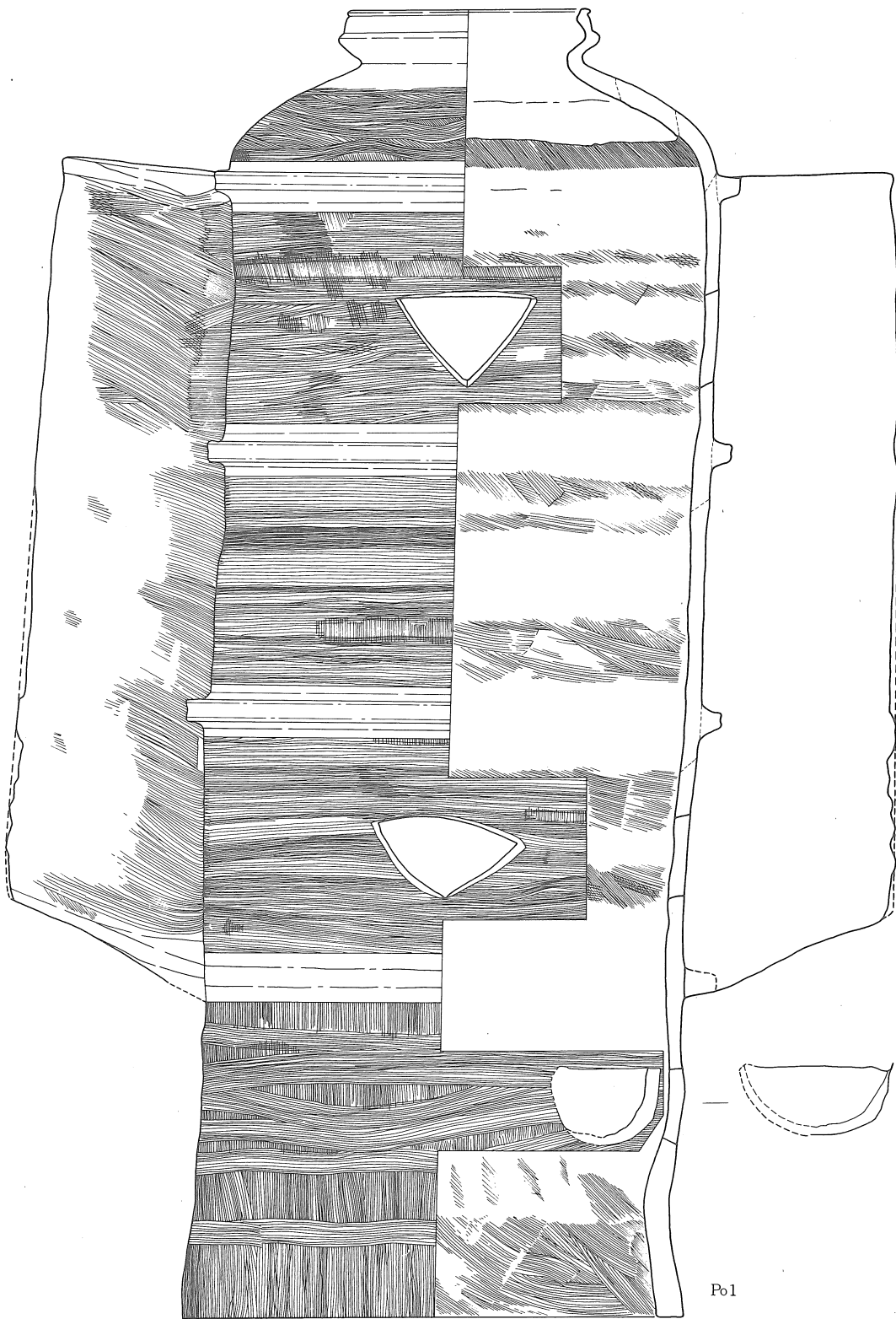
- 1. 淡暗茶褐色土
 - 2. 暗茶褐色土
 - 3. にごった淡橙褐色土
 - 4. 淡黄褐色土
 - 5. 暗茶橙褐色土
 - 6. 明茶橙褐色土(粘性がある)
 - 7. 黒褐色土
 - 8. 暗灰色土
 - 9. 橙褐色土
 - 10. 茶褐色土
 - 11. 明黄褐色土
- 攪乱
 墳丘盛土



挿図15 32号墳第3号埋葬施設実測図

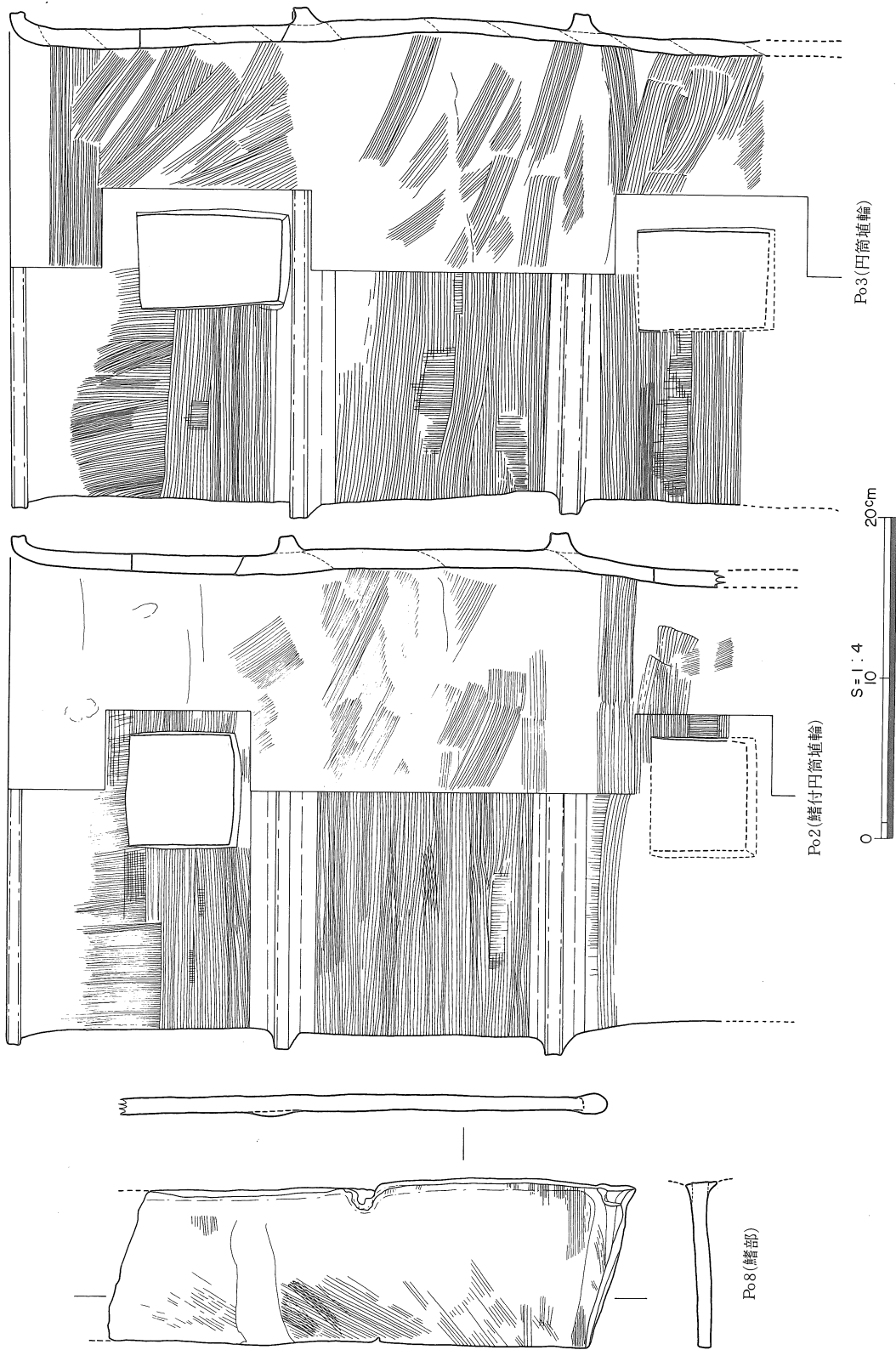
第2号石棺は共に第3層、第1層の土で埋められている。この内第3層には第1号石棺構築時に立てられたと思われる埴輪片が混入していた。以上のことから第1号埋葬施設は大型の墓壇が第1号石棺構築時に第2号石棺の構築を想定して掘り込まれており、2基の石棺を併葬する計画が古墳築造時にあったことを窺わせるものである。第1号石棺内からは豎櫛（挿図12、図版21）が出土した。石棺北側部崩壊後に棺内に流入したと思われる土をふるい中に採集したもので、18個体が確認された。調査時の状況によれば、南側小口の東隅辺りに集中してあったものと思われる。第2号石棺内からは壮年～熟年の男性の可能性が高い人骨が出土した。遺存状態は大変悪く、元位置を移動しているものと思われる。第2号埋葬施設（挿図14、図版4）は第1号埋葬施設の掘り方を切って造られた土壇墓である。平面形は長方形で、主軸をN-1.5°-Eにとる。上縁部で長軸148cm、短軸58cmの規模をもつ。床面南側部に27cm×15cmで深さ5cmの不整形な穴が掘られているが、用途等は不明である。遺物は全く出土しなかった。第3号埋葬施設（挿図15～18、図版4・5・22）は第1号埋葬施設のすぐ南東で検出された。当初尾根の稜線にほぼ平行する主軸をもつ長方形の墓壇を想定して掘り下げたのであるが、埴輪棺が想定した墓壇より約22°主軸を東に振るかたちで出土したため、土層断面（挿図15）を検討したところ、本来の墓壇は主軸（N-25°-E）を棺と一にする長軸120cm、短軸78cm、深さ60cmの規模をもつ、釣り鐘状の平面形を呈する墓壇であることが推定されるに至った。この墓壇に棺の本体（Po1）を、口縁部を北側に向け、基底部に朝顔形埴輪の口縁（Po6）を挿入して納める。本体胴部は土圧によって陥没し内部に土が充満していた。棺本体として用いられた埴輪は、鱗付円筒埴輪の上に複合口縁の壺形土器が結合した形態をとる特殊なものである（床面側の鱗は欠かれている）。棺本体を墓壇に納めた後、基底部に挿入されたPo6の中に自然石2個、埴輪（Po2）片を入れ、棺本体の両脇及び基底部上面に透し孔を塞ぐ様に縦割りにした埴輪（Po2～4、Po8）片を覆い被せ、棺本体の口縁部も同様に埴輪（Po2、Po3、Po5、Po7）片で閉塞し、棺本体内への土の流入を防ぐ。この埋葬施設に使用した埴輪は都合7個体である。鱗付のものが2個体、朝顔形埴輪が口縁部だけながら3個体、普通の円筒埴輪は2個体に止まる。棺本体を除いて全て基底部が欠落しており、それらは本来立っていたものを再利用したものと思われる。棺本体内からは副葬品等の遺物は全く出土しなかったが、墓壇のすぐ南東に基底部Po13（挿図20、図版22）が立って出土した（挿図15、図版4）。出土遺物の内第1号石棺出土の豎櫛は全て彎曲結歯式で長さ2cm程度の小型のものである。歯部は欠失する。埴輪は第3号埋葬施設以外に墳丘上、掘り割り内で出土した。円筒埴輪Po10、Po12～14、壺形埴輪Po23が墳頂部で出土した。調査時の出土ではないが、鳥取市教育委員会が表採されたPo15、Po16も付け加える。掘り割り内では円筒埴輪Po9、Po11、朝顔形埴輪Po17～20、壺形埴輪Po21～29、家形埴輪Po30が出土した。Po30は著しい風化を受けながらも下部のみが原形を止めて出土した。その四辺の内に若干の破片が落ち込んでいたが、上部の復原は不可能であった。32号墳は古墳時代中期の築造と思われる。

註1 岩石名については鳥取大学赤木三郎教授に御教示を戴いた。

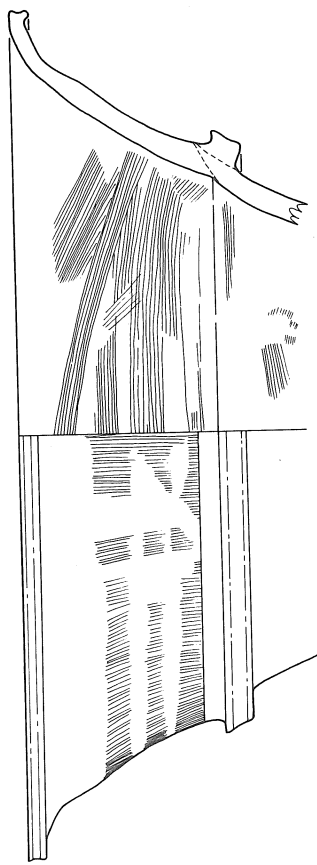


0 S = 1 : 4 20cm
 10

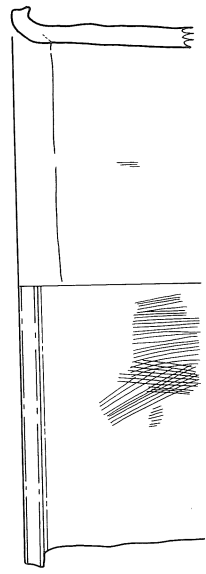
挿図16 32号墳第3号埋葬施設緒付壺円筒埴輪実測図



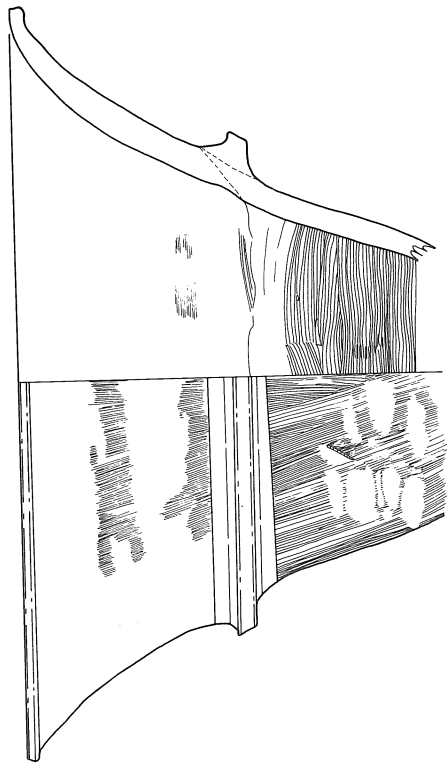
挿図17 32号墳第3号埋葬施設出土鑿付円筒埴輪・円筒埴輪実測図



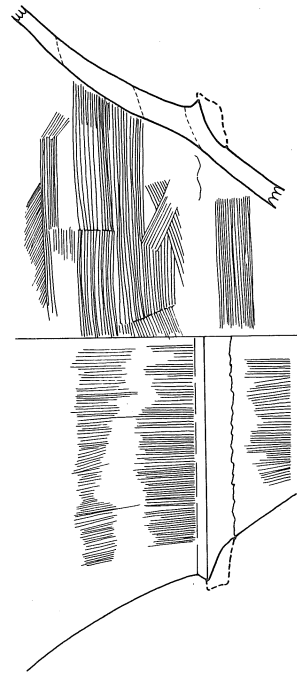
P05



P04



P06



P07

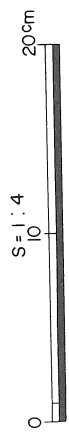


插图18 32号墳第3号埋葬施設出土植輪実測図

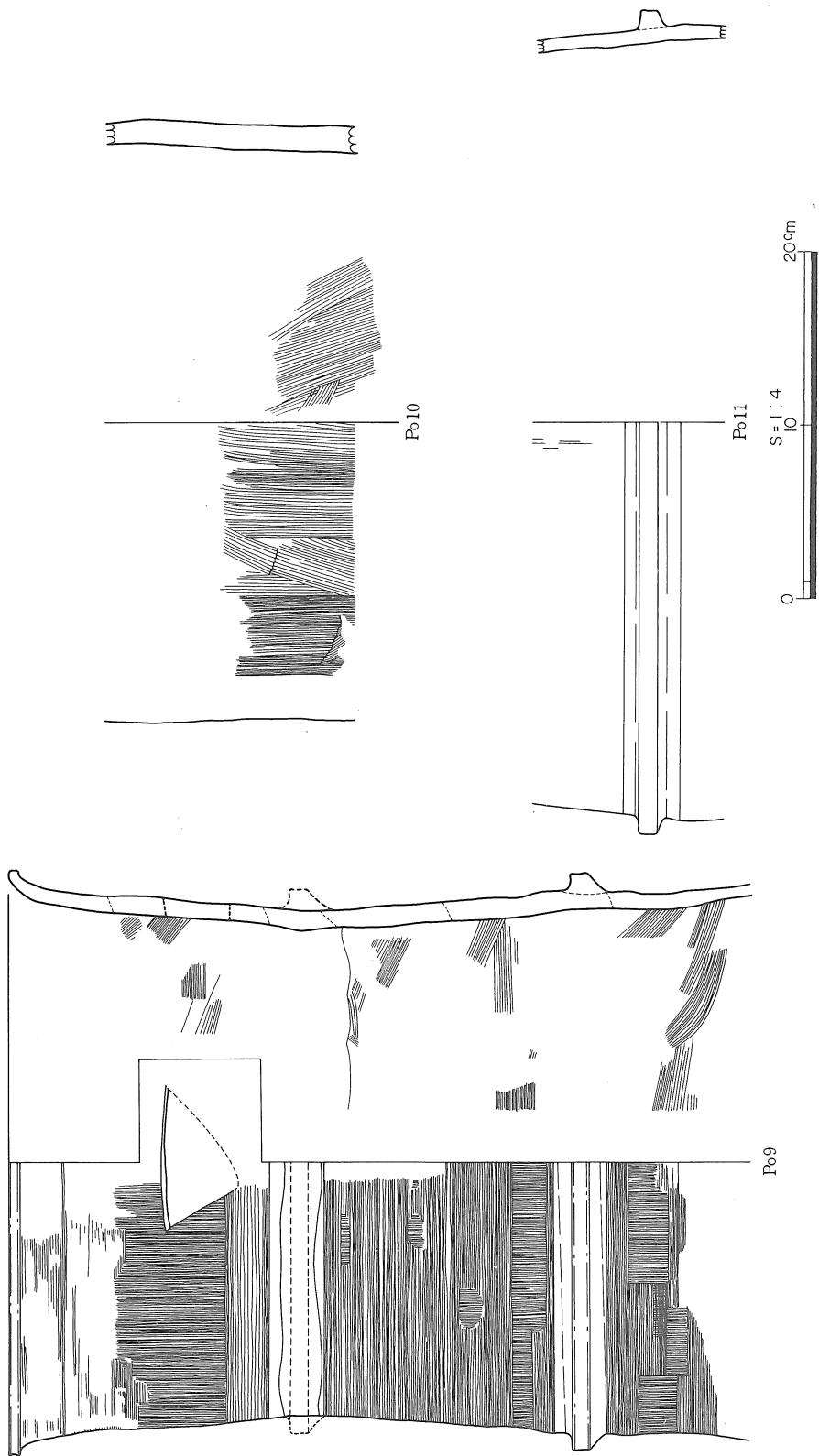
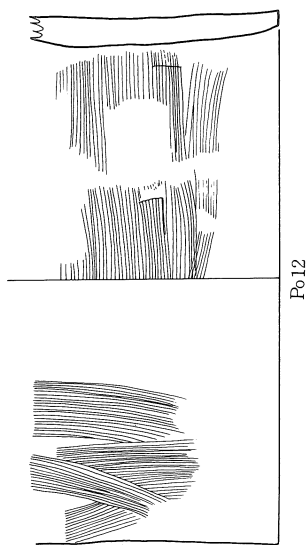
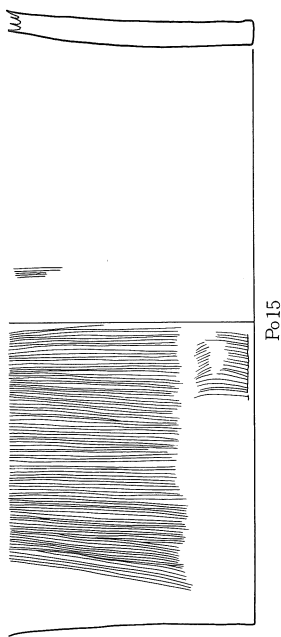


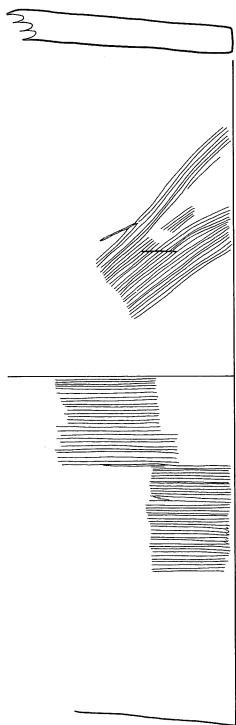
插图19 32号填出土埴輪表测图①(円筒埴輪)



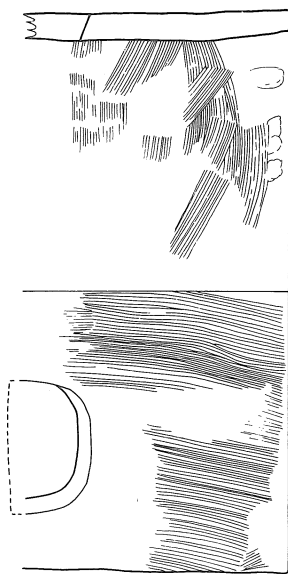
Po12



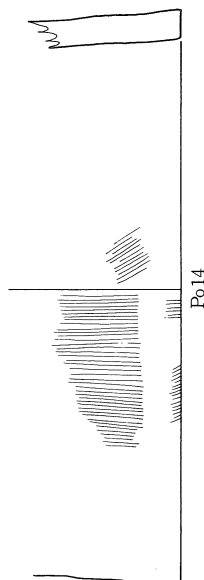
Po15



Po13



Po16



Po14

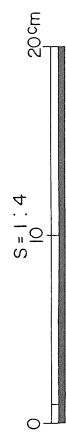


插图20 32号填出土埴輪表測图②(円筒埴輪)

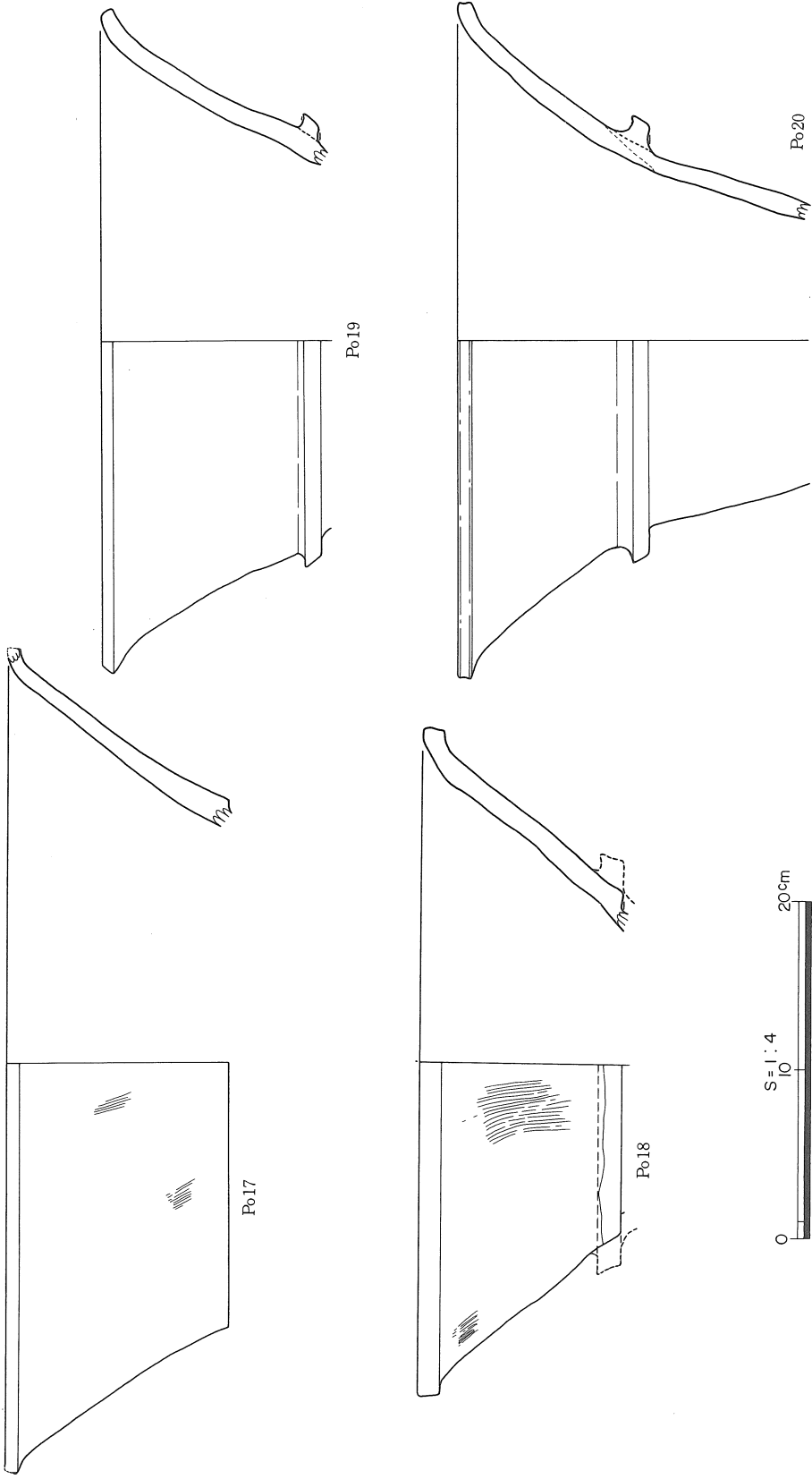


插图21 32号墳出土埴輪実測図③(朝顔形埴輪)

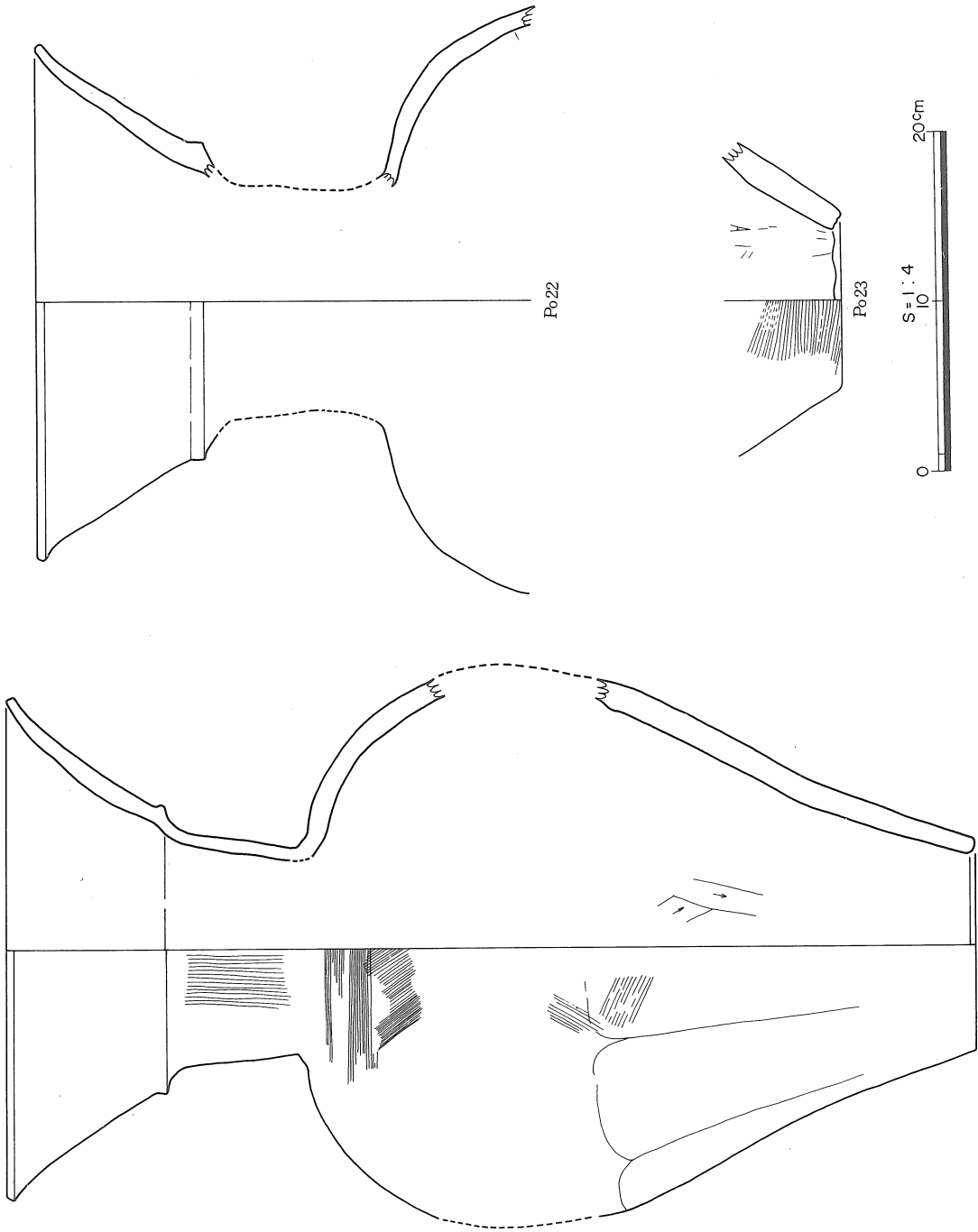


插图22 32号墳出土埴輪実測图④(壺形埴輪)

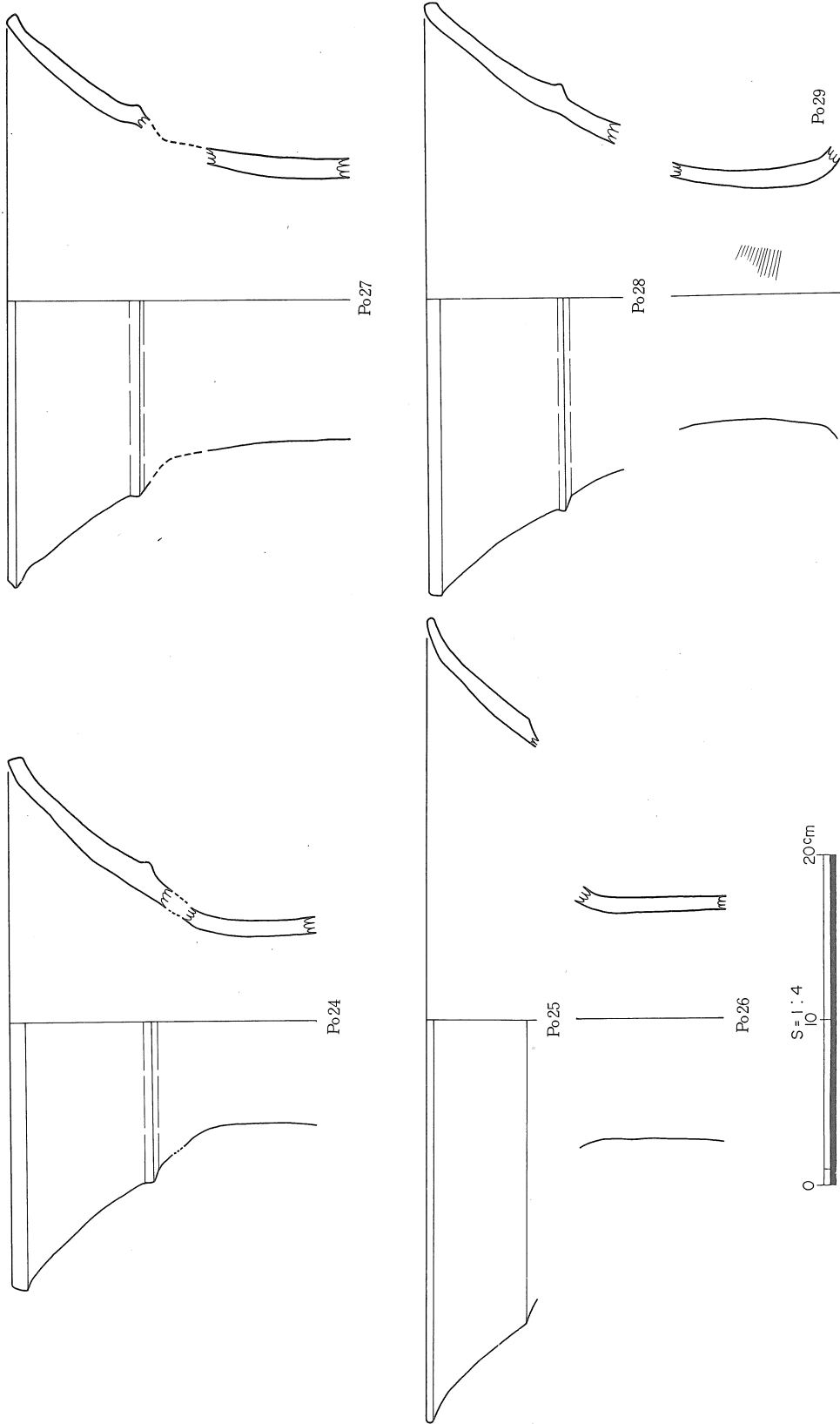
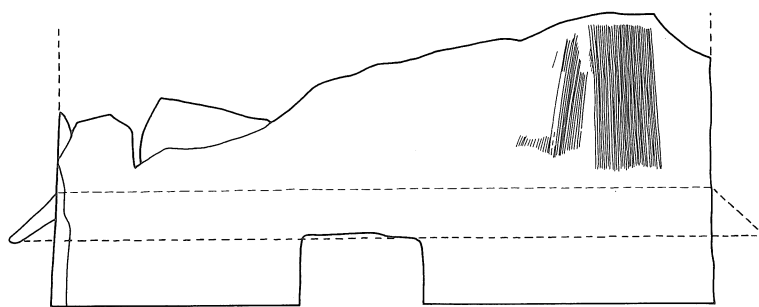
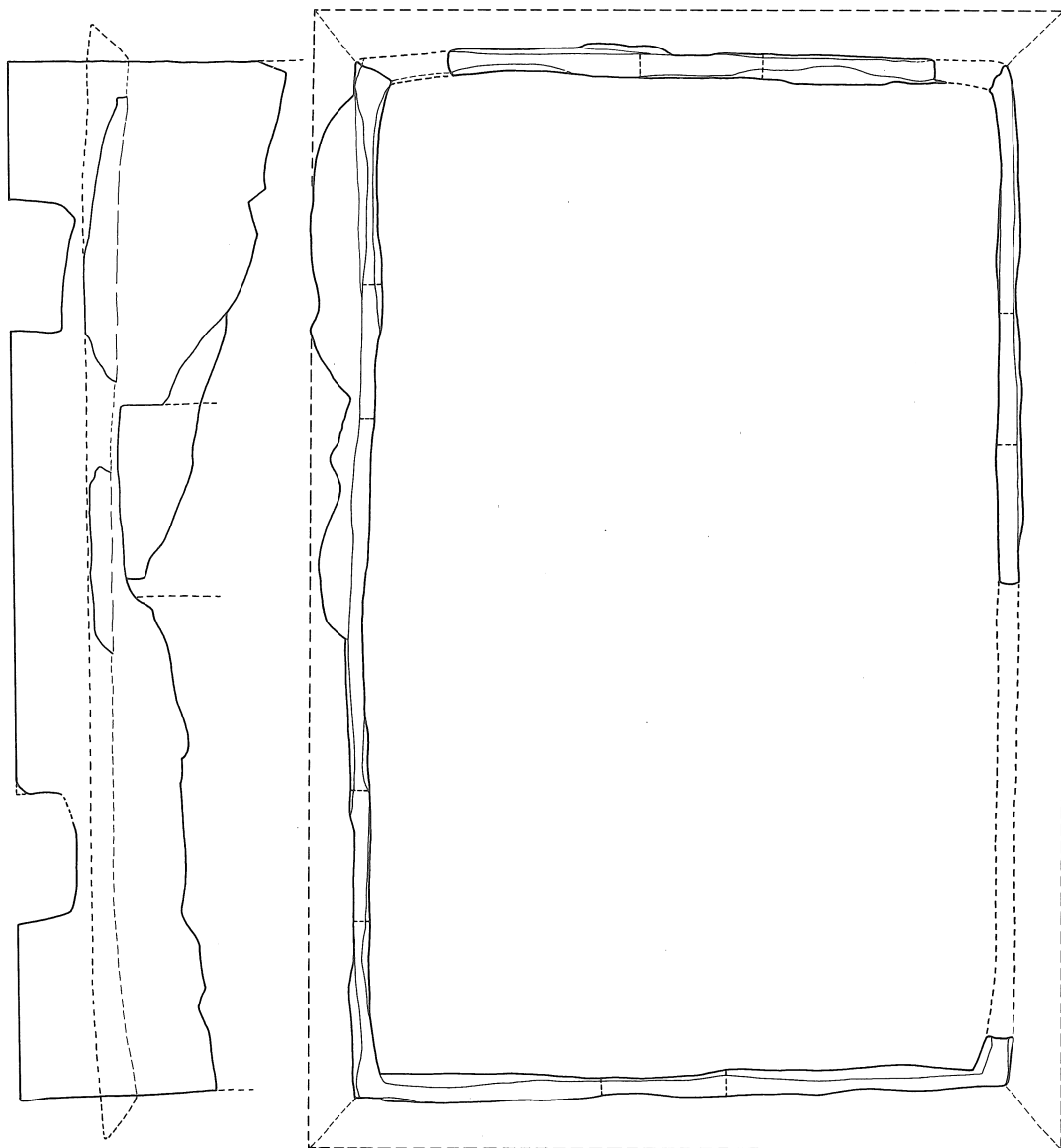


插图23 32号填出土埴輪実測图⑤(壺形埴輪)



0 S = 1 : 4 10 20cm

P630

插图24 32号墳掘り割り内出土家形埴輪実測図

遺物番号 挿入図版番号	出土遺構	器種	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径 ⑤凸帯高 ⑥器壁厚	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
Po1 16 21	32号墳第 3号埋葬 施設	罎付芭 陶埴輪。	①14.8 ②81.8 ③31.2 ④30.6 ⑤1.0 ⑥1.2	裾がやや開く第1段から直立する 胴部に至る。第4凸帯の上に蓋の 肩部より上が接合する。蓋は頸部 が短く屈曲しその上に内傾して直 く立ちあがる複合口縁となる。口 唇部に手廻面をもつ。凸帯4条。 第2・4段の対向する位置に逆三 角形透し孔。第1段はそれより少 しずれて半円透し透しを1孔穿つ。	外面一タテハケ後ヨコナデ。凸帯ハ リツケヨコナデ。蓋部は胴部ヨコハ ケ。口縁部内外面ヨコナデによる。 罎ハリツケ部には二条の沈線が残る。 罎ハリツケ後ヨコハケ・ナメハケ。 内面はヨコ・ナメハケの後、4cm おきにナデ消し。	精良。 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 灰褐色 ～淡黄 褐色。	外面に黒 斑有り。
Po2 17 21	32号墳第 3号埋葬 施設	罎付円筒 埴輪	①31.9復 ②45.0復 ③30.2 ④1.2 ⑤1.2	第2段が下方に向かってややぼま るが第3段以上は口縁部に向つて 直立する。口縁端部は凸帯状を呈 する。凸帯はよく突出し断面「M」 形。第2段と第4段に方形の透し 孔が、同方向に、それぞれ対向す る位置に2個づつ穿れる。	外面一タテハケ後ヨコハケ。凸帯の 上下・口縁部はヨコナデによりハ ケ目が消える。罎脱落部には刀子状工 具による割け縁・タテハケ・ヨ コハケがみられる。内面一ナメハ ケ・ヨコハケ・ナデがみられる。特 に口縁部は強くヨコナデされる。	精良。 砂粒を 含む。	良好	淡黄茶 褐色	外面に黒 斑有り。
Po3 17 21	32号墳第 3号埋葬 施設	円筒埴輪	①30.8 ②46.4残 ③29.9 ④1.0 ⑤1.2	直立する胴部がそのまま口縁部ま で達する。口縁端部は凸帯状を呈 する。凸帯はよく突出し断面「M」 形。第2段と第4段に長方形の透し 孔が同方向に、それぞれ対向す る位置に2個づつ穿れる。	外面一タテハケ後ヨコハケ。凸帯の 上下・口縁部はヨコナデによりハ ケ目が消える。内面一ヨコハケ・ナ メハケ及びナデがみられる。特に口 縁部は強くヨコナデされる。	精良。 砂粒を 含む。	良好	淡黄茶 褐色	外面に黒 斑有り。
Po4 18 22	32号墳第 3号埋葬 施設	円筒埴輪	①29.0復 ②9.5残 ③1.1	ほぼ直立する口縁部。口縁端部は 凸帯状を呈する。	外面一タテハケ。端部付近はヨコナ デ。内面一タテハケの後ナデ。端部 付近はヨコナデ。	精良。 砂粒を 含む。	良好	淡黄褐 色	
Po5 18 22	32号墳第 3号埋葬 施設	朝顔形埴 輪	①45.0復 ②15.2残 ③1.2 ④1.6	頸部の一部と口縁部。口縁端部は 平坦面をもつ。一条の断面「M」 形凸帯がめぐる。	外面一タテハケ後ヨコナデ。口縁端 部付近・凸帯の上下は強くナデる。 内面一ヨコハケ後ヨコナデ。口縁端 部は強くナデる。	精良。 砂粒を 含む。	良好	淡黄茶 褐色	外面に黒 斑有り。
Po6 18 21	32号墳第 3号埋葬 施設	朝顔形埴 輪	①39.7 ②22.2残 ③1.6 ④1.8	頸部と口縁部。口縁端部は平坦面 をもつ。一条の断面「M」形凸帯 がめぐる。	外面一頸部はタテハケ口縁部はタテ ハケ後ヨコナデ。口縁端部付近凸帯 の上下は強くナデる。内面一頸部は ヨコハケ。口縁部はヨコナデ後ヨ コナデ。特に口縁端部付近は強くナ デる。	良。砂 粒を含 む。	良好	淡明茶 褐色	外面に黒 斑有り。
Po7 18 22	32号墳第 3号埋葬 施設	朝顔形埴 輪	②12.9残 ③1.7	頸部の一部と口縁部。口縁端部は 破損する。脱落しているが、一条 の凸帯を有したと思われる。	外面一頸部はタメハケ後凸帯付近を ヨコナデ。口縁部はタテハケ後ヨ コナデ。凸帯付近を強くヨコナデ。	良。砂 粒を含 む。	良好	淡黄茶 褐色	
Po8 17 22	32号墳第 3号埋葬 施設	罎部	②32.5残 ④10.5 ⑥1.0	罎部。	ナメハケ・ヨコハケ後ナデ。一部 に粘土の隆起がみられる。下端部及 び本体との接合部には粘土を貼り付 ける。接合部に付けられた粘土には 接合時に使われたヨコハケがみられ る。接合面は平らな面を呈し罎作製 時において刀子状工具の使用をうか がわせる。同面にはタテハケ・ヨコ ハケがみられるがこれは接合時に本 体のハケ目が移ったものと思われる。	精良。 砂粒を 含む。	良好	淡黄茶 褐色。	
Po9 19 22	32号墳第 3号埋葬 施設	罎付円筒 埴輪	①33.8復 ②42.8残 ④32.1 ⑤1.3 ⑥1.4	裾に向つて開き気味になる胴部が 第3凸帯の上辺から口縁端部に向 つて外傾する。口縁端部には凸帯 状を呈する。凸帯はよく突出し断 面「M」形。第4段に対向する位 置に逆三角形の透し孔が2個穿れ る。楕円筒の可能性。	外面一タテハケ後ヨコハケ。口縁部 凸帯の上下はヨコナデによりハ ケ目が消える。内面一ヨコハケ・ナ メハケ及びナデがみられる。	やや粗。 やや不 良	やや不 良	淡灰黄 褐色	外面に黒 斑有り。
Po10 19 ／	32号墳墳 丘上	円筒埴輪	④34.4 ⑥1.5	直立する胴部。	外面一タテハケ。内面一ナメハケ。	やや粗。 砂粒を 多く含 む。	良好	暗黄褐 色。	
Po11 19 ／	32号墳掘 り割り内	円筒埴輪	⑤0.8 ⑥1.1	直立する胴部。器壁厚が他のもの に比して薄く、凸帯も突出度が小 さく、断面台形を呈する。	内外面とも剝離が激しく不明。	粗。砂 粒を多 く含む。	不良	淡明灰 茶褐色	
Po12 20 22	32号墳墳 丘上	円筒埴輪	②13.1残 ③28.2復 ⑥1.5	第1段、わずかに裾ひろがり。接 地面の器壁厚が薄い。	外面一タテハケ後最大下部をナデる。	やや粗。 砂粒を 含む。	良好	外面は 暗茶褐 色。内 面は褐 色。	
Po13 20 22	32号墳墳 丘上	円筒埴輪	②12.0残 ③36.9 ⑥1.6	第1段下部。	外面一タテハケ。内面一ナメハケ、 最下部をナデる部分もある。	やや粗。 砂粒を 含む。	良好	明黄花 褐色	外面に黒 斑有り。
Po14 20 ／	32号墳墳 丘上	円筒埴輪	②8.0残 ③30.2復 ⑥1.5	第1段最下部。やや裾ひろがり。	外面一タテハケ。内面一タテハケ後 ナデる。	やや粗。 砂粒を 多く含 む。	良好	暗茶褐 色。	
Po15 20 22	32号墳	円筒埴輪	②13.0残 ③32.0復 ⑥1.3	第1段下部。直立する。	外面一タテハケ後最下部をナデる。 内面一タテハケ後ナデる。	やや粗。 砂粒を 含む。	良好	黄灰茶 褐色	外面に黒 斑有り。 鳥取市教 育委員会 表採。
Po16 20 22	32号墳	円筒埴輪	②14.1残 ③30.0復 ⑥1.4	第1段。直立する。接地面より10. 4cm上に半円形の透し孔が穿れる。	外面一タテハケ。内面一ヨコハケ。 ナメハケが最下部にハケ目の後に 行なわれた指おさえがみられる。	やや粗。 砂粒を 含む。	良好	外面は 黄灰茶 褐色。内 面は淡 灰茶褐 色。	外面に黒 斑有り。 鳥取市教 育委員会 表採。

挿表1一① 32号墳出土土器観察表

遺物番号 挿入版番号	出土遺構	器種	①口径 ②器底 ③胴部口径 ④凸帯 ⑤凸帯厚	形 態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
Po17 21 23	32号墳掘り 割り内	朝顔形埴輪	①48.4復 ②13.3残 ⑤1.5	口縁部。外方へ開く。端部は風化する。凸帯は脱落している。	外面一剥離が激しいがわずかにタテハケが残る。タテハケ後ヨコナデと思われる。内面一剥離のため不明。	やや粗。大きな砂粒を含む。	不良	淡明黄褐色	
Po18 21 23	32号墳掘り 割り内	朝顔形埴輪	①39.4復 ②12.2残 ⑤1.3	口縁部。端部はやや肥厚し、平坦面をもつ。脱落してはいるが一条の凸帯を巡らしていたものと思われる。	外面一剥離が激しいがタテハケが残る。口縁端部は強くヨコナデする。内面一ヨコナデ。	粗。大きな砂粒を含む。	不良	外面は褐色。内面は暗茶褐色。	外面に黒斑有り。
Po19 21 22	32号墳掘り 割り内	朝顔形埴輪	①38.3復 ②13.5残 ⑤1.1 ⑥1.0	口縁部。端部は平坦面をもつ。一条の凸帯を巡らす。凸帯は断面台形を呈する。	外面一ヨコナデ。内面一剥離が著しく調整不明。	良。砂粒を含む。	良好	明黄茶褐色	
Po20 21 22	32号墳掘り 割り内	朝顔形埴輪	①39.8復 ②20.9残 ⑤1.2 ⑥1.5	頸部から口縁部。口縁端部は平坦面をもつ。一条の凸帯を巡らす。凸帯は、断面台形を呈する。	外面一ヨコナデ。内面一ヨコナデ。	良。大きな砂粒を含む。	良好	暗黄茶褐色	外面に黒斑有り。
Po21 22 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	①29.1復 ②36.8推 ③12.3復 ⑥1.5	底部・肩部・頸部・口縁部が残る。胴部は欠損しているため実測図では推測線と破線で入れた。底部からわずかに外反しなから開き気味に胴部に向う。肩部は口径より張り丸味をもって頸部に至る。頸部は筒状で口縁部に向ってやや外傾する。口縁部は外方へ開き、下部に稜をもつ。口縁端部は平坦面をもつ。	外面一底部上側はハケ目の後板状工具による整形がみられる。肩部にヨコハケ・ナメハケ・頸部にタテハケを施す。口縁部は剥離のため調整不明。内面一底部上側、明瞭ではないが、上→下へのヘラズリがみられる。頸部・口縁部は剥離のため不明である。	やや粗。大きな砂粒を含む。	やや不良	口縁部・頸部・肩部は内外面明黄茶褐色。底部は外面淡黄茶褐色、内面淡黄茶褐色。	肩部外面に黒斑有り。
Po22 22 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	①30.0復 ⑥1.3	口径より張る肩部。口縁部は外方へ開き、下部に稜をもつ。端部は平坦面をもつ。	外面一剥離のため不明。内面剥離のため不明。	良。大きな砂粒を含む。	良好	明黄茶褐色	
Po23 22 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	②7.0残 ③10.0復 ⑥1.6	底部。	外面一ヨコハケ。内面一粘土紐を巻く時に生じたと思われるしわがみられる。	良。大きな砂粒を含む。	良好	外面は淡褐色。内面は褐色。	
Po24 23 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	①31.9復 ②18.6残 ⑥1.5	頸部と口縁部。口縁部は外方へ開き下部に稜をもつ。端部は平坦面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	良。大きな砂粒を含む。	良好	淡明黄茶褐色	
Po25 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	①48.6復 ②7.0残 ⑥1.1	口縁部。広く外方へ開き、下部に稜をもつ。端部は丸くおさまる。	内面ともヨコナデ。	やや粗。大きな砂粒を含む。	良好	淡明黄茶褐色	
Po26 23 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	⑥0.9	頸部。	内外面ともヨコナデ。	良。砂粒を含む。	良好	淡明黄茶褐色。	
Po27 23 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	①33.8復 ⑥1.3	頸部と口縁部。わずかに外反気味の頸部。口縁部は外方へ開き、下部に稜をもつ。口縁端部は平坦面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	精良。砂粒を含む。	良好	淡明黄茶褐色	
Po28 23 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	①35.6復 ②11.8残 ⑥1.3	口縁部。外方へ開き下部に稜を有する。端部は平坦面を持つ。	内外面ともヨコナデ。	精良。砂粒を含む。	良好	淡明黄茶褐色	
Po29 23 23	32号墳掘り 割り内	壺形埴輪	⑥1.3	頸部	内面一ヨコハケが残る。	精良。砂粒を含む。	良好	淡明黄茶褐色	
Po30 24 22	32号墳掘り 割り内	冢形埴輪	①55.4× 35.9 ②15.3残 ⑥2.0	上部を欠損する。横長の長方形の透し孔が上部平側に2個つつ(1個は1個のみ残る)、妻側に1個つつ穿れる。凸帯はスカート状の凸帯が一条接地面から4cmの辺りを四辺巡っていたものと思われる。出入口は平側の一辺に認められる。屋根等形態は不明である。	外面一剥離が激しいが、一部にタテハケが残る。内面一剥離が激しいが、一部にタテハケが残る。	やや粗。大きな砂粒を含む。	淡黄灰褐色		

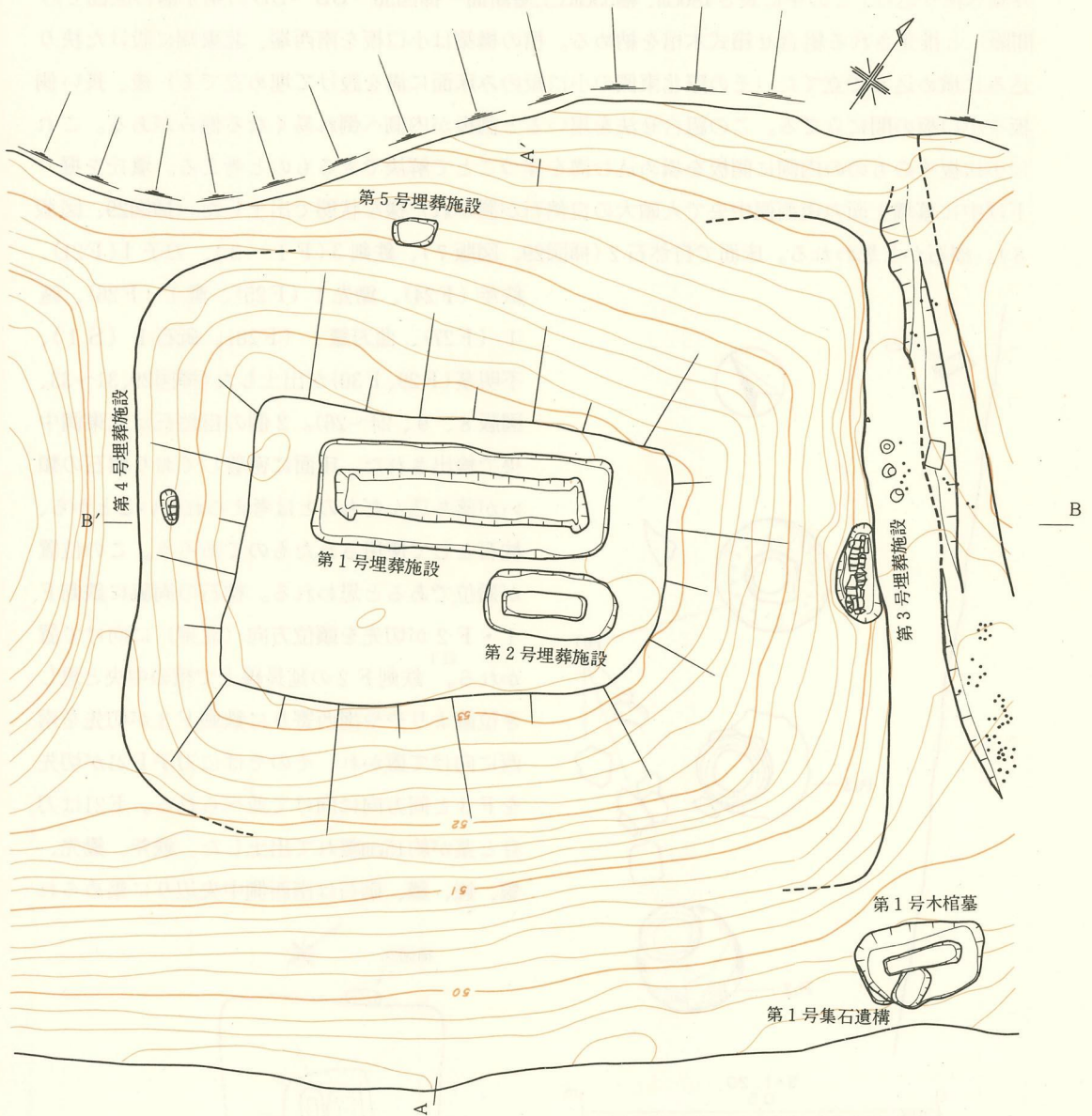
挿表1-② 32号墳出土土器観察表

遺物番号	結縛部長さ	幅	厚さ	備 考	遺物番号	結縛部長さ	幅	厚さ	備 考
1	1.7	2.0	0.1 0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆が一部剥離。遺存状態やや良。	10	1.9	2.0	0.2 0.3	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆の剥離が目立つ。遺存状態やや不良。
2	2.05	2.1	0.1 0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆はやや厚い。遺存状態良好。	11	1.9	2.1	0.2 0.25	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆の剥離が目立つ。遺存状態やや不良。
3	2.0	2.25	0.1 0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆はやや薄い。遺存状態良好。	12	※1.8	※2.0	※0.2 ※0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆の剥離が目立つ。遺存状態やや不良。
4	2.0	2.2	0.1 0.15	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆が一部剥離。遺存状態やや良。	13	※1.6	※1.6	※0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆が大きく剥離。遺存状態不良。
5	1.8	2.1	0.2 0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆が一部剥離。遺存状態やや良。	14	※1.4	※1.8	0.1 0.15	彎曲結菌式。結縛部上部漆のみ残存。漆が半面1/2程剥離。遺存状態不良。
6	1.8	2.0	0.15 0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆はやや薄く一部剥離。遺存状態やや良。	15	※1.1	1.9	2.0	彎曲結菌式。結縛部下部漆のみ残存。遺存状態不良。
7	1.85	2.1	0.15 0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆が一部剥離。遺存状態やや不良。	16	1.9	※1.5	0.1 0.2	彎曲結菌式。結縛部1/2漆のみ0.2残存。遺存状態不良。
8	1.7	2.0	0.1 0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。漆の剥離が目立つ。遺存状態不良。	17	※1.2	※1.4	0.2	彎曲結菌式。結縛部分の漆のみ残存。遺存状態不良。
9	※1.8	※2.1	0.15 0.3	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。半面漆が大きく剥離。遺存状態不良。	18	※1.5	※1.3	0.2 0.2	彎曲結菌式。結縛部漆のみ残存。1/3程欠損。遺存状態不良。

挿表2 32号墳第1号埋葬施設第1号石棺出土豎櫛一覧表(※印 残存値)

第3節 里仁33号墳 (挿図25~45、図版7~13、24~28)

里仁33号墳は北東へのびる尾根上に位置し、北東側を32号墳、南西側を34号墳と接する。墳頂部の標高は53mである。墳丘は、尾根の主軸線に直交する掘り割りを穿つことにより南西辺、北東辺を形成した後、地山を整形し盛土を施して墳形を整えるものである。盛土は墳頂部で最大0.72mの厚さとなる。墳丘の南東側と北西側は墳丘面がそのまま急な斜面となって降ってゆく為明瞭な墳裾線を形成しない。墳形は北西側を底辺とした梯形を呈する方墳で、狭い尾根を一杯に利用している。主軸はN-59°-Eをとる。墳丘の規模は南西側辺で12m、北東側辺で14m北東側掘り割り底面から墳頂部まで3.2mの高さを測る。墳頂部は長さ9.5m、最大幅6.4mを測る梯形(墳

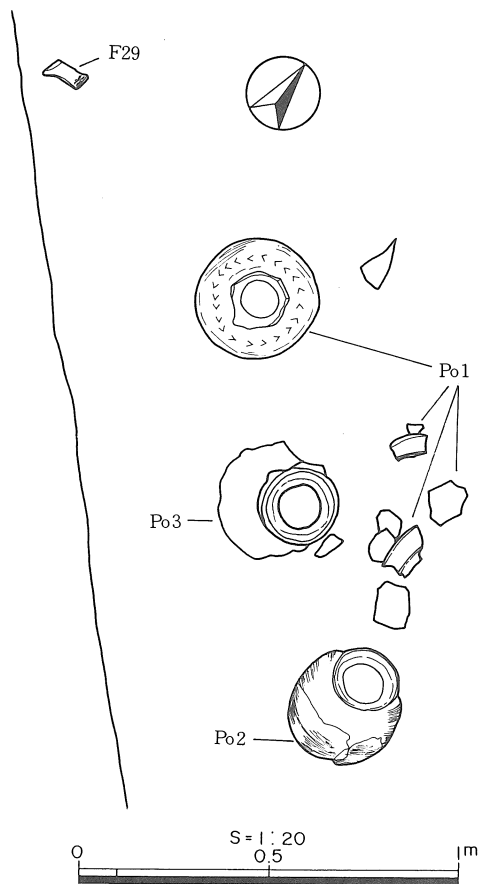


挿図25 33号墳墳丘実測図

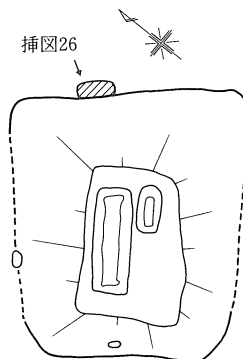
丘とは逆方向に広がる)の平坦面をもつ。掘り割りは北東側で顕著であるが、南西側で浅いものとなっており、北東側で幅1.4m、深さ1.0m、南西側で幅0.8m、深さ0.4mを測る。この内北東側の掘り割りは32号墳のそれと切り合う。土層断面(挿図28)より33号墳の掘り割り内埋土は32号墳築造時に掘り込まれている。埋葬施設は墳頂部で墳丘主軸線を挟んで2基、南東側以外の3辺の墳裾辺りでそれぞれ1基づつ、都合5基検出された。

第1号埋葬施設(挿図29~33、図版8、9、24~26)は墳頂部の北西側で検出された。主軸はN-58°-Eをとり墳丘のそれとほぼ同じくする。上縁部で長さ623cm、幅215cm、深さ27cm(残存)の細長い墓壇をさらに長さ540cm、幅109cm、深さ60cm前後掘り込む。南西端、北東端は側面の壁を外側へ挟り込む。この中に長さ480cm、幅55cm(土層断面—挿図30—BB'~DD'の第7層の床面での間隔)と推定される組合せ箱式木棺を納める。棺の構築は小口板を南西端、北東端に設けた挟り込みに塙め込んで立てた(その際北東側の小口板のみ床面に溝を設けて埋め立てる)後、長い側板を小口板の間に立てる。この組合せ法を用いると側板が内側へ倒れ易くなる憾みがある。これは小口板そのものの内側に側板を塙め込む溝を穿つことで解決できるものとする。墳丘を掘り下げ中に墓壇上面の南西側中央で人頭大の自然石が置かれた様な状態で出土した(挿図29、図版8)。標石かと思われる。床面で自然石2(挿図29、図版7)、鉄剣3(F1~3)、刀子1(F21)、

鉄斧(F24)、鋤先1(F25)、鑿1(F26)、鉈1(F27)、曲刃鎌1(F28)、砥石1(S1)、不明茎(F29、F30)が出土した(挿図29、31~33、図版8、9、24~26)。2個の自然石は北東側中央で検出された。床面に密着しており標石の類いが落ち込んだものとは考えられないことから、枕石として使用されたものであろう。この位置が頭位であると思われる。枕石の両脇に鉄剣F1・F2が切先を頭位方向(北東)に向けて置かれる。鉄剣F2の延長線上で棺の中央と思しき位置よりやや南西寄りに鉄剣F3が切先を南西に向けて置かれ、そのそばに刀子F21が切先をF3と同方向に向けて並べられる。F21は刀身と茎が約15cm離れて出土した。鉄斧、鋤先、鑿、鉈、鎌、砥石は南西側中央辺りに集められ

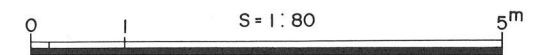
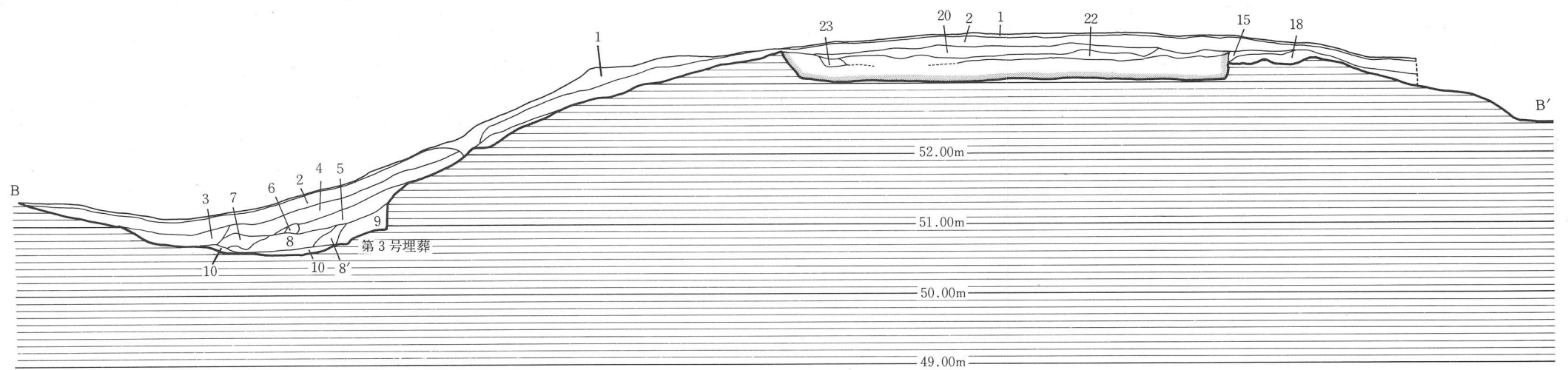
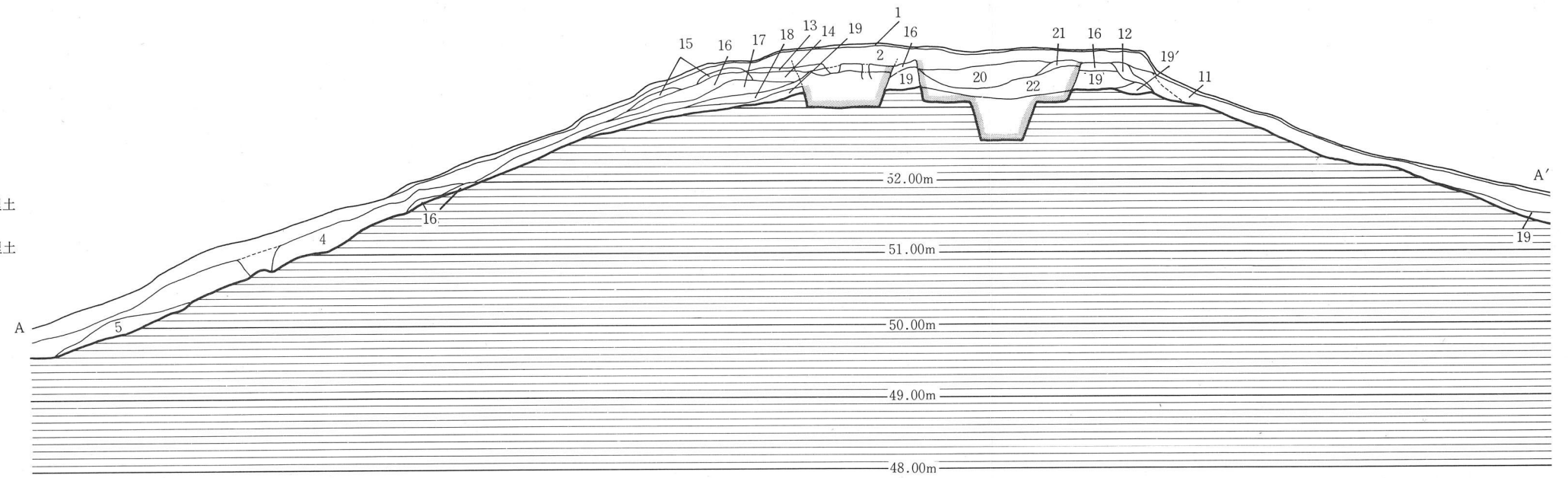


挿図26 33号墳掘り割り内壺形土器・鉄斧出土状況図

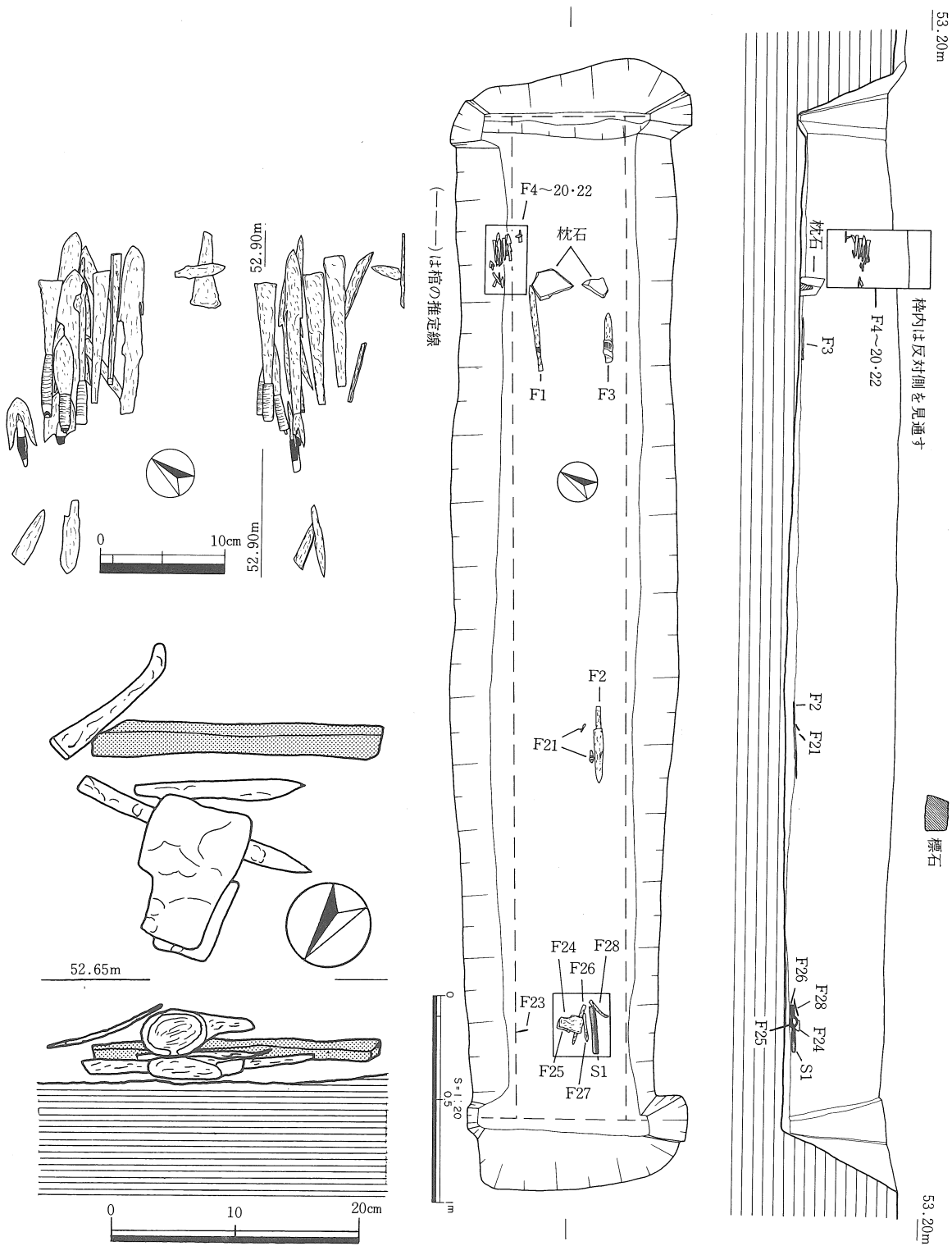


挿図27 33号墳墳丘模式図

- 1. 表土(腐植土)
 - 2. 暗灰黄色土(ややしまる、流出している) — 盛土
 - 3. 淡暗褐色土
 - 4. 黒色土(しまりが悪い)
 - 5. 淡暗橙褐色土(よくしまる)
 - 6. 地山ブロック
 - 7. 淡暗灰褐色土(しまりが悪い)
 - 8. 暗橙褐色土
 - 8'. 暗橙褐色土(8よりやや暗い)
 - 9. 淡黄灰褐色土(しまりが悪い)
 - 10. 淡黄褐色土
 - 11. 淡褐色土(極めてしまりが悪い)
 - 12. 褐色土(極めてしまりが悪い)
 - 13. 淡橙褐色土(よくしまる)
 - 14. 淡暗橙褐色土(しまりが悪い)
 - 15. 暗橙褐色土(よくしまる)
 - 16. 暗橙茶褐色土(よくしまる)
 - 17. 茶褐色土(よくしまる)
 - 18. 赤褐色土(よくしまる)
 - 19. 暗褐色土(よくしまる)
 - 19'. 暗褐色土(19よりしまりが悪い)
 - 20. 暗灰褐色土(黒斑を含みしまりが悪い)
 - 21. 淡灰黄色土(ややしまる)
 - 22. 淡灰茶褐色土(しまりが悪い)
 - 23. 暗灰茶褐色土
 - 24. 淡暗橙褐色土(ややしまりが悪い)
 - 25. 暗茶灰褐色土(しまりが悪い)
- 32号墳掘り割り内埋土
 - 掘り割り内埋土
 - 盛土崩落土
 - 盛土
 - 第1号埋葬施設埋土
 - 第2号埋葬施設埋土



挿図28 33号墳墳丘土層断面図



挿図29 33号墳第1号埋葬施設遺物出土状況図

た様子で出土した。鉄斧と鋤先は重なり、その下に鑿が置かれる。刃先の方向は鉄斧、鎌が南東、鉈が南西、鋤先、鑿が北東と統一性がない。頭位付近北西側の掘り込み肩から20cm下った辺りで鉄鏃(F 4~20)が出土した(挿図29、31、32、図版9、24、26)。全て平根に属し有頸のものが大部分を占め無頸のものは2

点に止まる。内側へ流れ込む状態で出土したが、本来は切先を北東に向けて整然と並べられていたものと思われる。出土した位置、レベルより鉄鏃は棺がある程度埋められた時点で棺に添える様に置かれたものであると考える。以上の様に第1号埋葬施設より出土した鉄器はバラエティーに富んでいるのであるが、その配置は遺体の両脇に武器、足位方向に農工具というものである。

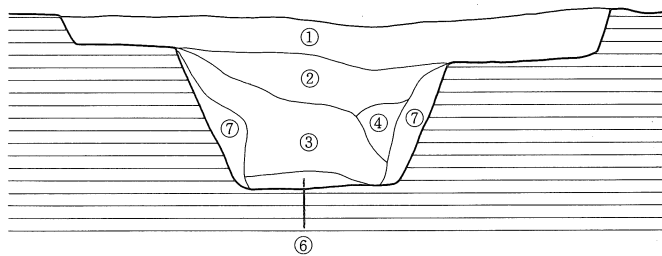
第2号埋葬施設(挿図34、35、図版10、26)は墳頂部の南東側で検出され、第1号埋葬施設に寄り添う様に位置する。第1号埋葬施設が墳頂部平坦面の中央部ではなく北西側に寄せて設けられ、第2号埋葬施設はこれによって空く部分の北東側を占めている。この事から第2号埋葬施設構築は第1号埋葬施設構築時に考慮に入れられていたものと思われる。第2号埋葬施設は主軸をN-60°-Eにとり、北西側が膨らむ隅丸長方形を呈

する。墓壇は長さ285cm、幅140cmの規模でほぼ垂直に20cm以上掘り込まれた後テラスを造り、さらに長さ183cm、幅55cmの平面規模で26cm前後掘り込まれる。土層断面に痕跡は残っていないが、箱式木棺が納められたと考えられる。墓壇の北東側小口部には拳大の自然石が6個、中央がやや

- ① 暗橙褐色土(径3mmの小礫を多量に含みややしまる)
- ② 暗橙茶褐色土(径3mmの小礫を含みしまりがわるい)
- ③ 暗灰茶色土(径3mmの小礫を含みしまりがわるい)
- ④ 暗黄褐色土(しまりがわるい)
- ⑤ 茶橙色土(径3mm程の小礫を含みしまりがわるい)
- ⑥ 淡黄茶色土
- ⑦ 淡黄橙色土

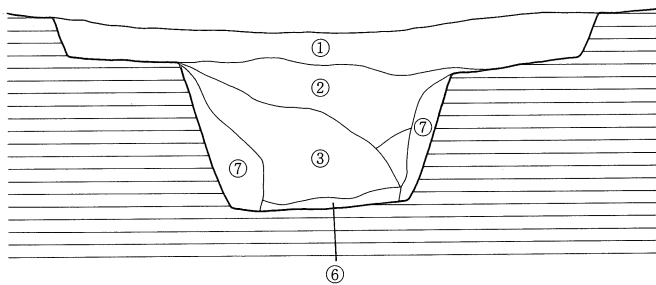
B 53.50m

53.50m B'



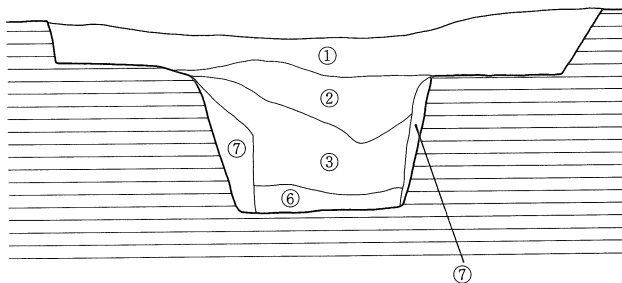
C 53.50m

53.50m C'



D 53.50m

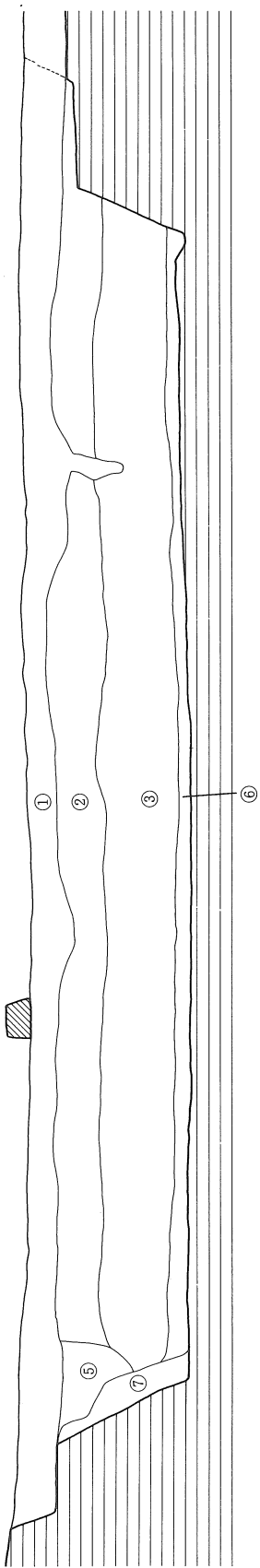
53.50m D'



A 53.50m

53.50m A'

標石



B

C

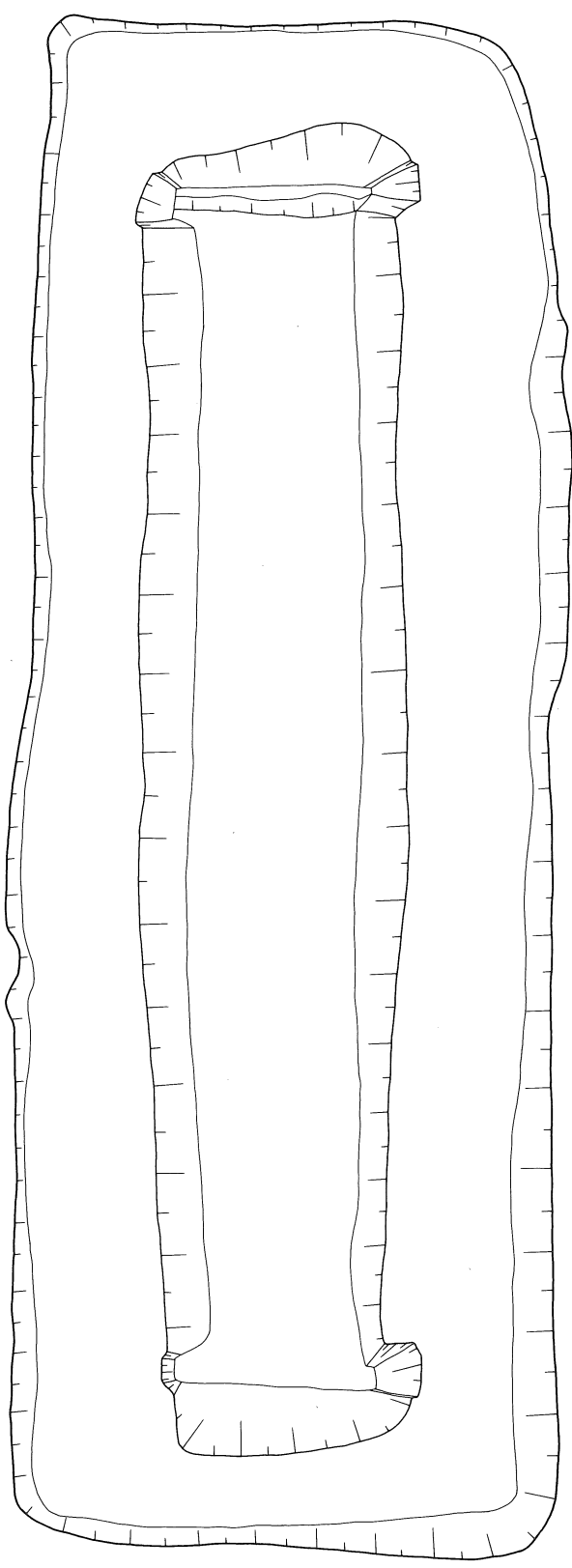
D

A'

B'

C'

D'



A

插图30 33号墳第1号埋葬施設実測図

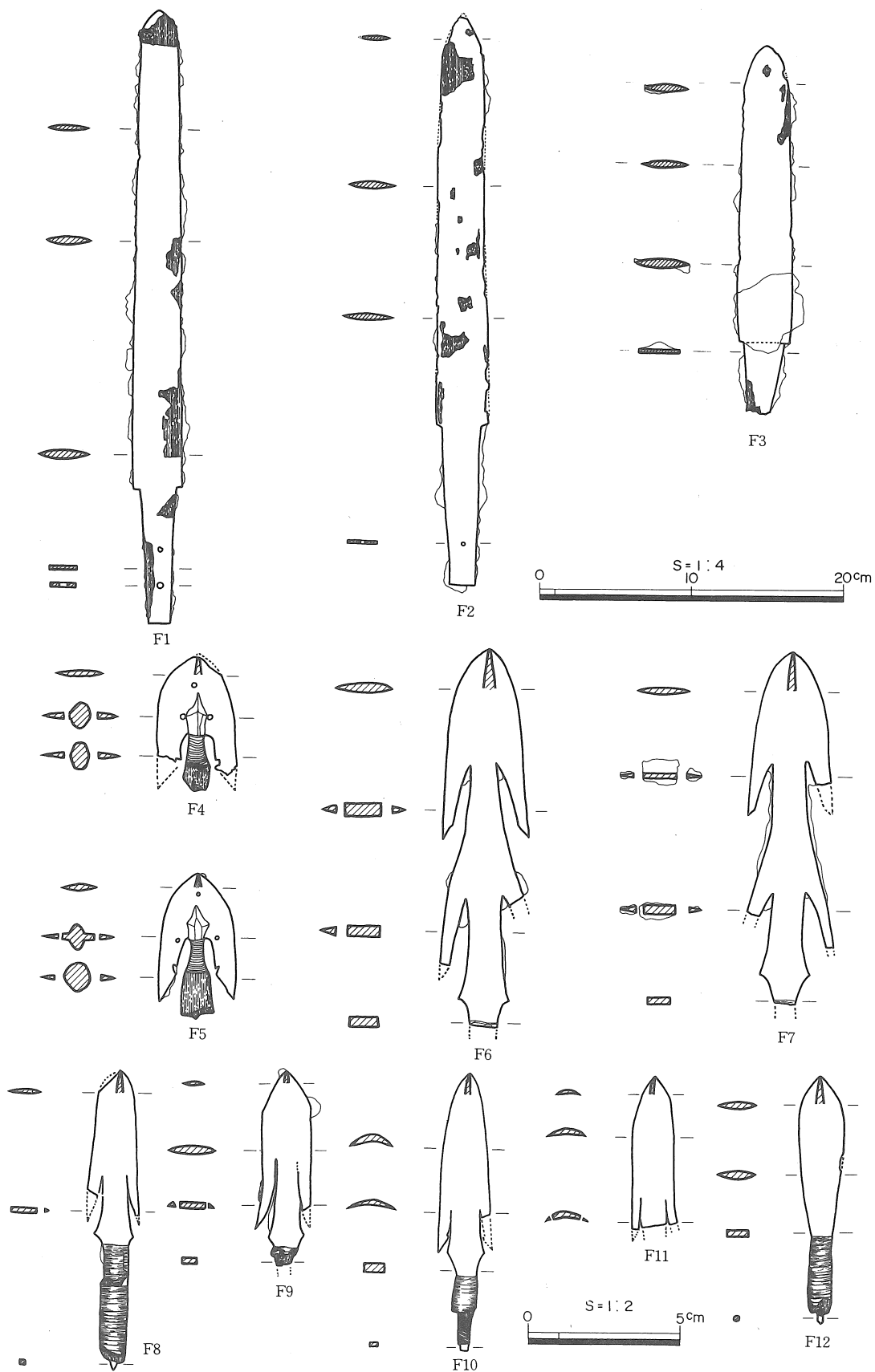


插图31 33号墳第1号埋葬施設出土鉄器実測図①

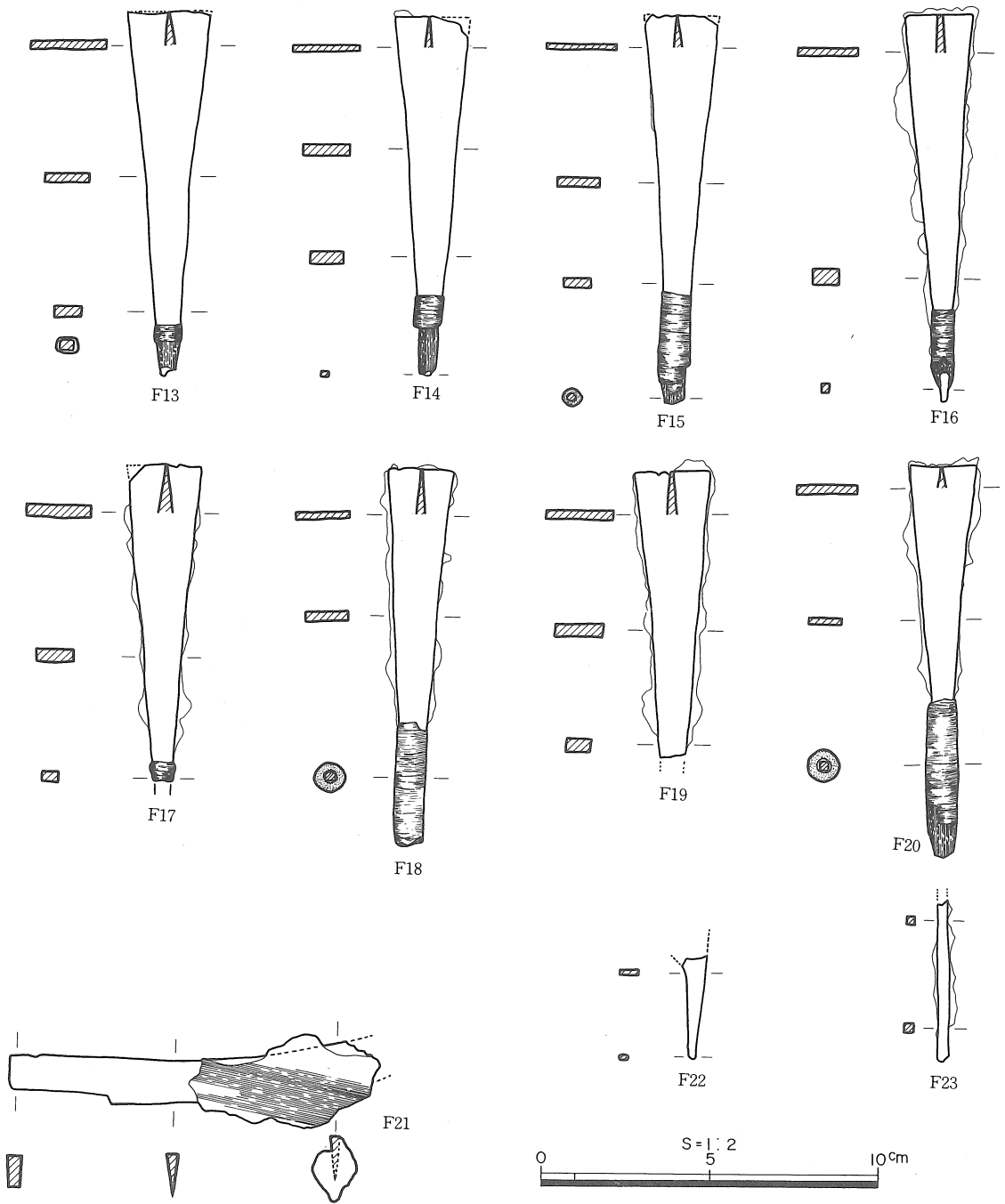


插图32 33号墳第1号埋葬施設出土鉄器実測図②

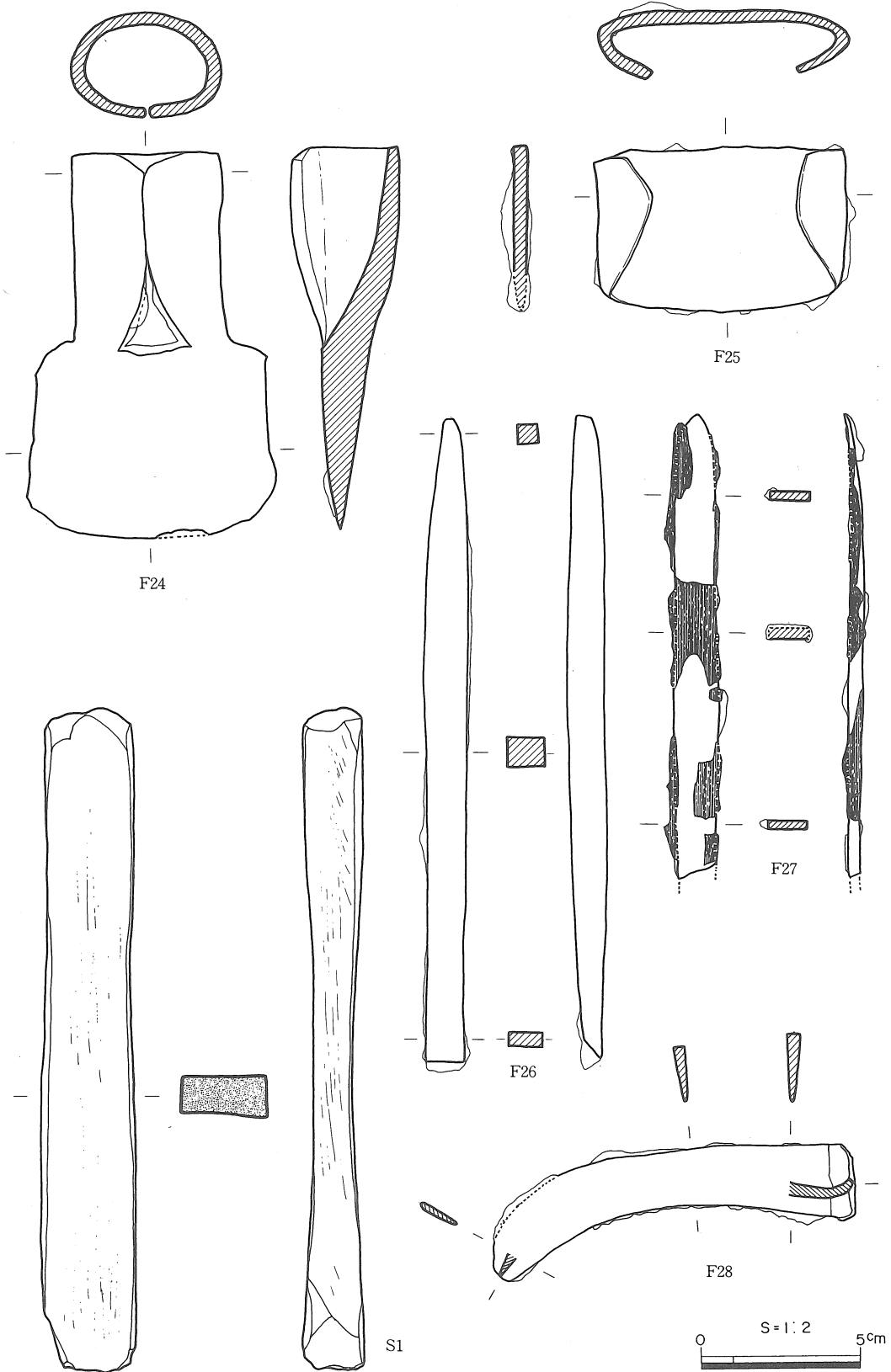
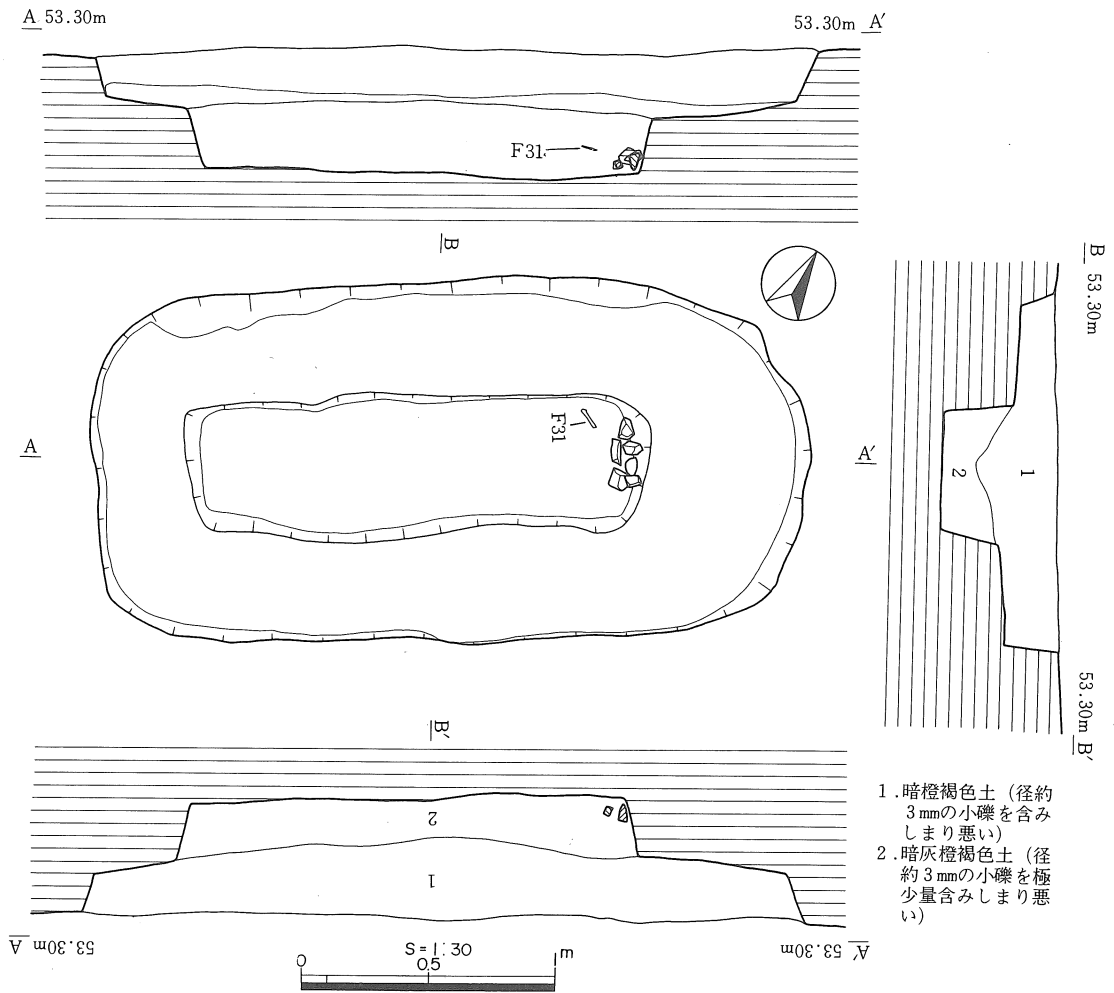
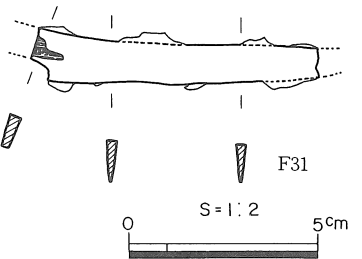


插图33 33号墳第1号埋葬施設出土鉄器類実測図③



挿図34 33号墳第2号埋葬施設実測図

窪む様に集め置かれていた。枕として使用されたもの（枕石）であり、この位置が頭位であると思われる。枕石の10cm程西寄り、北西壁際で刀子（F31—挿図35、図版26）が切先を内側へ向けて出土した。床面から10cm以上浮いており、第1号埋葬施設における鉄鏟と同様に棺がある程度埋められた時点で切先を頭位方向へ向けて棺に添えられたもので、棺材の腐朽に伴って内側へ落ち込んだものと思われる。

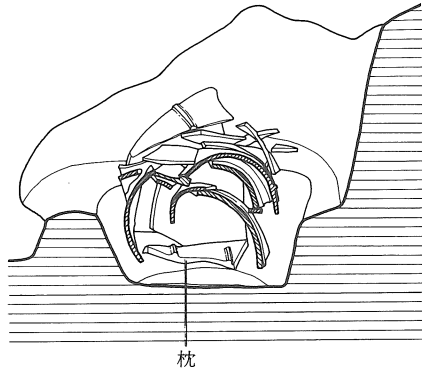


挿図35 33号墳第2号埋葬施設出土鉄器実測図

第3号埋葬施設（挿図36、42～45、図版11、27、28）は北東側墳裾部で検出された埴輪を使用する埋葬施設である。墳丘斜面を50cm前後掘り込んで平坦面を造った後に長さ182cm、最大幅56cm、深さ18cm前後の南東側が広がる隅丸長方形の墓壇を掘り込み、墓壇の上面を縦割りにした埴輪（Po4～14）で覆うものである。主軸はN-43°-Wをとる。墓壇の南東側はPo6、Po9片を小口部に立てた後、下からPo7、Po8、Po6を主に用いて覆う。北西側はPo5を、中央部はPo4、Po9を主に用いて覆う（挿図42～45、図版27）。墓壇を覆う埴輪片を取り上げたところ、南東側小口部

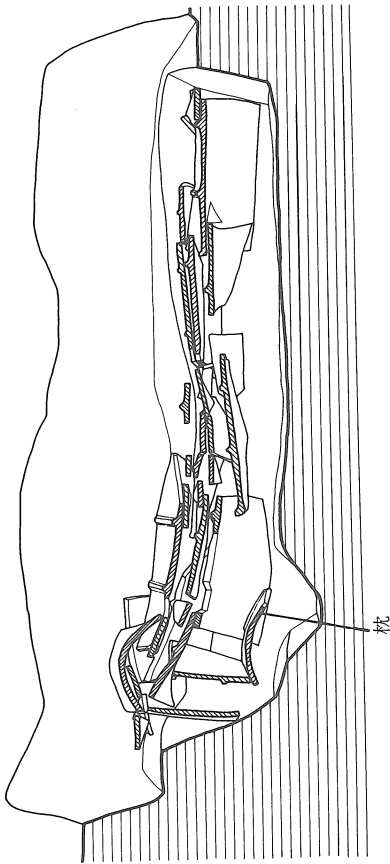
A 51.50m

51.50m A'



枕

51.50m B'



枕

B 51.50m

A

A'

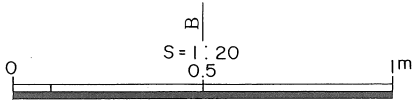


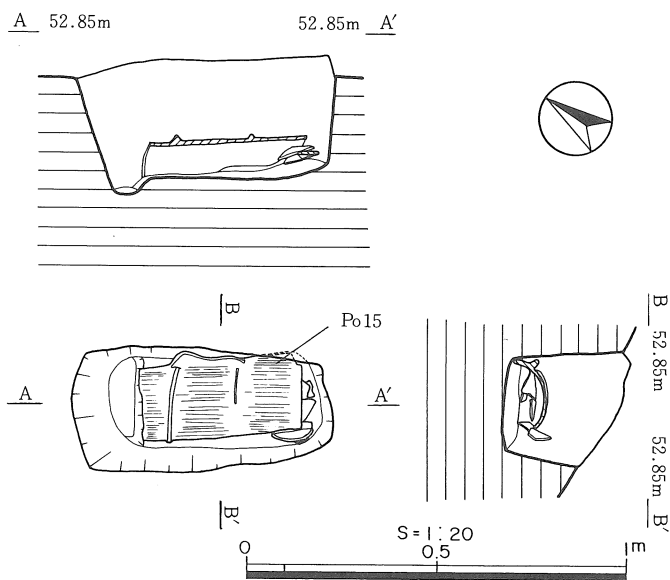
插图36 33号墳第3号埋葬施設実測図

でPo6片が外面を上に向けて置かれていた(図版11)。やや浮いてはいるが(挿図36)、出土状況から枕と考える。頭位はこの位置であろう。枕の下で長さ30cm、幅30cm前後の溝状の掘り込みを検出した。用途等は不明である。第3号埋葬施設に使用された埴輪は基底部を残すものがないことから、本来立っていたものを再利用したものと考えられる。33号墳の墳丘は埴輪をもった形跡が全く見られないので、これらの埴輪は他の古墳から運んだものとする。

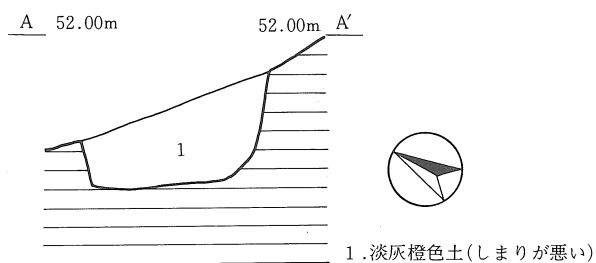
第4号埋葬施設(挿図37、46、図版12、28)は南西側墳裾部で検出された。上縁部で長さ68cm、最大幅33cm、深さ25cm前後の北西側が広がる隅丸長方形の墓壇内に縦割りにした埴輪片(Po15—挿図46、図版28)が外面を上に向けて入っていた。主軸はN-36°-Eをとる。南東側小口部は同じ埴輪を打ち割った破片を用いて塞ぐ。埴輪片を取り上げたところ、北西側小口部床面で長さ21cm、幅9cm、深さ7cm前後の半月状の掘り込みを検出した。

第5号埋葬施設(挿図38、図版12)は北西側の墳裾と思しき位置で検出した。上縁部で長さ104cm、最大幅41cm、深さが最大20cmの素掘りの土壇墓である。平面形は北東側が狭まるいびつな隅丸長方形で、主軸はN-54°-Eをとる。遺物は全く出土しなかった。

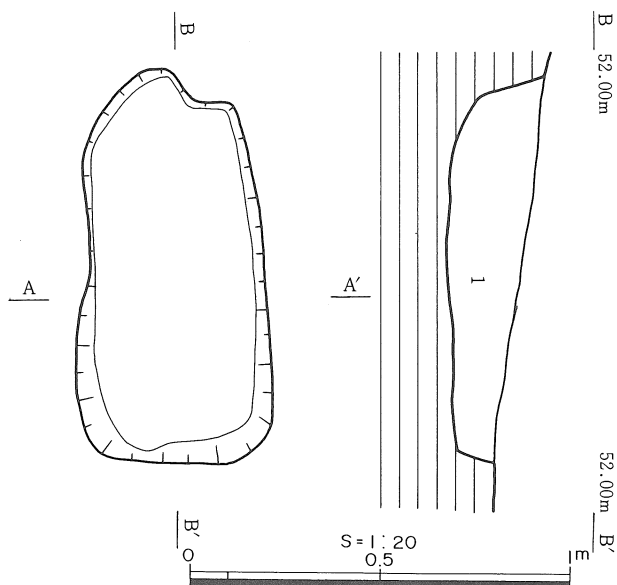
北東側掘り割り内でPo1~3(挿図40、41、図版28)が22~30cmの距



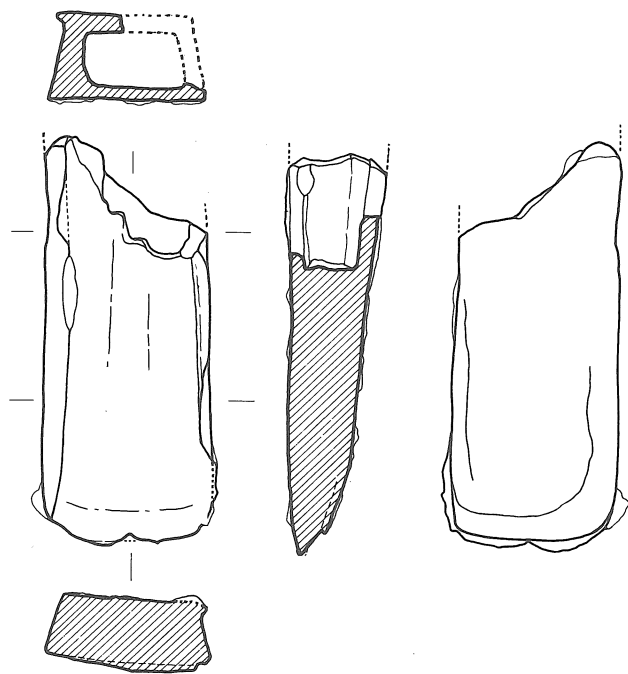
挿図37 33号墳第4号埋葬施設実測図



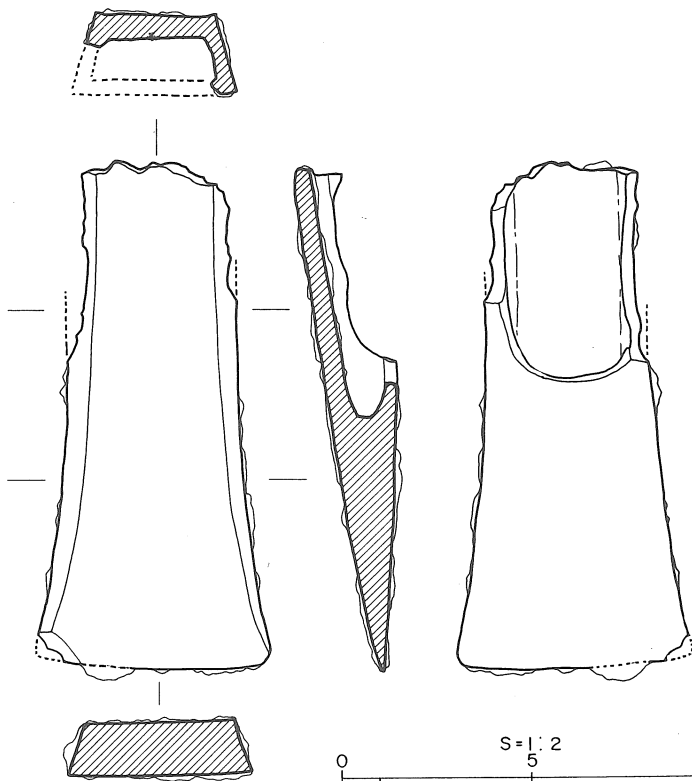
1. 淡灰橙色土(しまりが悪い)



挿図38 33号墳第5号埋葬施設実測図



F29



F30

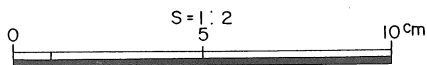
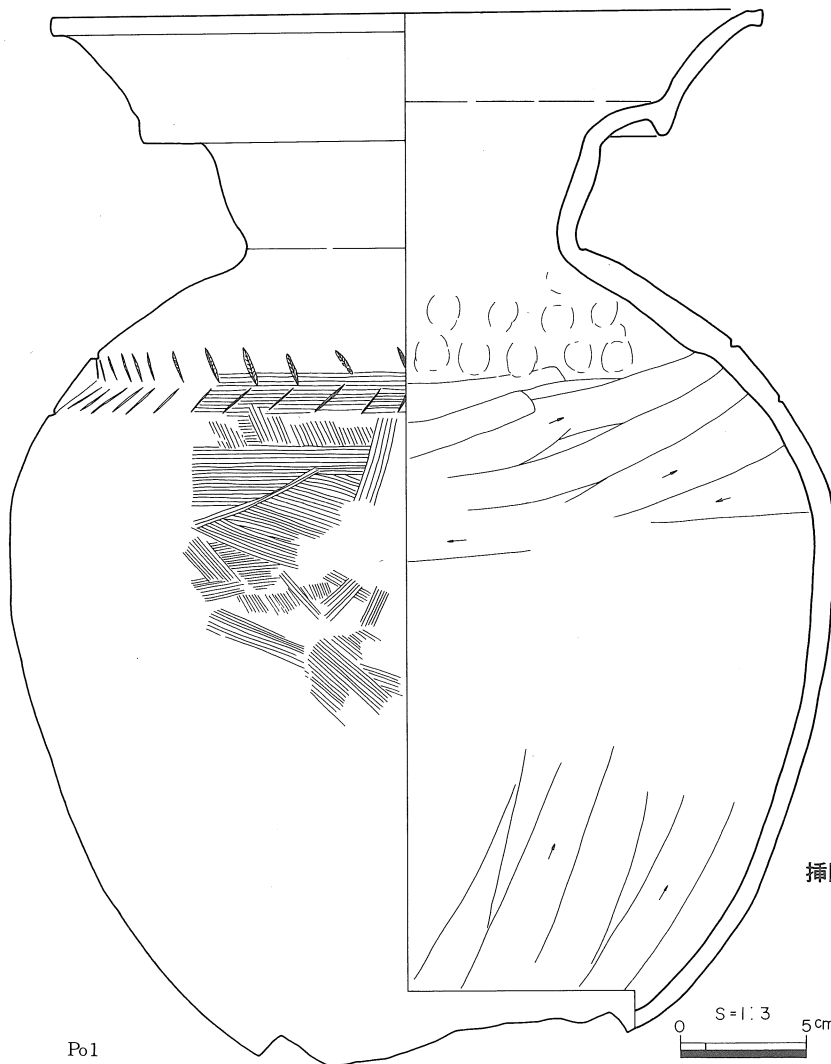


插图39 33号墳出土鑄造鉄斧実測図

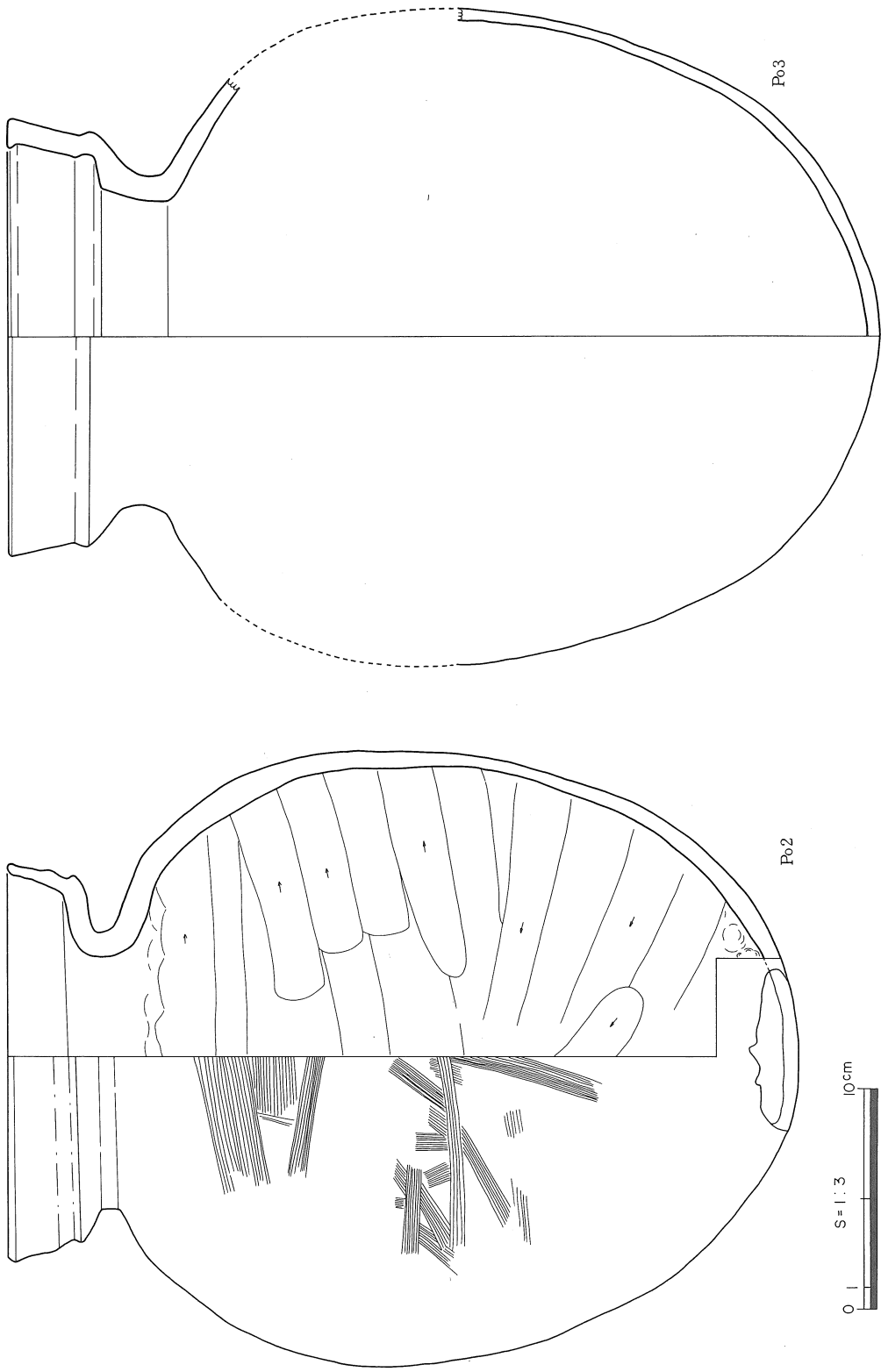
離をにおいて墳裾線に沿う様に出土した(挿図26、27、図版13)。Po1、Po2は完形の土器で焼成後に底部穿孔されている。付近で出土した土器片で孔を塞ぐことができた。現地で穿孔して置いたものであろう。又、Po1には長さ20cm、幅15cm程度の山石(アプライト)1個、Po2には長さ15cm、幅9cm程の河原石(流紋岩質凝灰岩)と長さ15cm、幅5cm程の山石(アプライト)が1個づつ底部から4cm程浮くかたちで入れ込まれていた。Po3は口縁部が胴部に落ち込んだ様なかたちで出土した。土圧によって口縁部が落ち込んだのであろうが、破片は既に散失しており、口縁部と底部の復原だけに止った。Po1から西へ60cm程離れたところで鑄造鉄斧(F29—挿図39、図版26)が出土した。掘り割りの底面に密着し、刃先を東へ向けて出土した(挿図26、27、図版13)。Po1～3、F29を囲む様な土墳墓が存在した可能性はあるが、推測の域を出ない。鑄造鉄斧は墳丘の北西側でも出土した(F30—挿図39、図版26)。

33号墳はPo1～3等より古墳時代中期の築造と考えられる。

註1 剣(F2、F3)の位置は遺体の肩部付近に相当すると考えられるのであるが、剣の間隔が30cmと狭い。30cmの間にそのままの遺体が入るとは考えられないことから、再葬の可能性をここで掲げておく。



挿図40 33号墳掘り割り
内出土土器実測図①



楯図41 33号墳掘り割り内出土土器実測図②

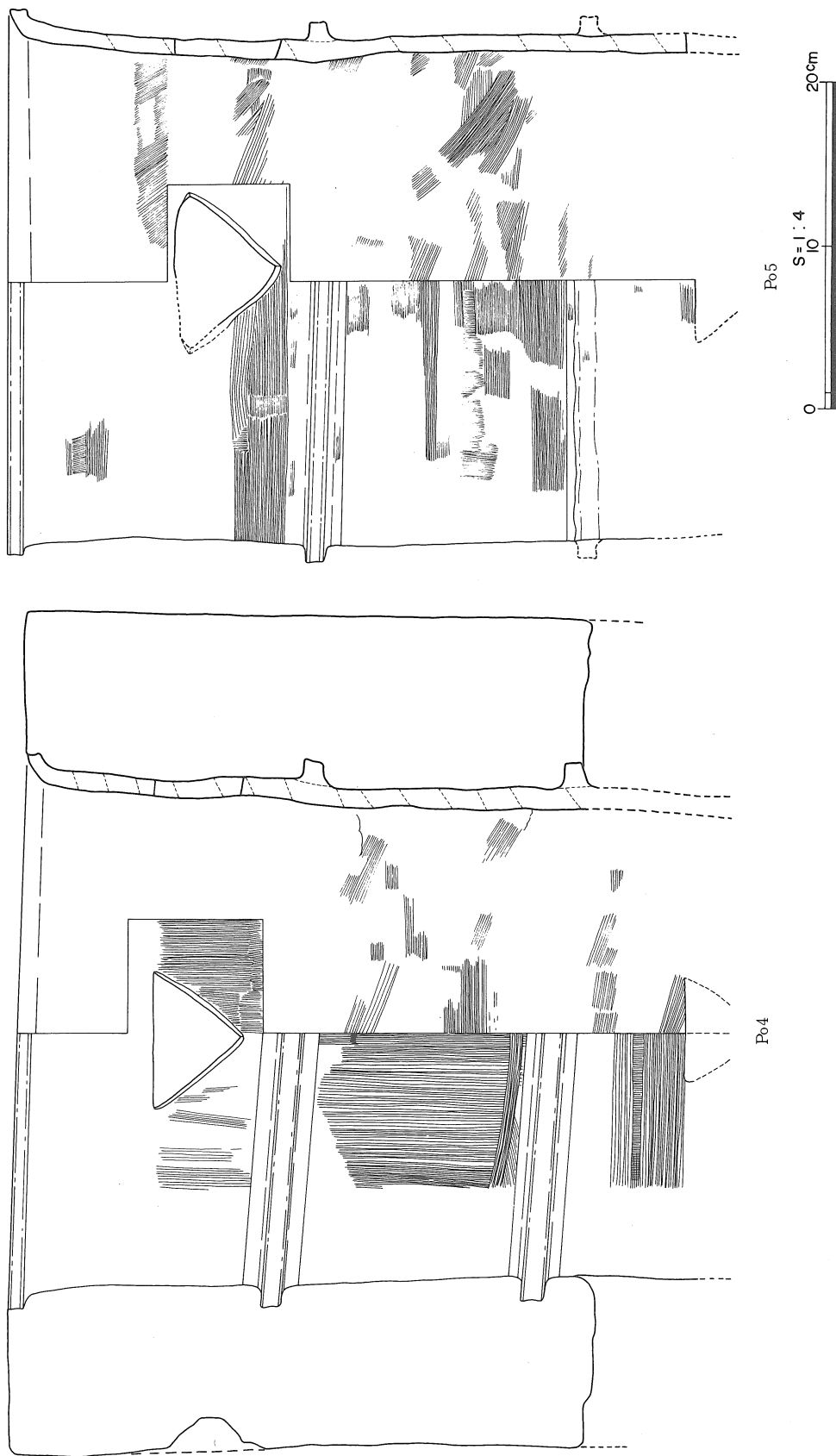


插图42 33号墳第3号埋葬施設出土簠付円筒埴輪実測図①

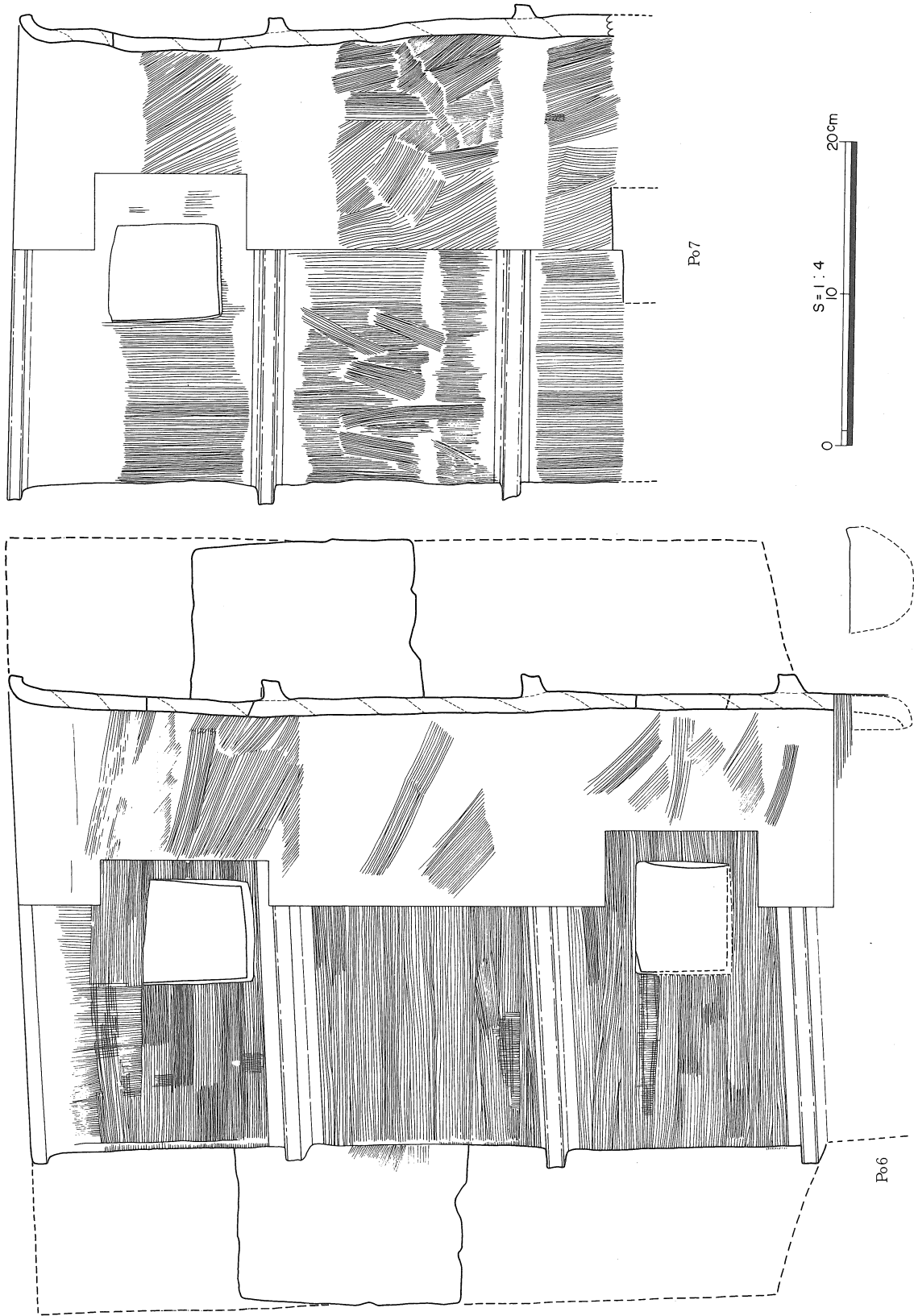


插图43 33号墳第3号埋葬施設出土緒付円筒埴輪表測図②

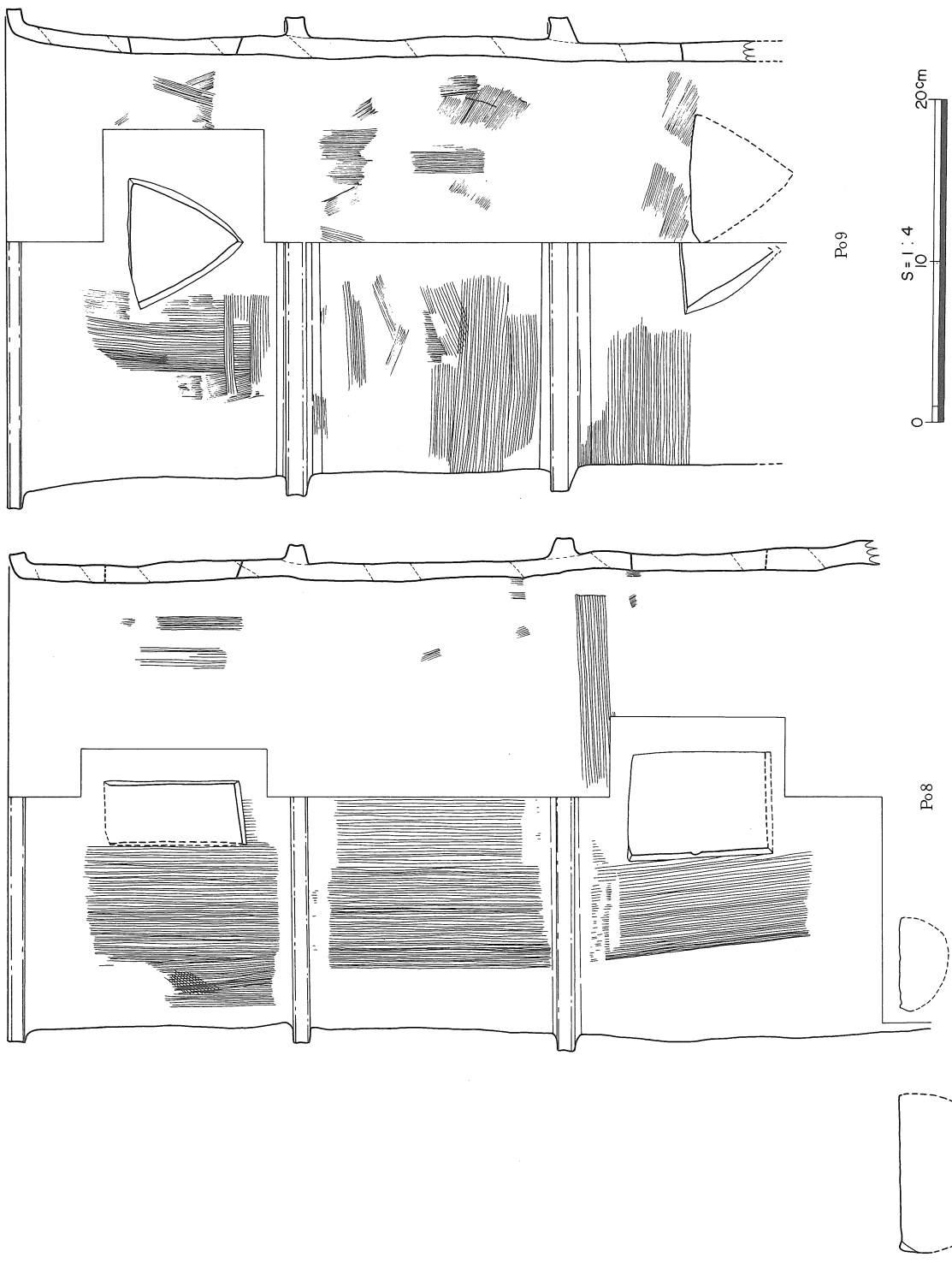


插图44 33号墳第3号埋葬施設出土円筒埴輪実測図

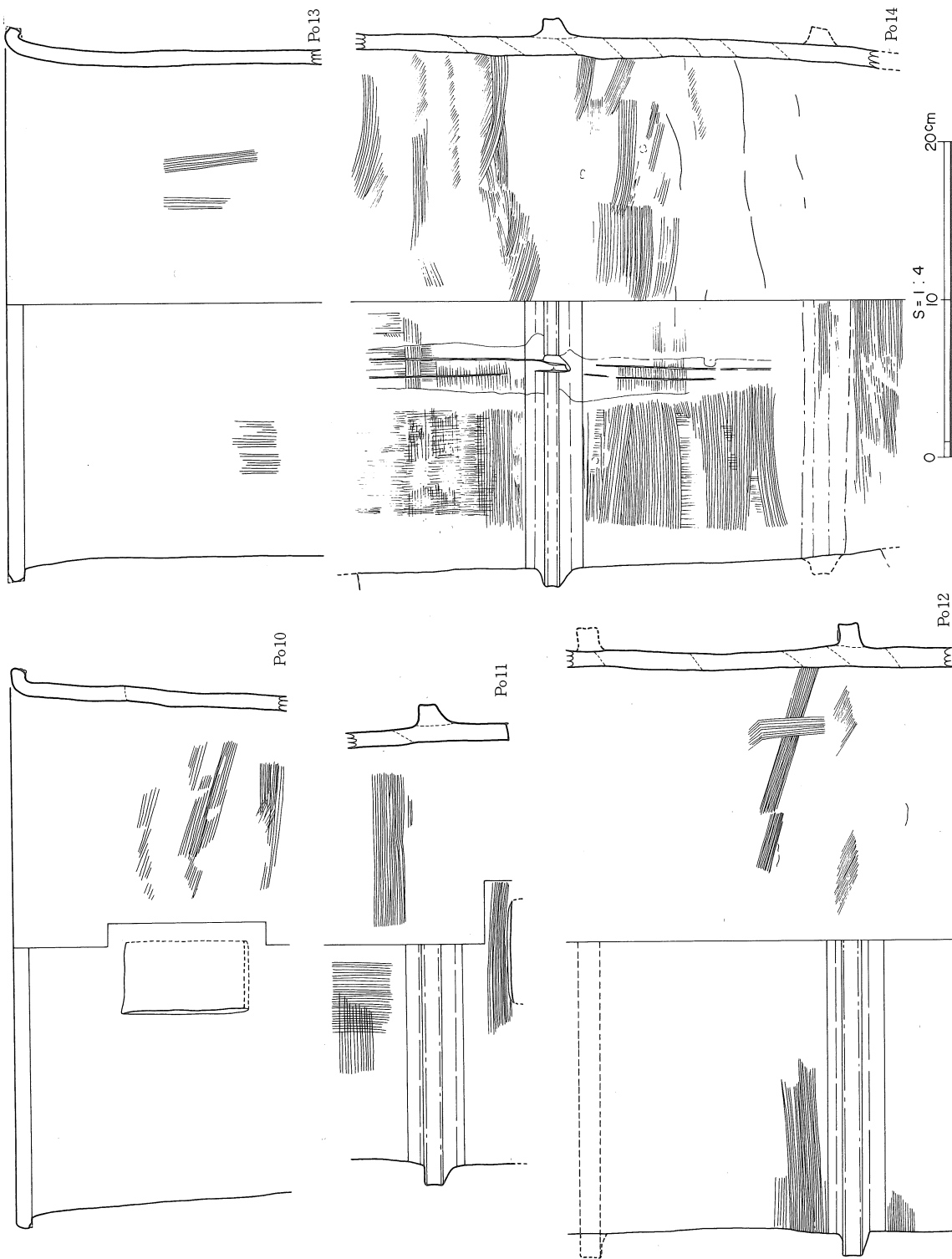
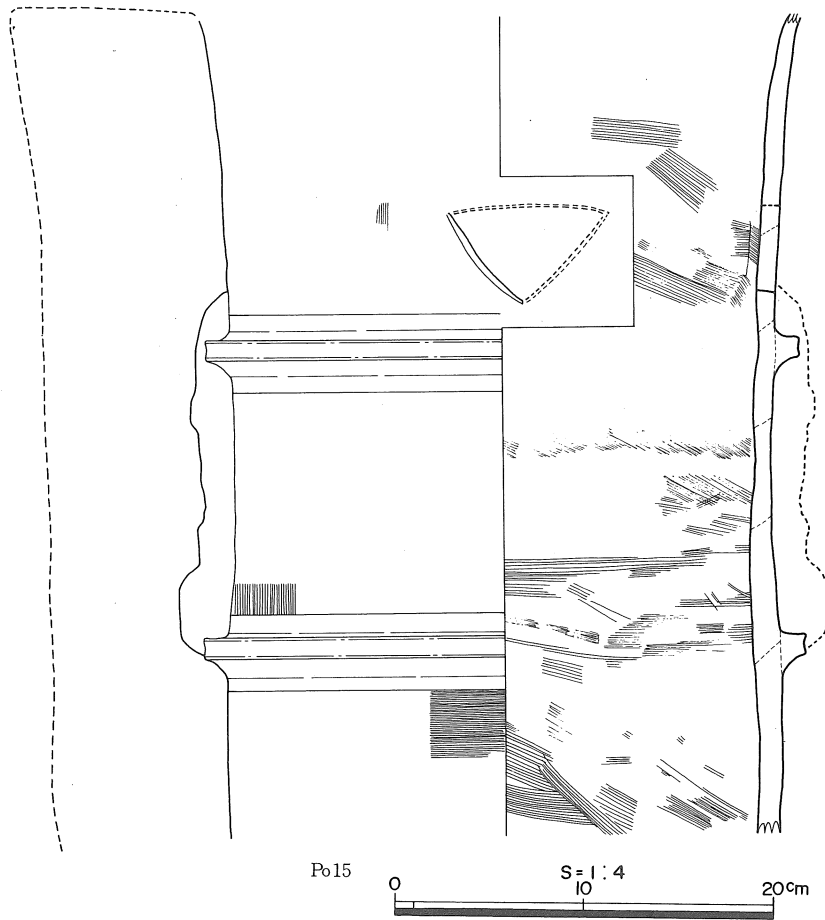


插图45 33号墳第3号埋葬施設出土埴輪実測図



挿図46 33号墳第4号埋葬施設出土鱗付円筒埴輪実測図

遺物番号 挿図版番号	出土遺構	器種	①口径 ②器底径 ③器底高 ④胴部径 ⑤凸帯高 ⑥器壁厚	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
Po 1 40 28	33号墳掘り 割り内	壺	①28.1 ②43.4 ③32.7	焼成後に穿孔された丸底の底部から、最大径を肩部近くに有する胴部に至る。肩部はなだらかで、やや中膨らみの外傾する長めの頸部に達する。広く外反する口縁部は上端に平坦面をもち下端を下方へつまみ出す。肩部外面に木口状工具による刻み目が巡る。	外面は胴部に、ナナメハケ、ヨコハケが残る。肩部下半部にヨコハケから口縁部にかけてヨコナデ。内面は底部に下へ上へのヘラケズリ。胴部に右へ上へのヘラケズリがみられる。肩部に右へ上へのヘラケズリ。肩部上半部に指おさえがみられる。頸部から口縁にかけてはヨコナデ。	良。砂粒を含む。	良好	明茶褐色	口縁部内外面・肩部外面に黒斑有り。
Po 2 41 28	33号墳掘り 割り内	壺	①17.9 ②35.7 ③27.8	焼成後に穿孔された丸底の底部から縦長気味の胴部に続き、なだらかな肩部に至る。頸部は短かく曲がり外傾気味の複合口縁に達する。口縁屈曲部の稜は鈍く、端部は丸くおさめる。	外面は胴部・肩部にヨコ・タテ・ナナメハケが残る。肩部上側より口縁部までヨコナデ。内面は底部に指おさへラケズリ。胴部や下まで右へ上へのヘラケズリ。肩部まで左へ右へのこれより上はヨコナデ。	精良。小砂粒を含む。	良好	淡褐色	
Po 3 41 28	33号墳掘り 割り内	壺	①19.7 ②40.0推	底部と肩部より上が残る。丸底の底部・肩部の張りはずかに外側する頸部からわずかに外側する複合口縁に至る。口縁屈曲部の稜は鈍く内面に深くくぼみを有する。同端部は肥厚し上面にテラスを持つ。	頸部から口縁部までヨコナデ。	精良。小砂粒を含む。	良好	外面は淡明茶褐色	
Po 4 42 27	33号墳第3号埋葬施設	鱗付円筒埴輪	①34.1 ②41.4 ③30.2 ④1.2 ⑤1.6	直立する胴部。第3凸帯上方より口縁端部に向ってわずかに外方へ開く。口縁端部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第2段、第4段に逆三角形の透し孔が同方向に、それぞれ対向する位置に2個ずつ穿れる。鱗幅は最大10.6cm。	外面-第2段・タテハケ後ヨコハケ。第3段タテハケ後、第2凸帯近くのみヨコハケ。第4段タテハケのみみとめられる。それぞれの凸帯の上下、口縁部は、ヨコナデによってハケ目が消える。鱗脱落部には刀子状工具による割り付け線及びヨコハケがみられる。内面-ヨコハケ、ナナメハケ、ナデがみられる。特に口縁部は強くヨコナデされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡明茶褐色	外面に黒斑及び赤色塗彩痕有り。

挿表3-① 33号墳出土土器観察表

遺物番号 挿入図版番号	出土遺構	器種	①口径 ②器高 ③底径 ④胴部径 ⑤凸帯高 ⑥器壁厚	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
Po5 42 27	33号墳第3号埋葬施設	罎付円筒埴輪	①33.5 ②41.7残 ③31.2 ④1.2 ⑤1.1	直立する胴部。第3凸帯上方より口縁端部に向かってわずかに外方へ開く。口縁端部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第2段第4段に逆三角形の透し孔が、同方向に、それぞれ対向する位置に2個づつ穿れる。	外面一第2段は剝離しているがヨコハケがわずかに残る。第3段、第4段タテハケ後ヨコハケ。罎脱落部には刀子状工具による割り付け線、ヨコハケがみられる。内面一ナナメハケ、ヨコハケ、ナデがみられる。特に口縁部は強くヨコナデされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄茶褐色	外面に黒斑有り。
Po6 43 27	33号墳第3号埋葬施設	罎付円筒埴輪	①32.0 ②55.0残 ③30.0 ④1.4 ⑤1.6	直立する胴部。口縁端部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第2段、第4段に方形の透し孔が同方向に、それぞれ対向する位置に2個づつ穿れる。第1段には半円形の透し孔が第4段の透し孔と約45°方向を異にして対向する位置に2個穿れる。罎幅は最大10.4cm。	外面一タテハケ後ヨコハケ。口縁端と凸帯の上下はハケ後ヨコナデによりハケ目が消える。内面一ナナメハケ、ヨコハケとナデがみられる。特に口縁部は強くヨコナデされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	外面に黒斑有り。
Po7 43 27	33号墳第3号埋葬施設	罎付円筒埴輪	①31.9 ②39.0残 ③25.0残 ④30.8 ⑤1.4 ⑥1.2	直立する胴部。口縁端部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第2段、第4段に方形の透し孔が同方向に、それぞれ対向する位置に2個づつ穿れる。	外面一第2段・第4段はタテハケのみ、第3段はタテハケ・ナナメハケを施す。口縁部と凸帯の上下はヨコナデによりハケ目が消える。罎脱落部には刀子状工具による割り付け線、タテハケがみられる。内面一タテハケ・ナナメハケ、ナデがみられる。特に口縁部は強くヨコナデされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡明茶褐色	外面に黒斑有り。
Po8 44 27	33号墳第3号埋葬施設	円筒埴輪	①30.2 ②50.2残 ③30.2 ④1.4 ⑤1.3	直立する胴部。口縁端部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し、断面「M」形。第2段、第4段に長方形の透し孔が同方向に、それぞれ対向する位置に穿れる。第1段には半円形の透し孔が第2段、第4段の透し孔と約45°方向を異にして、対向する位置に2個穿れる。	外面一タテハケのみを施す。口縁部と凸帯の上下はヨコナデによりハケ目が消える。内面一ヨコハケ、ナメハケ、ナデがみられる。特に口縁部は強くヨコナデされる。	良。砂粒を含む。	良好	明茶褐色	外面に黒斑有り。
Po9 44 27	33号墳第3号埋葬施設	円筒埴輪	①31.0 ②46.5残 ③42.1 ④1.2 ⑤1.6 ⑥1.6	直立する胴部。第3凸帯上方より口縁端部に向かってわずかに外方へ開く。口縁端部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し、断面「M」形。第2段、第4段に逆三角形の透し孔が、同方向に、それぞれややずれながら対向して穿れる。	外面一タテハケ後ヨコハケ。口縁部と凸帯の上下は強いヨコナデによりハケ目が消える。(一部ヨコハケが残る。)内面一タテハケ・ナナメハケ及びナデがみられる。特に口縁部は強くヨコナデされる。	良。砂粒を含む。	良好	外面は淡茶褐色。内面は明茶褐色	外面に黒斑有り。
Po10 45 28	33号墳第3号埋葬施設	円筒埴輪	①34.8復 ②17.5残 ③1.0	やや外方へ開く口縁部、口縁端部は風化しているが、凸帯状を呈していたものと思われる、透し孔は長方形である。	外面一剝離が激しく不明。内面一ナナメハケが残る。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	
Po11 45 28	33号墳第3号埋葬施設	円筒埴輪	①28.0復 ②5.0 ③1.4	直立する胴部。凸帯はよく突出し、断面「M」形。透し孔は孔の上辺のみ残る。楕円筒の可能性有り。	外面一タテハケ後ヨコハケ。凸帯の上下はヨコナデによりハケ目が消える。内面一ヨコハケ及びナデがみられる。	精良。小砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	外面に黒斑有り。
Po12 45 28	33号墳第3号埋葬施設	円筒埴輪	①36.9復 ②1.3 ③1.4	直立する胴部。凸帯はよく突出し断面「M」形。	外面一剝離しているが、ヨコハケがみられる。凸帯の上下はヨコナデによりヨコハケが消される。内面一タテハケ・ナナメハケ・ヨコハケ及びナデがみられる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄茶褐色	外面に黒斑有り。
Po13 45 28	33号墳第3号埋葬施設	円筒埴輪	①35.4復 ②20.0残 ③1.0	直立した後わずかに外方へ開く口縁部。口縁端部は風化しているが凸帯状を呈したと思われる。	内外面ともヨコナデ。タテハケがわずかに残る。	精良。砂粒を少し含む。	良好	淡黄褐色	
Po14 45 28	33号墳第3号埋葬施設	罎付円筒埴輪	①34.2復 ②1.2	直立する胴部。凸帯は断面「M」形。	外面一タテハケの後ヨコハケ。凸帯の上下はヨコナデによりハケ目が消える。凸帯脱落部にヨコハケがみられる。罎脱落部に刀子状工具による割り付け線及びヨコハケがみられる。内面一ヨコハケ・ナナメハケ及びナデがみられる。				
Po15 46 28	33号墳第4号埋葬施設	罎付円筒埴輪	①31.7復 ②43.5残 ③29.2 ④1.4 ⑤1.4	直立する胴部。第3凸帯より口縁端部にむかってやや外方へ開く。口縁端部は破損する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第4段に逆三角形の透し孔有り。罎は一部残存する。	外面一剝離が激しいがタテハケが一部残る凸帯の上下は強くヨコナデする。内面一ヨコハケ・ナナメハケ及びナデがみられる。特に口縁部付近は強くヨコナデする。	やや粗。大きな砂粒を含む	やや不良	外面は明茶褐色。内面は淡黄褐色。下部は明茶褐色。	外面に黒斑有り。

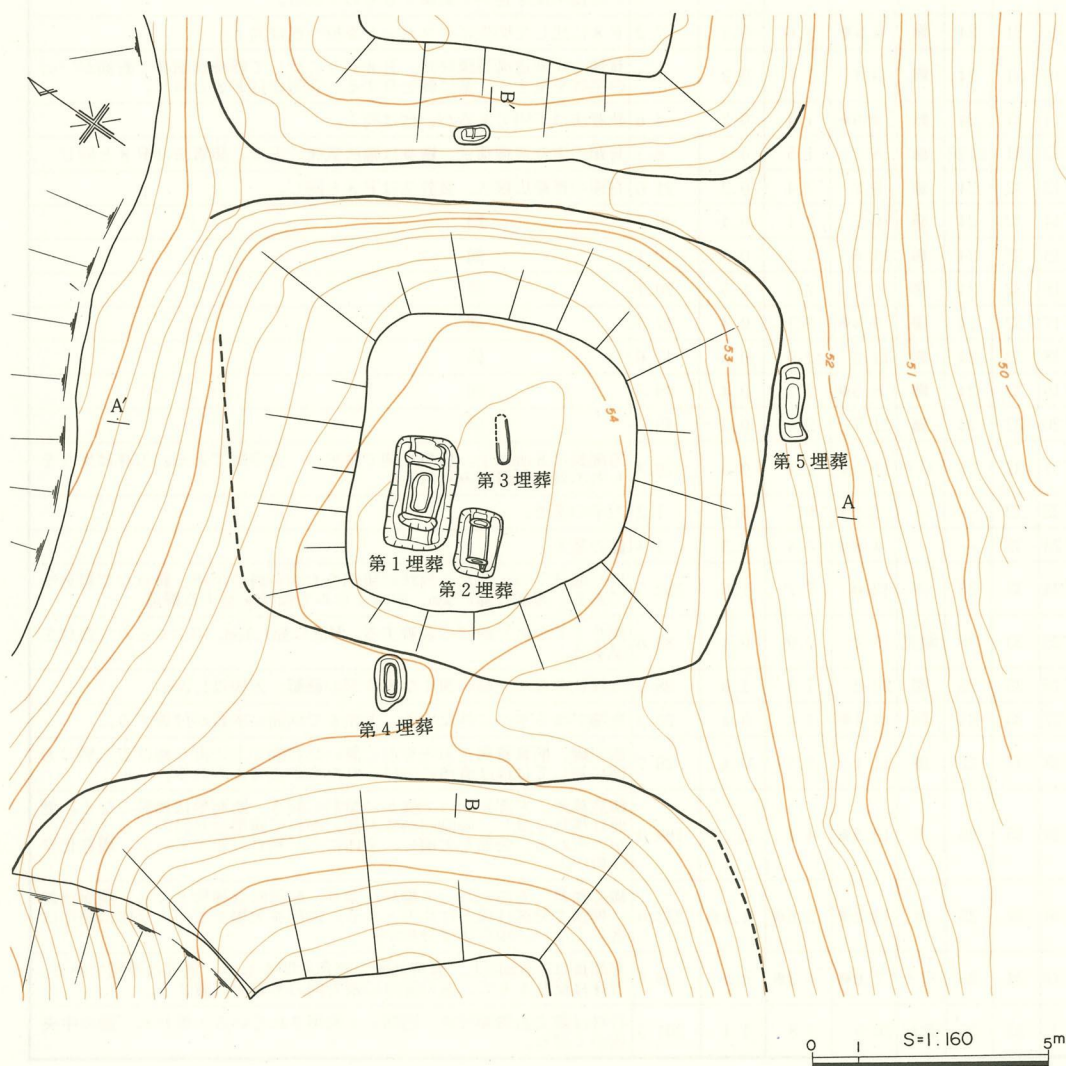
挿表3-② 33号墳出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
F 1	31	24	剣	40.6	3.3	0.7	164.5	刃部長31.6cm。細身で断面レンズ状の剣身は先細り気味となり切先は丸味をもって先端に至る。両関で先細り気味の茎がつき目釘穴は2箇所。剣身及び茎に木質が付着する。
F 2	31	24	剣	37.5	3.5	0.6	178.5	刃部長27.0cm。細身で断面レンズ状の剣身は切先にアクセントがなく先細り気味となる。両関で先細り気味の茎は剣身に比して長めである。目釘穴は1箇所。剣身に木質が付着する。
F 3	31	24	剣	24.7	3.7	0.8	110.5	刃部長19.8cm。幅広で短い剣身は断面レンズ状で切先にアクセントがなく先細り気味になる。両関で先細り気味の茎がつく。目釘穴は確認できない。剣身及び茎に木質が付着する。
F 4	31	24	鏃	3.9※	2.6	0.3	5.4	無頸の広鋒長三角形重抉式。挿着法は鏃身をマッチの状のもので挟みさらに剣状の木で挟み、それを柄に挿入した後に糸で緊縛するものである。孔を3つもつ。
F 5	31	24 26	鏃	4.1	2.5	0.3	5.5	同 上
F 6	31	24	鏃	12.5※	2.5	0.4	26.6	有頸の両丸造広鋒長三角形腹抉式の異形のものといえようか。腹抉が2段につく。茎に棘を有し、緊縛用の木皮がわずかに残る。
F 7	31	24	鏃	11.6※	2.6	0.4	25.7	同 上
F 8	31	24	鏃	9.9	1.5	0.3	10.5	有頸の両丸造柳葉腸抉式。茎に棘を有する。装着法は茎を篠竹に挿入した後木皮を巻いて緊縛するものである。
F 9	31	24	鏃	6.3※	1.6	0.3	7.2	F 8 に比して切先にアクセントを持つ他は同上。
F 10	31	24	鏃	9.1	1.7	0.3	7.4	有頸の片丸造柳葉腸抉式。F 8 F 9 に比して鏃身が細身で断面が「へ」の字状を呈する。茎に棘を有する。装着法は F 8 と同じ。
F 11	31	24	鏃	4.9※	1.4	0.2	4.6	装着法は不明であるが、他は同上。
F 12	31	24 26	鏃	8.2	1.5	0.3	6.3	有頸の両丸造柳葉式。鏃身は幅広気味である。装着法は F 8 と同じ。
F 13	32	24	鏃	8.2	2.4	0.3	21.6	有頸の斧箭広根式。装着法は F 8 と同じ。
F 14	32	24	鏃	10.7	2.1	0.4	20.7	同 上
F 15	32	24	鏃	11.6	2.1	0.3	19.1	同 上
F 16	32	24	鏃	11.7	2.1	0.5	20.1	同 上
F 17	32	24	鏃	9.4※	2.1	0.4	17.4	同 上
F 18	32	24	鏃	11.2	1.9	0.3	17.6	同 上
F 19	32	24	鏃	8.5※	2.2	0.4	19.5	同 上
F 20	32	24	鏃	11.7	2.0	0.3	15.0	同 上
F 21	32	25	刀子	11.0※	1.4	0.5	20.8	刃部長は8cm以上。斜角片関で茎尻は一文字尻である。刀身は反りをもち木質の付着がみられる。
F 22	32	—	—	3.0※	0.7	0.2	1.2	刀子の茎カ。
F 23	32	—	—	4.8※	0.4	0.3	1.4	鏃の茎カ。
F 24	33	25	斧	12.0	7.7	1.5	352.5	折り曲げてつくられる筒状の袋部をもつ有肩の手斧。肩はなで肩気味である。刃部は幅7.5cm、中ぶくらみで弧状を呈する鍛造。
F 25	33	25	鋤先	5.2	7.9	0.4	82.6	両サイドを折り曲げて装着する。刃部は幅7.1cm、中ぶくらみで弧状を呈する。
F 26	33	25	鑿	20.2	1.3	1.0	98.0	方柱状をなし先端が薄くなる片刃の細鑿。刃幅は1.2cm。
F 27	33	25	鈍	14.4※	1.4	0.4	25.3	先端がゆるやかに外反する。刃先まで両面に木質が付着する。
F 28	33	25	鎌	11.4	2.3	0.4	26.7	曲刃鎌。柄装着部を刃先を左に置いた状態で上に折り曲げる。柄は刃部に対してはほぼ直角につけられたものと考えられる。
F 29	35	25	斧	10.5※	4.4	2.2※	189.0	鑄造鉄斧。刃部に向って僅かに撥形に開き、断面形は梯形となる。側面は楔状を呈し、両側面から刃部にかけて鑄型合せ目の「こうばり」がみられる。袋部を欠損し、全体にヒビ割れが進んでいる。現在化学分析中。
F 30	34	25	斧	13.3※	5.6※	1.9※	272.0	鑄造鉄斧。刃部に向って撥形に開き、断面形は梯形となる。側面は鋭い楔状で刃部は僅かに片刃となる。袋部を欠損するが、全体に錆化は著しくない。現在化学分析中。
F 31	34	25	刀子	7.6※	1.3※	0.3	8.5	刃部長は7.2cm以上。撫角気味の斜角片関をもつ。茎尻は不明である。刀身は反りをもつ。茎の部分に縦方向の木質が付着する。
S 1	33	25	砥石	20.9	2.8	1.4	201.5	石材は流文岩質凝灰岩。四面とも使用されていると思われ、面の中央部がくぼむ。

挿表 4 33号墳出土鉄器・砥石観察表 (※印 残存値)

第4節 里仁34号墳 (挿図47~50、図版14~16)

里仁34号墳は北東へのびる尾根上にあつて、北東側を33号墳、南西側を35号墳と接している。墳頂部の標高は54.56mで水田部との比高差40m前後を測る。墳丘は尾根主軸に直交する掘り割りにより区画され、地山を整形して形成されている。現状では墳頂部には25cm程度の盛土しかみとめられない(挿図48)。この墳丘を画する掘り割りが北東側で深さ0.8mに及ぶのに対して、南西側は僅かに深さ0.15m程の窪みがみられるにすぎず、34号墳の墳頂部からほぼ水平に続いて、35号墳の北東側墳裾となっている。これにより34号墳は35号墳を後方部とした前方後墳の前方部ではないかとも考えられたが(挿図66)、くびれ部に相当する部分での墳丘整形が不明瞭なことから35号墳の主軸がずれるため、一応独立した方墳としておく。このように南東側墳裾の掘り込みが不十分なため、墳丘の平面形は、北東側を底辺とした梯形を呈しており、北東側一辺11m、南西側一辺8mのややいびつな方墳となる(挿図47)。高さは北東側掘り割り底面から最大2.1mを測



挿図47 34号墳墳丘実測図

- | | | |
|---------------------|----------------------------|----------------------------|
| 1. 表土—淡灰褐色土 | 6. 明褐色土 | 11. 淡赤褐色土(しまりが無い、白色粒を多く含む) |
| 2. 暗黄灰褐色土 | 7. 暗茶褐色土 | 12. 褐色土(しまっていない) |
| 3. 暗灰黄褐色土(よくしまっている) | 8. 暗褐色土 | 13. 暗灰黄褐色土(しまっている) |
| 4. 暗灰赤褐色土 | 9. 暗赤茶褐色土(しまりが無い、白色粒を含む) | 14. 明赤褐色土(ややしまっている、白色粒を含む) |
| 5. 黒褐色土 | 10. 淡赤褐色土(ややしまっている、白色粒を含む) | 15. 暗茶褐色土(ややしまっている) |
| | | 16. 淡暗褐色土(よくしまっている) |

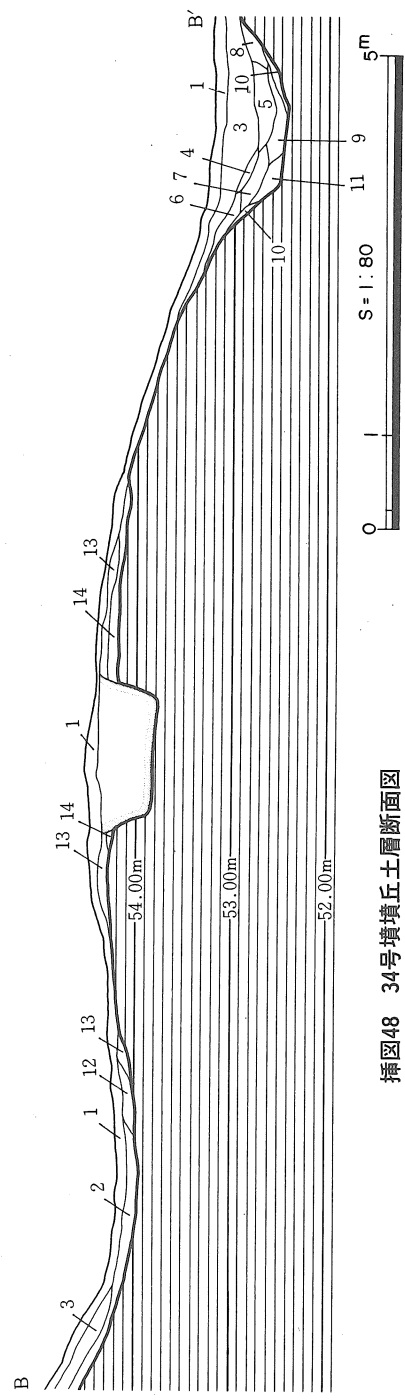
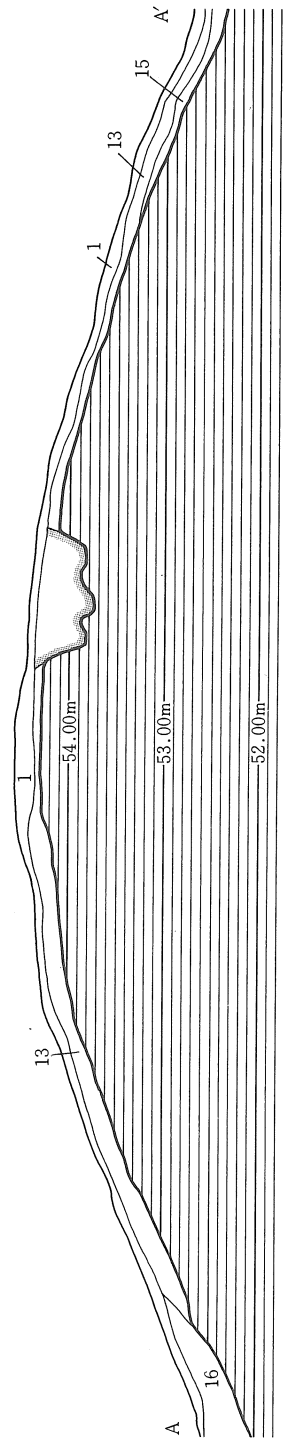
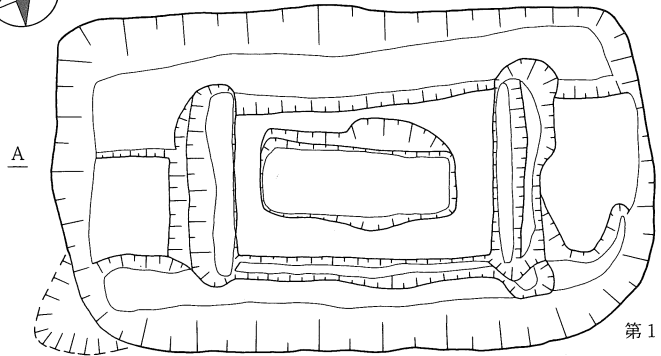
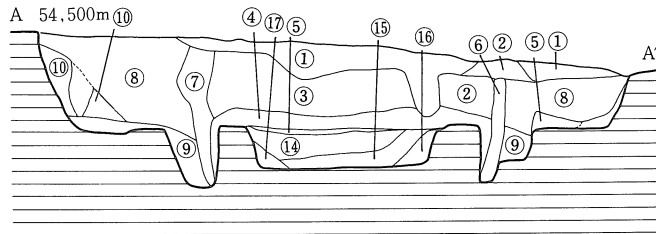
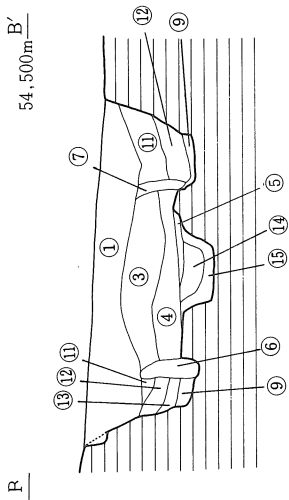


插图48 34号墳墳丘土層断面図

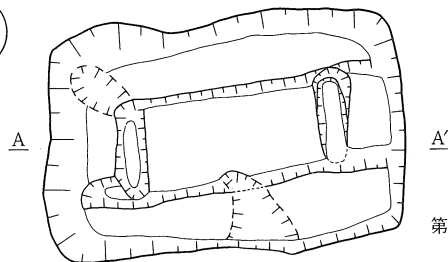
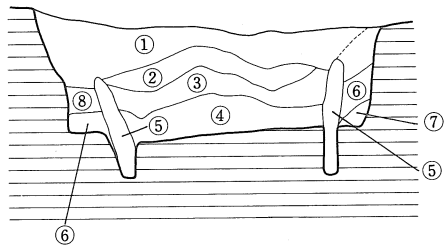
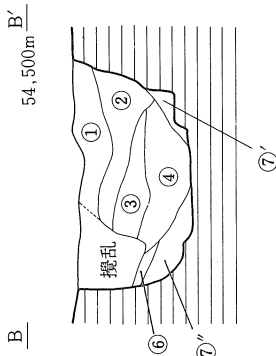
- ① 淡灰褐色土(砂利、地山ブロックを含む、しまっている)
- ② 暗灰褐色土(地山ブロックを含む、ややしまっている)
- ③ 暗褐色土(砂利、地山ブロックを少し含む、ややしまっている)
- ④ 明褐色土(砂利、地山ブロックを少し含む、しまっている)
- ⑤ 褐色土(赤色ブロック、炭化物を含む、ややしまっている)
- ⑥ 明灰褐色土(白色粒ブロックを含む、ややしまりが無い)
- ⑦ 暗灰黄褐色土(粒子が細かい、ややしまっている)
- ⑧ 暗褐色土(地山ブロックを含む、③よりやや暗、ややしまっている)
- ⑨ 暗赤褐色土(砂利、炭化物、赤色粒子を多く含む、ややしまっている)
- ⑩ 明茶褐色土(白色粒子を多く含む、よくしまっている)
- ⑪ 淡褐色土(ややしまりが無い)

- ⑫ 明茶褐色土(赤色ブロックを含む、⑩より明るい)
- ⑬ 淡茶褐色土(ややしまっている)
- ⑭ 淡暗褐色土(ややしまっている)
- ⑮ 淡明赤褐色土
- ⑯ 暗褐色土
- ⑰ 淡明赤褐色土(赤色ブロック混り、しまっている)



第1号埋葬

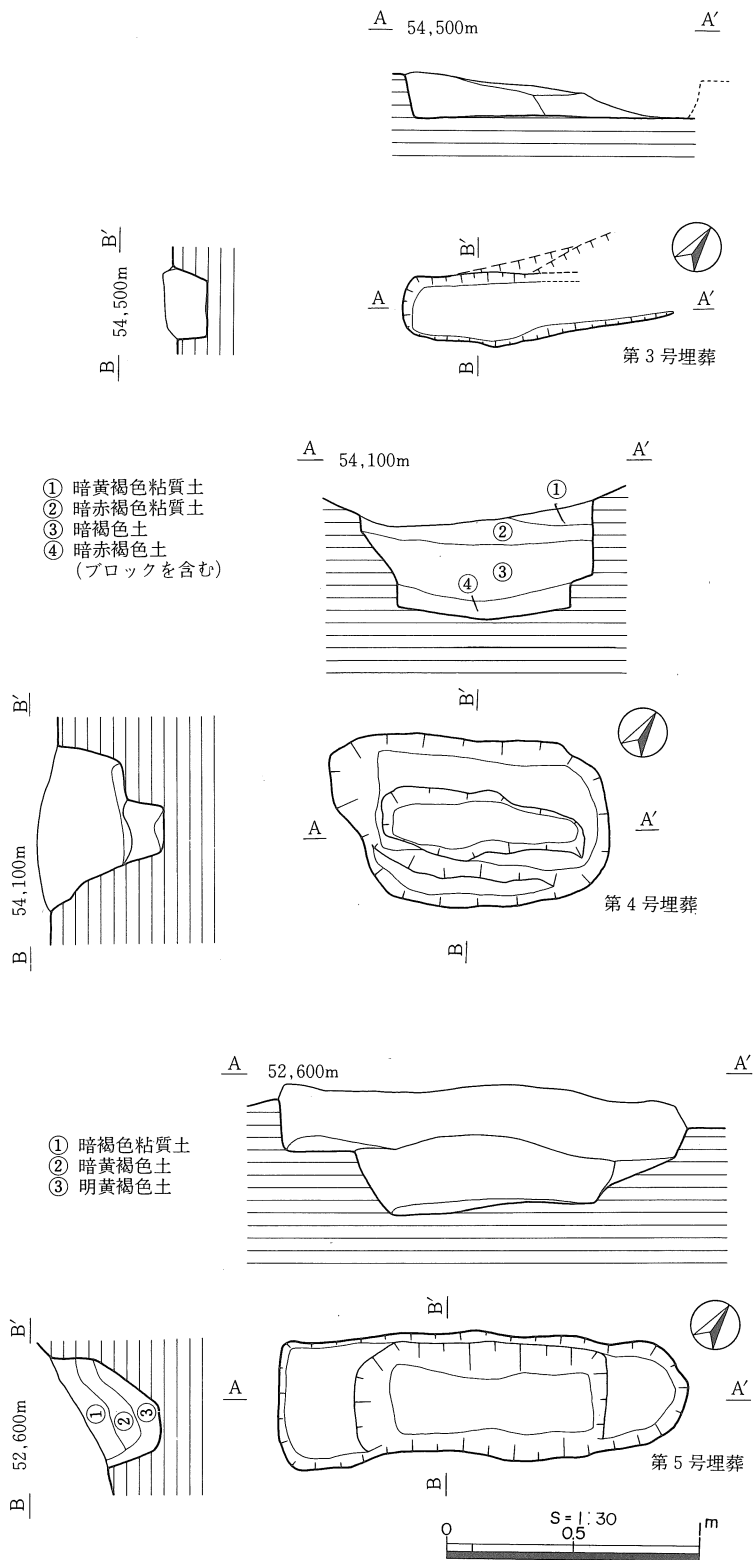
- ① 淡灰黄褐色土(白色粒を含む、ややしまっている)
- ② 淡灰褐色土(白色粒を少し含む、よくしまっている)
- ③ 淡明赤褐色土(白色粒を含む、粒子が細かい、よくしまっている)
- ④ 淡灰赤褐色土(③よりやや赤みが強い、白色粒を少し含む、よくしまっている)
- ⑤ 灰褐色土(白色粒を含まない、しまりが無い)
- ⑤' 〃(ややしまっている)
- ⑥ 灰赤褐色土(白色粒を少し含む、よくしまっている)
- ⑦ 暗灰赤褐色土(白色粒を少し含む、よくしまっている)
- ⑧ 淡灰褐色土(白色粒を含まない、少ししまっている)
- ⑦' 暗灰赤褐色土(白色粒を含まない)
- ⑦'' (白色粒を多く含む、よくしまっている)



第2号埋葬

挿図49 34号墳第1・2号埋葬施設実測図

る。埋葬施設は墳頂部に3基、墳裾部に2基検出された。第1埋葬施設(挿図49、図版15)は、墳頂部中央よりやや北西に位置しており、上縁で長さ238cm、幅137cm、深さ40cm前後の主軸をN-65°-Eにとる長方形墓壙内に長さ110cm、幅70cmの組合せ箱式木棺を納めたものと考えられる。北東側と南西側に深さ25cmの小口板を埋め立てた掘り込みがみられ、両側板の位置も7cm前後掘り込まれており、木棺内は周囲より5cm前後高くなっている。注目されるのはこの木棺内床面に、主軸をN-71°-Eにとる長さ77cm、幅34cm、深さ16cmの掘り込みがみられたことであり、このような構造の類例を知らない。この土壌が埋葬施設本体で、木棺と思われたのは棺を囲う木槨であった可能性もある。第2号埋葬施設(挿図49、図版15)は、第1号埋葬施設の南東に接しており、主軸をN-64°-Eにとる長さ140cm、幅97cm、深さ49cmの墓壙に長さ80cm、幅30cm前後の組合せ箱式木棺が納められていたと思われる。底面には両小口板を埋め立てた掘り込みがみられ、木棺内と思われる中央部は周囲より5cm前後低くなっている。側板はこの両端に立てられたものと

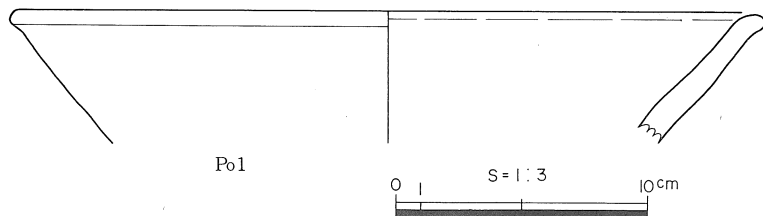


挿図50 34号墳第3・4・5号埋葬施設実測図

考えられる。第3号埋葬施設(挿図50)は第1号埋葬施設の東、第2号埋葬施設の北東に約1mの間隔をとって設けられた素掘りの土壌で、北東側が失われているが残存長108cm、幅30cm、深さ17cmを測り主軸をN-55°-Eにとる。第4号埋葬施設(挿図50、図版16)は35号墳と接する南西墳裾のやや北寄りに位置し、長さ110cm、幅67cm、深さ35cmの隅丸長方形土壌内に長さ80cm、幅27cm、深さ14cmの掘り込みがあり、主軸をN-63°-Eにとる二段掘り土壌墓である。第5号埋葬施設(挿図50、図版16)は、南西側墳裾にあり、長さ162cm、幅50cm、深さ20cmの舟形を呈する墓墳内に長さ100cm、幅45cm、深さ26cmの掘り込みがある。主軸をN-57°-Eにとり両短辺にテラスの付く二段掘り土壌墓である。このように34号墳においては5基の埋葬施設を検出したが、第3~5号埋葬施設はいずれもごく小規模な土壌墓であり、34号墳の中心主体は第1、2号埋葬施設の箱式木棺であろう。規模からいえば第1号埋葬施設の方が大きいのだが、墳丘の中心にはなく、当初から2基を中心に配置することを意図していたものと考えられる。これは32、33号墳にもみられることであるが、前記2墳の埋葬施設に較べて規模、構造とも貧弱であり、副葬品も全く検出されていない。34号墳では埋葬施設、墳丘を含めて、出土遺物は全くみられなかった。したがって時期判定の目安に欠けるが、他の3基の築造時期と大きく懸け離れることはないものと思われる。

第5節 里仁35号墳(挿図51~61、図版17~19、29、30)

里仁35号墳は北東へのびる尾根上にあつて、北東側を34号墳と接している。墳頂部の標高は56.55mで、水田部との比高差40m前後を測る。墳丘は尾根主軸に直交する掘り割りとテラスを設け、地山を整形して墳丘の大半を形成した後に墳頂部に最大60cmの盛土を施している。墳丘を画する掘り割りは南西側において顕著で、幅3m、深さ0.6mに及ぶが、北東側では深さ0.15mと不明瞭であり、僅かな隆起をもつ34号墳墳頂部へとほぼ水平に続いている(挿図54、図版14)。北西側、南東側の墳裾線は確実につかむことができず、墳丘側面がそのまま急な斜面となって降っている。掘り割り底面の高さからすれば標高54m辺が墳裾になると思われるが、本来、北西側、南東側の墳裾線を明確に形成する意志はなかったものと考えられる。但し、北西側は自然崩落と思われる幅12.0m、高さ3.1mにわたる崖面が墳頂部まで及んでいる。墳丘の平面形は狭い尾根幅を一杯に利用しており、長辺18m、短辺13.5m、高さ2.6mを測り、主軸をN-50°-Wにとる長方形墳である(挿図52)。主軸方向は、33、34号墳と約10°ずれており、34号墳と35号墳の境付近で尾根が僅かに屈曲するのに制約されたものであろう。墳頂部には長さ9m、幅6mの平坦面があり、中央部



挿図51 35号墳墳丘出土土器実測図

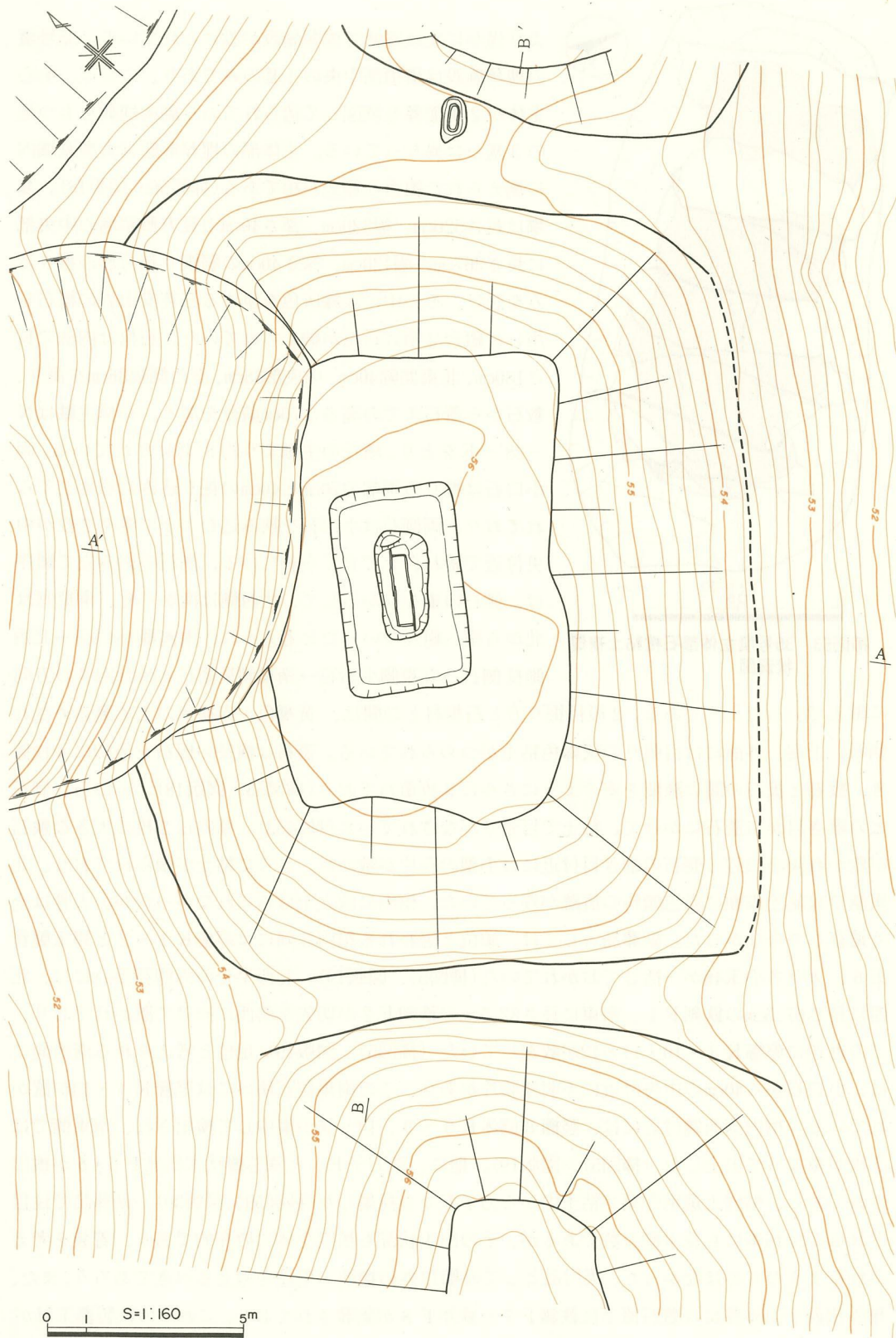
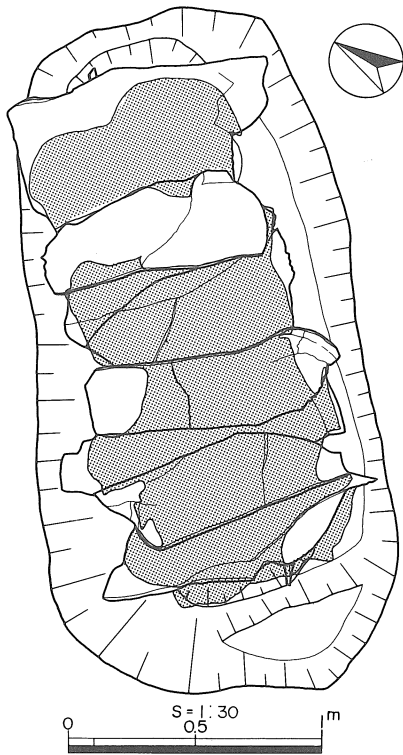
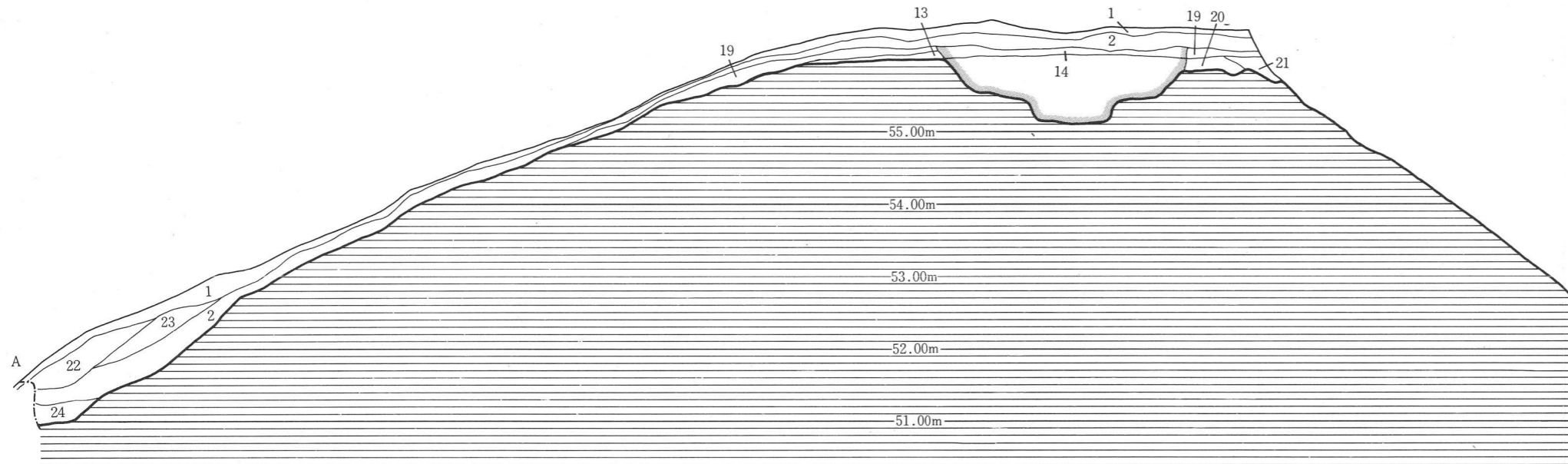


插图52 35号墳填丘实测图

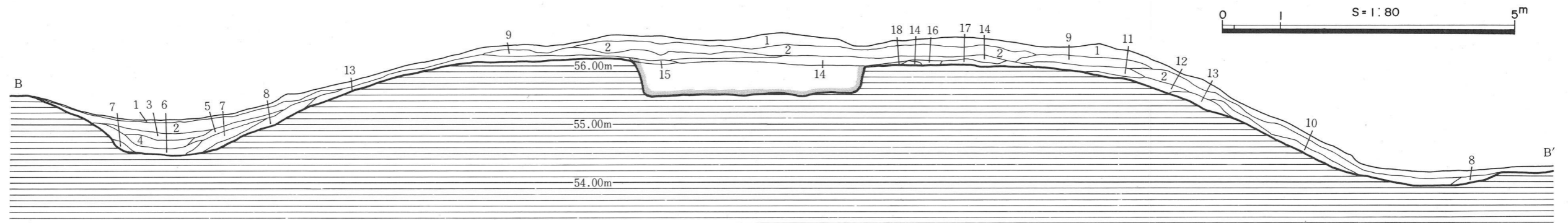


挿図53 35号墳主体部石棺粘土被覆状況図

より僅かに北に寄せて埋葬施設が設けられている。35号墳の埋葬施設は墳頂部中央の1基のみであり、この点、中心主体が2棺並葬を意図して造られており副次埋葬をもつ他の3基とは異なっている。主体部の埋葬形態は大型墓壇内に裾えられた組合せ箱式石棺である(挿図56、図版18)。墓壇は長さ520cm、幅320cm、深さ40cmの長方形墓壇の中央部に長さ267cm、幅130cm、深さ40cmの胴張り長方形の掘り込みを設け、その中に淡緑灰色を呈する石英安山岩の板石を用いた組合せ箱式石棺が納められていた。石棺は内法で長さ180cm、北東側幅40cm、中央部38cm、南西側幅36cmを測り、敷石から蓋石までの高さは70cm前後を測る。石棺主軸はN-28°-Eをとり、墳丘の主軸より約8°北にふれている。両小口石は掘り方両端の70cmと40cmの掘り込みに埋め立てられており、両側石は小口石を挟み込むように各々2枚が中央付近で重ね合せて立てられている。側石の組み立て順序は、側石の重なりからして、北西側は南から北、南東側は北から南へ組んでいったと考えられ、南西側小口石→北西側長側石→北東側小口石→南東側長側石と時計回りの方向に組んでいったようである。2段目掘り方と石棺材との間は、黄褐色～赤褐色の土で裏込めされ側石、上端、外面には目張りの灰緑色粘土がつけられている。蓋石は横長の板石を最初に4枚置き、板石と板石の間の隙間を塞ぐようにさらに3枚重ねており(挿図55、図版18)、小口石、側石との継ぎ目から蓋石にかけて、粘土で目張りがなされていた(挿図53)。棺内は2枚の大きな敷石が敷かれ両小口辺と側石の継ぎ目付近には小型の石片が敷かれ、さらに粘土が張られており、北東側では粘土表面に赤色顔料の痕跡が残っていた。棺内に流入土はみられなかったが、人骨は全く遺存していなかった。副葬品としては、頭位と思われる棺内北隅には竪櫛K1・2と碧玉製管玉6、ガラス小玉48が一括しておかれていた(挿図57、図版19)。北西半分の両側石添いには、北西に長さ67.5cmの鉄剣F1、南東に長さ82.5cmの鉄剣F2が切先を南西に向けて置かれており、この近辺に竪櫛K3・10・11・12が散在していた(挿図57、図版19) 足位と考えられる南西側には、小口石から40cmの中央付近に不明漆膜片があり、この南東側石添いには竪櫛K4・13が置かれている。棺内南西端付近には、竪櫛8個体K5~9、14~16が集中して検出され、南東側では5枚が重なって出土した(挿図57、図版19)。他に、鉄刀子F3と鉄芯棒状木質品F5・6が検出されており、棺内土選別作業で粘土中から刀子F4を採集した(挿図59、図版30)。副葬品で注目されるのは16本にも及ぶ櫛の数であるが、その出土状況も棺内全体に散在的であり、着装を考えられるようなものはなかった。実用品としての櫛以外の機能・用途を考えるべきであろう。また、棺外南西小口外側には蓋石直下に鉄鎌F7と鉄斧F8が副葬されており、これらの鉄製農工具が棺内副葬遺物とは区別されているのが窮えた。墳丘からは埴輪、葺石等の外表施設は全く検出さ



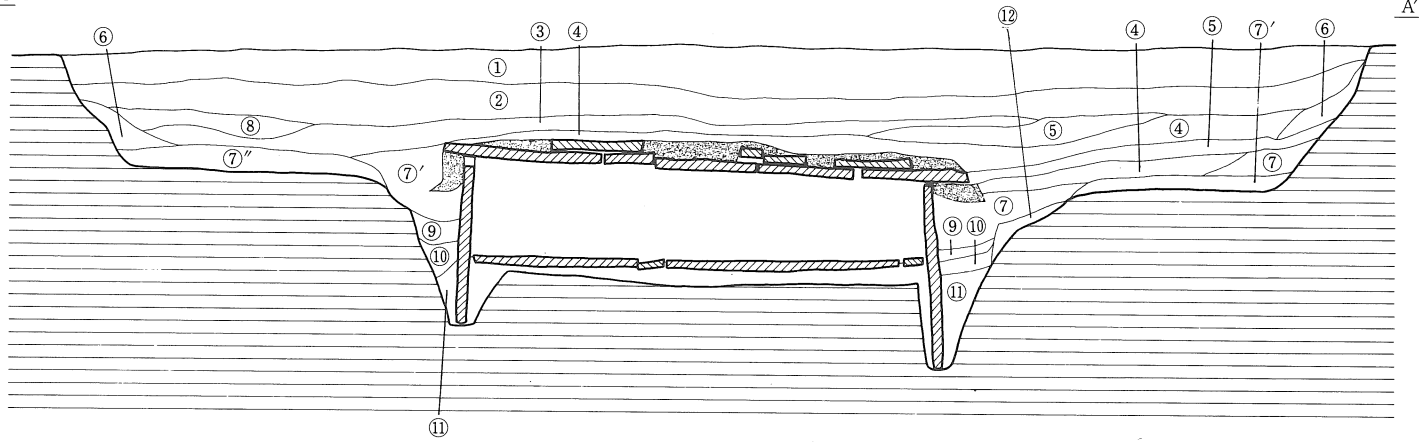
1. 表土(黒灰色腐植土)
2. 暗黄灰色土(しまっている)
3. 明褐色土(しまっている)
4. 暗褐色土
5. 暗黄褐色土(白色粒多く、しまっている)
6. 暗黄褐色粘質土(しまっている。)
7. 明赤褐色土(白色粒多く、しまっている)
8. 赤褐色粘質土(黄褐色地山ブロックを含む)
9. 明黄褐色土(白色粒多し、かたくしまっている)
10. 暗灰黄褐色土
11. 淡い暗褐色土(ややしまっている)
12. 明褐色土(しまっている、粒子が細かい)
13. 明茶褐色土(淡赤褐色ブロック白色粒多し、しまっている)
14. 淡赤茶褐色土(白色粒子を含む、かたくしまっている)
15. 明赤茶褐色土(白色粒を含む、ややしまっている)
16. 淡明茶褐色土(⑩より暗い、粘質を有し、しまっている)
17. 明黄褐色土(地山ブロック多く含む、かたくしまっている)
18. 淡赤茶褐色土(白色粒を含まない、やや粘性)
19. 明赤茶褐色土(白色粒なし、しまっている)
20. 明茶褐色土
21. 淡黄茶褐色土
22. 暗褐色粘質土(しまりが無い)
23. 明褐色土(しまりが無い)
24. 暗褐色土(しまりが無い)



0 1 5m
S = 1:80

挿図54 35号墳填丘土層断面図

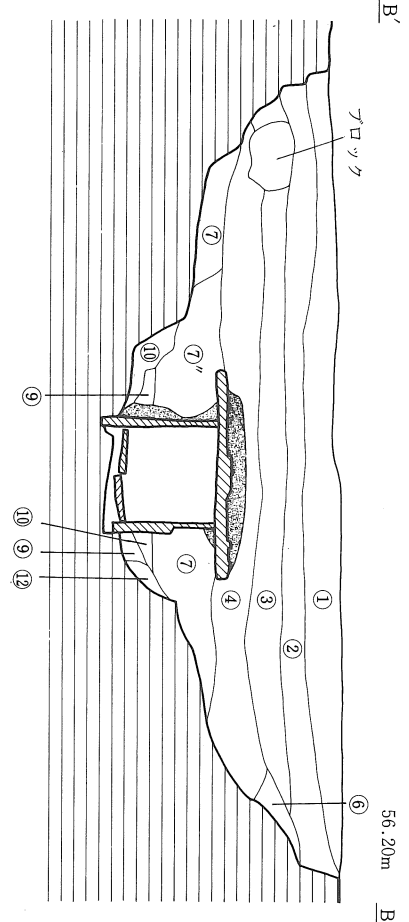
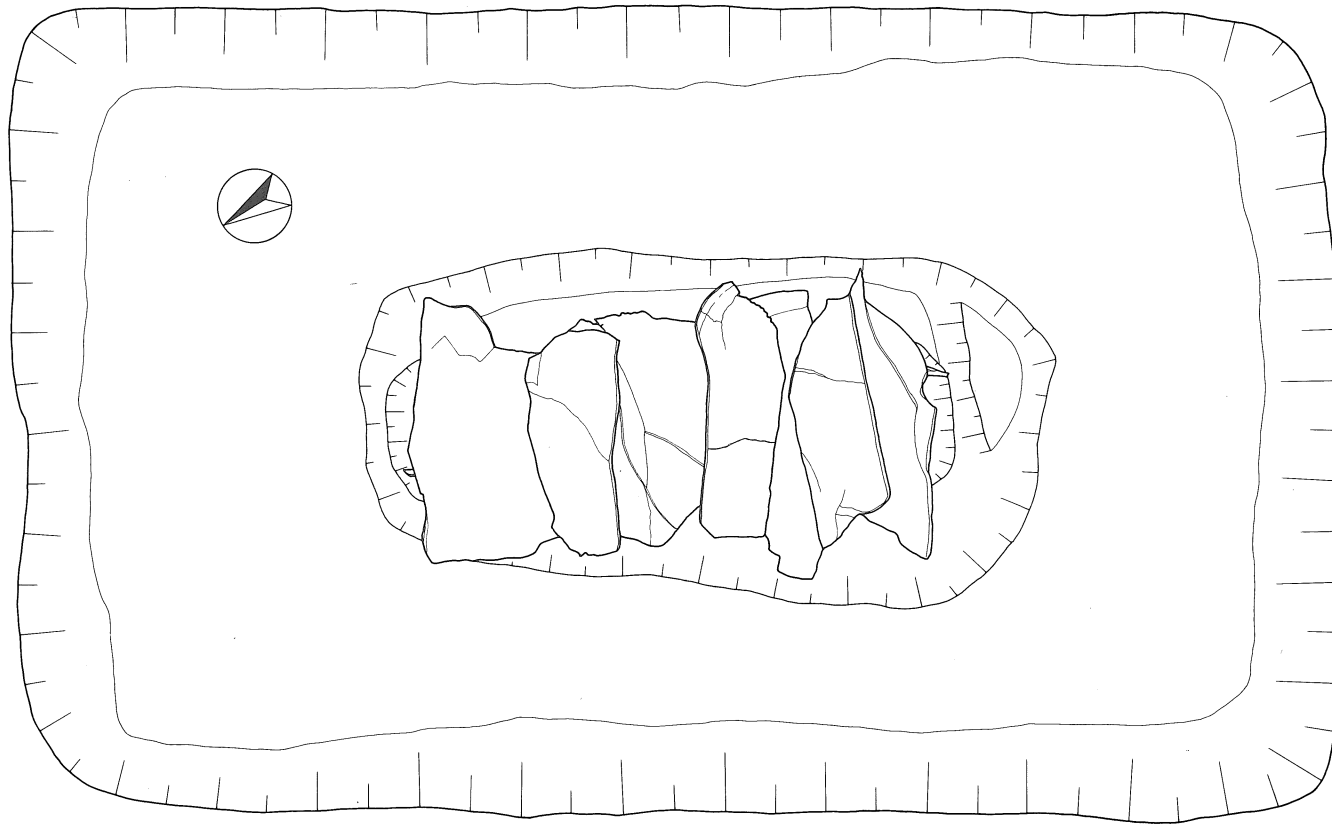
A 56.20m



- ① 暗赤茶褐色土(白色粒、かたくしまっている)
- ② 暗茶褐色土(白色粒ややしまっている)
- ③ 淡黄茶褐色砂質土(しまっている)
- ④ 暗赤茶褐色土(ややしまっている)
- ⑤ 暗茶褐色土によりやや淡(ややしまっている)
- ⑥ 暗赤茶褐色砂質土(しまっている)
- ⑦ 明赤茶褐色土(白色、黄、ブロック多く混入、やや暗、⑦'しまっている)
- ⑧ 明黄褐色土(粘質土)
- ⑨ 明赤褐色土(ブロック含む)
- ⑩ 暗黄茶褐色土
- ⑪ 暗赤茶褐色土
- ⑫ 暗赤褐色土(ブロックを多く含む)

灰緑色粘土

B'



S=1:30
0 0.5 m

挿図55 35号墳主体部石棺蓋石検出状況及び土層断面図

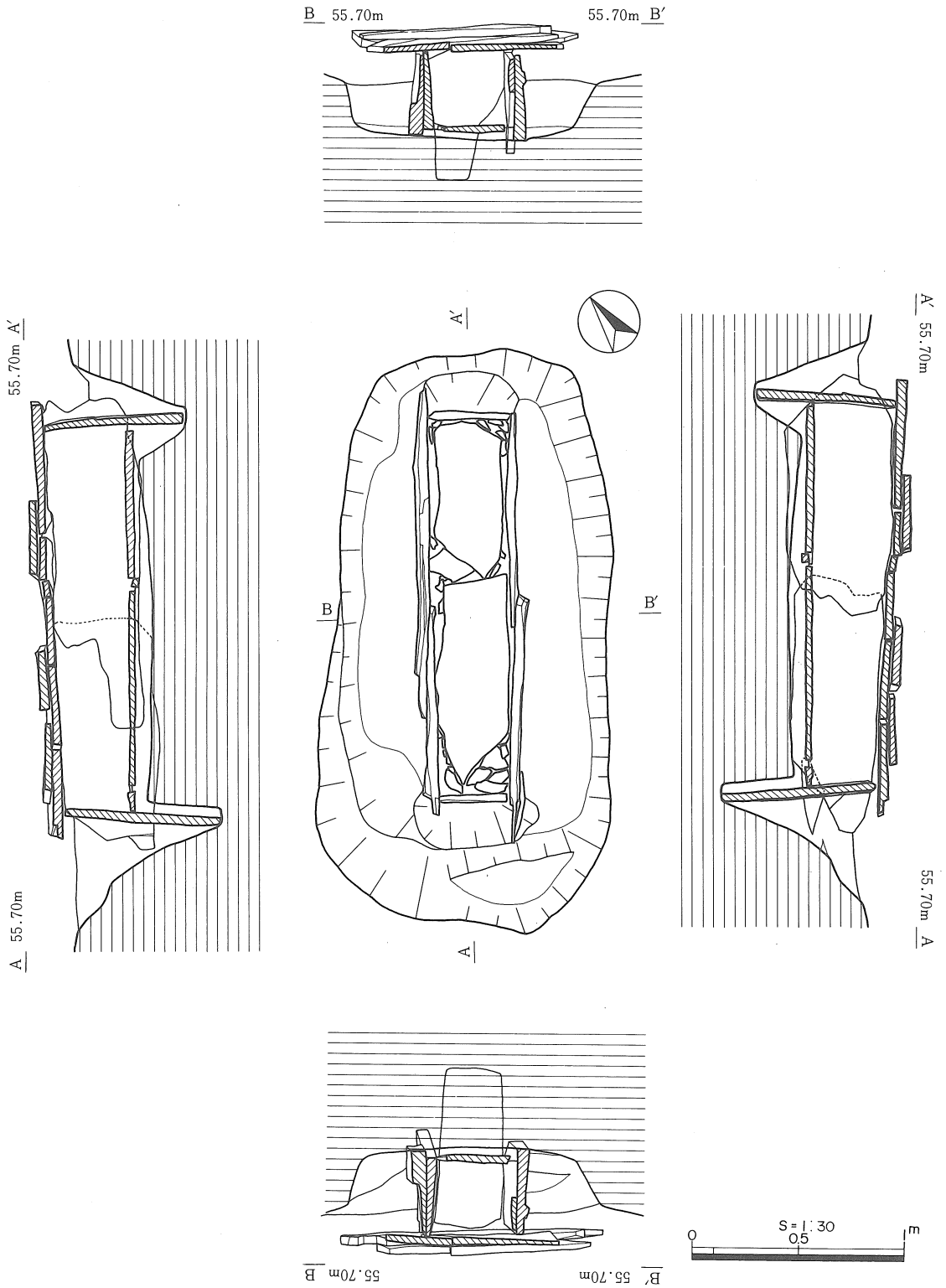
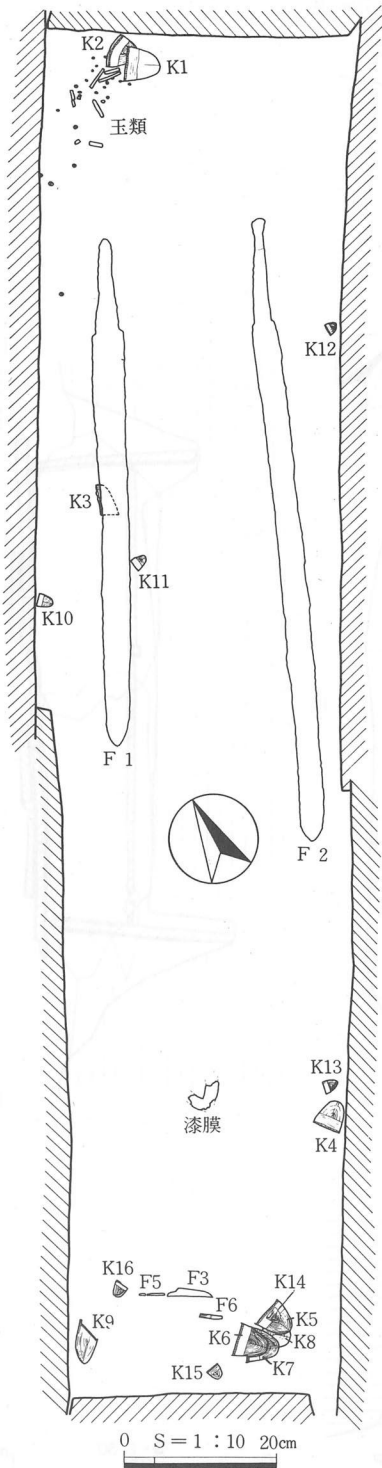
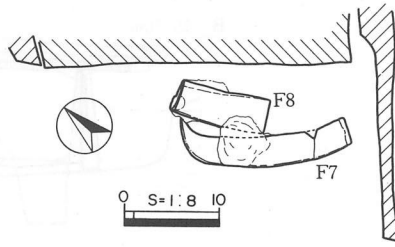


插图56 35号墳主体部石棺实测图



挿図57 35号墳主体部石棺内遺物出土状況図



挿図58 35号墳主体部棺外遺物出土状況図

れなかったが、墳頂部掘り下げ中に丹塗り壺口縁破片Po 1 (挿図51) が出土している。里仁35号墳は今回調査した4基では最大の規模をもち、立地も最も高い位置にある。土器類の出土が乏しく、35号墳の築造時期は墳丘・埋葬形態・副葬品等から判断せざるを得ないが、特に副葬品では、豎櫛は中期古墳に特徴的にみられる遺物であり、剣も剣身が長く、鎌も曲刃で、管玉も細身を呈することから、古墳時代中期の所産と考えてよいであろう。

35号墳の南西側は古墳を想定し、また、その北側斜面も発掘調査を行なったが、古墳・遺構等は全く発見されなかった。古墳群における立地からみて32~34号墳は4基で里仁古墳群中の小支群を形成するとみてよいであろう。



写真3 発掘参加者

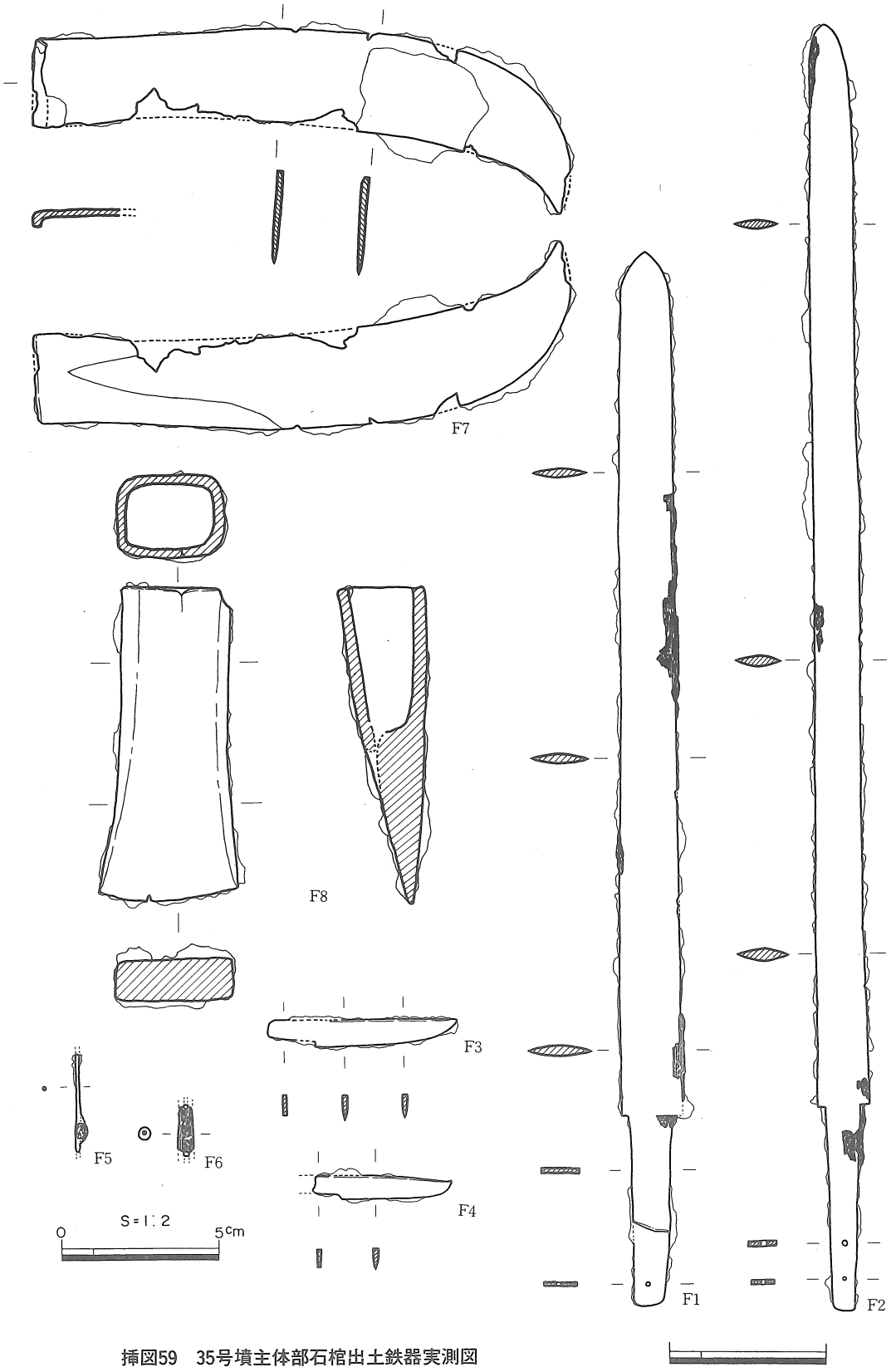
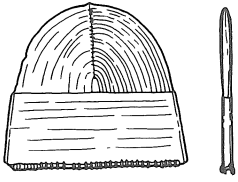
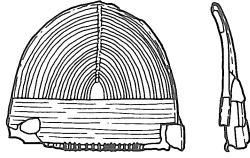


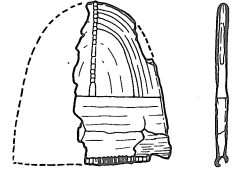
插图59 35号墳主体部石棺出土鉄器実測図



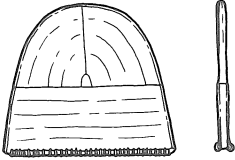
K1



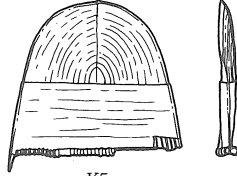
K2



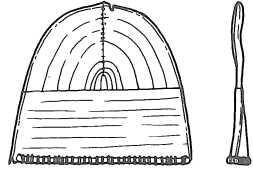
K3



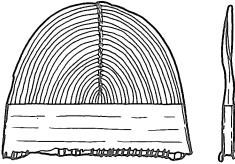
K4



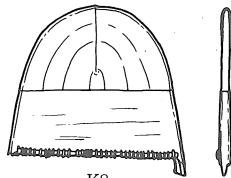
K5



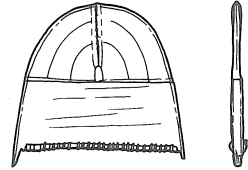
K6



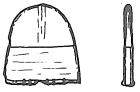
K7



K8



K9



K10



K11



K12



K13



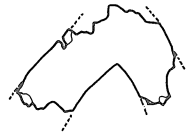
K14



K15



K16



漆膜

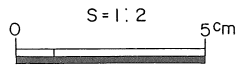
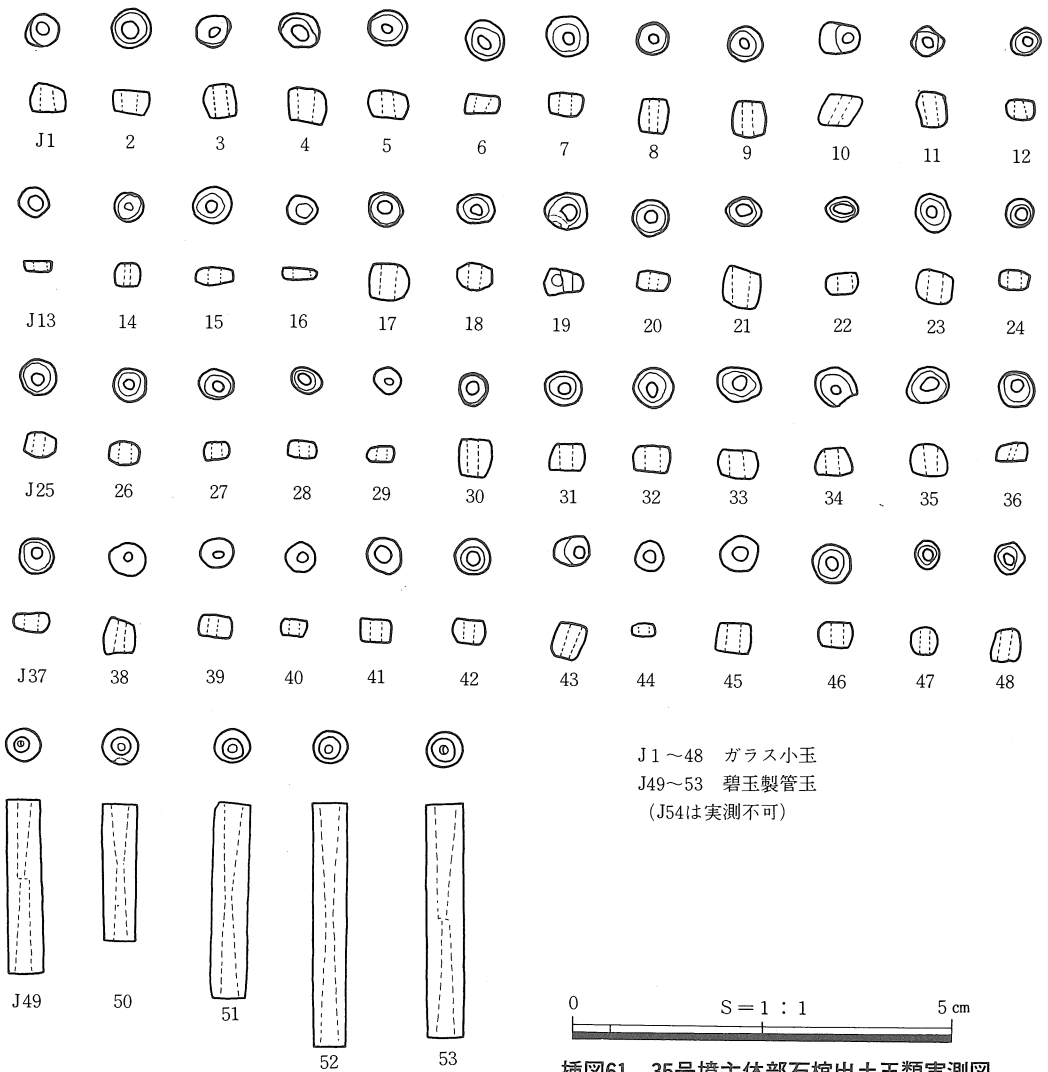


插图60 35号墳主体部石棺出土竖榫突测图



挿図61 35号墳主体部石棺出土玉類実測図

遺物番号 挿図番号 図版番号	出土遺構	器種	①口径 ②器底径 ③胴部径高 ④凸部高 ⑤器壁厚	径高 径高 径高 径高 径高	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
Po1 51	35号墳	壺・口縁	①29.5復		ハの字に斜め上方に開く口縁で、 端部が少し外反し、口唇部は丸い。	調整不明。内面に丹塗り。	良好	淡茶褐色	内面丹塗り	

挿表5 35号墳出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
F 1	59	30	剣	67.5	3.9	0.7	549.5	刃部長53.3cm。やや幅広で断面レンズ状の剣身は切先がふくらむ。両関で先細気味の茎がつき、目釘孔は1箇所。刀身および茎に木質が残存する。
F 2	59	30	剣	82.5	2.3	0.75	592.0	刃部長69.4cm。細身で断面レンズ状の剣身は切先にアクセントがなく先細り気味となる。両関で中細気味の茎がつき、目釘孔は2箇所。刀身および茎に木質が残存する。
F 3	59	30	刀子	6.0	0.9	0.2	4.0	刃部長4.5cmの小型の刀子。片関で茎尻は栗尻に近い。
F 4	59	30	刀子	4.4※	0.75	0.2	2.5	刃部長3.5cmの小型の刀子。斜角片関で茎尻を欠損する。切先は曲がる。
F 5	59	30	棒状鉄器	3.15※	0.15	—	0.2	木質が残存しており、F 6 同様木質棒状品の芯か？
F 6	59	30	棒状鉄器	1.65※	0.2 (0.5)	—	0.1	木質棒状品。中心に鉄芯が入るが両端は欠損する。
F 7	59	30	鎌	17.2	3.2	0.25	63.5	曲刃鎌。柄装着部を刃先を右に置いた場合上に折り曲げる。柄は刃部に対しほぼ直角につけられたものと考えられる。
F 8	59	30	斧	10.0	4.4	2.7	137.0	刃部がやや広がる小型の手斧。袋部は折り曲げてつくられているが合せ目は不明瞭。鍛造である。

挿表6 35号墳主体部出土鉄器一覧表（※は存残値）

遺物番号	結縛部長さ	幅	厚さ	備 考	遺物番号	結縛部長さ	幅	厚さ	備 考
1	4.4	4.9	0.3 0.25	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆やや薄い。遺存状態やや良。	9	3.8	4.6	0.3 0.3	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆が厚く。遺存状態良好。26齒
2	3.8	4.6	0.3 0.3	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆薄い。遺存状態不良。	10	2.1	2.0	0.2 0.25	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。遺存状態良。
3	4.3	※2.3	0.25 0.3	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆がやや厚いが半分を欠損し破損著しい。遺存状態不良。	11	2.0	1.9	0.2 0.2	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。遺存状態不良。
4	4.0	4.5	0.2 0.3	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆が厚く遺存状態良好。32齒	12	1.9	1.8	0.2 0.2	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。遺存状態不良。
5	4.1	4.1	0.3 0.4	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆がやや薄い。遺存状態やや良。	13	2.1	2.0	0.2 0.2	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。遺存状態良。
6	4.2	4.3	0.3 0.2	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆が厚く。遺存状態やや良。	14	1.9	1.9	0.2 0.2	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。遺存状態不良。
7	4.05	5.0	0.1 0.3	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆が薄い。遺存状態不良。	15	1.8	1.9	0.2 0.2	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。遺存状態良。
8	4.0	4.7	0.3 0.3	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。漆が厚く。遺存状態良好。	16	1.9	1.9	0.15 0.2	彎曲結歯式。結縛部漆のみ残存。遺存状態不良。

挿表7 35号墳主体部石棺出土豎櫛一覧表（※は残存値）

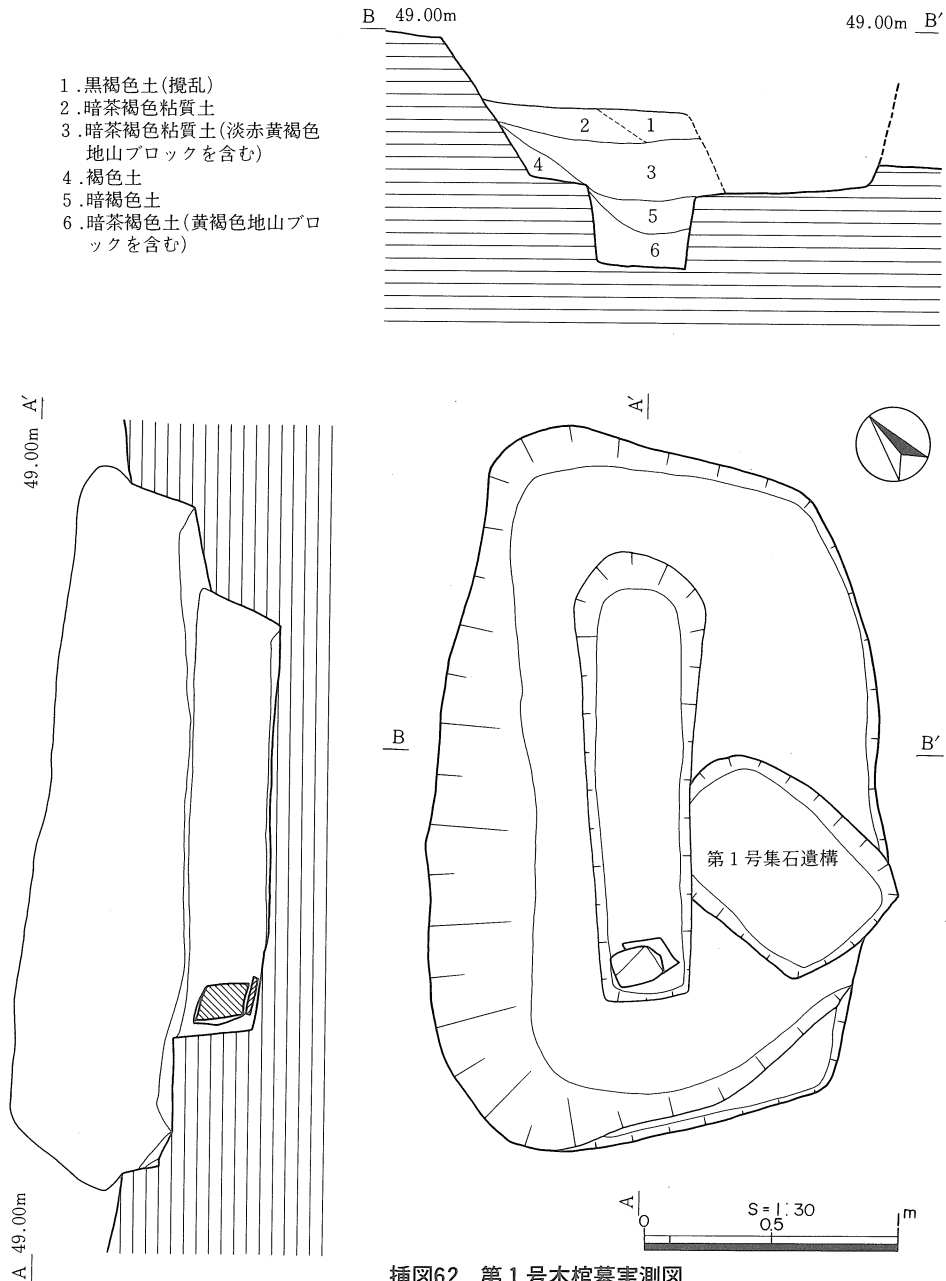
番号	種類	長さ	径	孔径	色 調	材 質	番号	種類	長さ	径	孔径	色 調	材 質
J 1	小玉	0.375	0.47	0.2	淡青色、透明	ガラス	J 31	小玉	0.355	0.47	0.13	青色、透明	ガラス
J 2	小玉	0.3	0.51	0.2	淡青色、透明	ガラス	J 32	小玉	0.37	0.405	0.2	青色、半透明	ガラス
J 3	小玉	0.375	0.43	0.18	青色、透明	ガラス	J 33	小玉	0.365	0.54	0.23	青色、半透明	ガラス
J 4	小玉	0.45	0.515	0.26	青色、半透明	ガラス	J 34	小玉	0.3	0.545	0.16	薄青色、透明	ガラス
J 5	小玉	0.3	0.5	0.19	濃青色	ガラス	J 35	小玉	0.31	0.48	0.2	淡青色、半透明	ガラス
J 6	小玉	0.25	0.53	0.15	青色、透明	ガラス	J 36	小玉	0.2	0.41	0.1	青色、半透明	ガラス
J 7	小玉	0.29	0.52	0.22	青色、透明	ガラス	J 37	小玉	0.24	0.465	0.2	濃青色、半透明	ガラス
J 8	小玉	0.48	0.42	0.15	青色、透明	ガラス	J 38	小玉	0.47	0.48	0.15	青色、透明	ガラス
J 9	小玉	0.415	0.425	0.14	淡青色、透明	ガラス	J 39	小玉	0.28	0.45	0.145	暗青色	ガラス
J 10	小玉	0.42	0.48	0.17	青色、透明	ガラス	J 40	小玉	0.19	0.385	0.16	淡緑黄色	ガラス
J 11	小玉	0.46	0.395	0.15	青色、半透明	ガラス	J 41	小玉	0.27	0.425	0.205	淡青色、透明	ガラス
J 12	小玉	0.3	0.37	0.08	青色、半透明	ガラス	J 42	小玉	0.35	0.46	0.18	青色	ガラス
J 13	小玉	0.17	0.41	0.19	淡青色、透明	ガラス	J 43	小玉	0.405	0.39	0.14	青色、透明	ガラス
J 14	小玉	0.35	0.4	0.12	濃青色、半透明	ガラス	J 44	小玉	0.2	0.36	0.155	青色、透明	ガラス
J 15	小玉	0.24	0.49	0.17	青色、透明	ガラス	J 45	小玉	0.39	0.47	0.195	青色、半透明	ガラス
J 16	小玉	0.17	0.355	0.17	淡青色、半透明	ガラス	J 46	小玉	0.37	0.48	0.165	濃青色	ガラス
J 17	小玉	0.42	0.48	0.24	青色、半透明	ガラス	J 47	小玉	0.335	0.37	0.13	濃青色、透明	ガラス
J 18	小玉	0.235	0.495	0.165	青色、半透明	ガラス	J 48	小玉	0.37	0.405	0.165	青色、半透明	ガラス
J 19	小玉	0.365	0.56	0.12	青色、半透明	ガラス	J 49	管玉	2.58	0.46	0.22	淡緑灰色	碧玉
J 20	小玉	0.25	0.455	0.15	淡青色、透明	ガラス	J 50	管玉	1.82	0.49	0.23	淡緑灰色	碧玉
J 21	小玉	0.425	0.45	0.18	濃青色	ガラス							
J 22	小玉	0.24	0.44	0.18	青色、透明	ガラス							
J 23	小玉	0.35	0.45	0.14	青色、透明	ガラス	J 51	管玉	2.29	0.42	0.195	淡緑灰色	碧玉
J 24	小玉	0.24	0.39	0.17	青色、透明	ガラス							
J 25	小玉	0.23	0.45	0.13	淡青色、半透明	ガラス	J 52	管玉	3.18	0.42	0.28	濃緑色	碧玉
J 26	小玉	0.285	0.43	0.16	淡青色、半透明	ガラス							
J 27	小玉	0.245	0.395	0.15	青色、透明	ガラス	J 53	管玉	3.03	0.49	0.29	濃緑色	碧玉
J 28	小玉	0.2	0.36	0.14	青色、透明	ガラス							
J 29	小玉	0.22	0.36	0.115	青色、透明	ガラス	J 54	管玉	—	—	—	淡緑灰色	碧玉
J 30	小玉	0.46	0.43	0.15	暗青色	ガラス							

挿表8 35号墳主体部石棺出土玉類一覧表

第6節 古墳以外の遺構

1 第1号木棺墓 (挿図62、図版13)

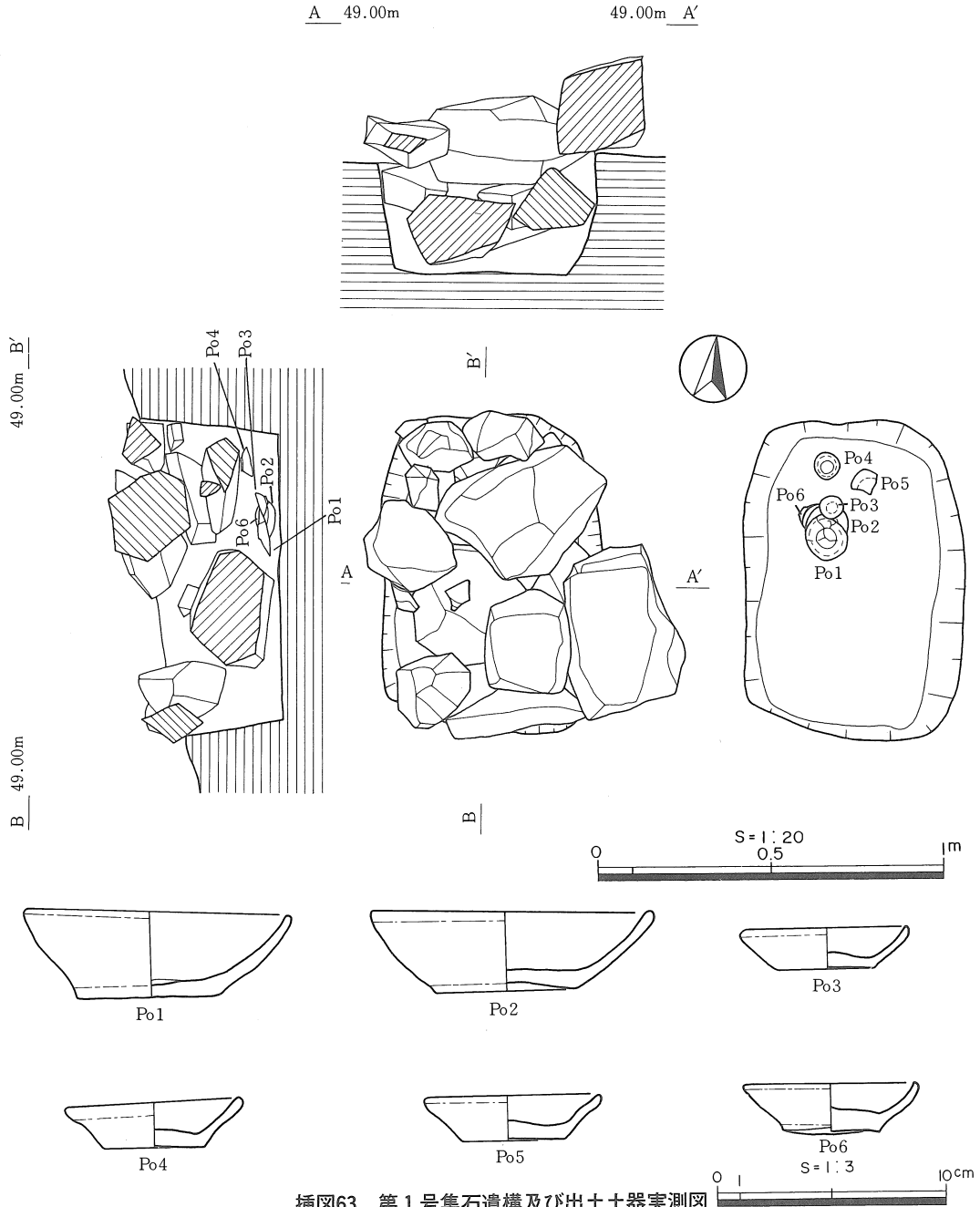
33号墳の東約2m、標高50m付近に位置し、南側を第1号集石遺構によって切られる。長さ275cm、幅175cmの隅丸長方形を呈する2段に掘り込まれた墓壇をもつ。2段目の墓壇は北東側が膨らむ長方形を呈し、上縁で長さ178cm、幅42cmを測る。深さは北西側検出面から91cmを測り、2段目の墓壇は30cm前後の深さをもつ。床面は平坦である。南西側小口部で板状の石(石英安山岩質板状安山岩)、自然石(アプライト)が出土した。



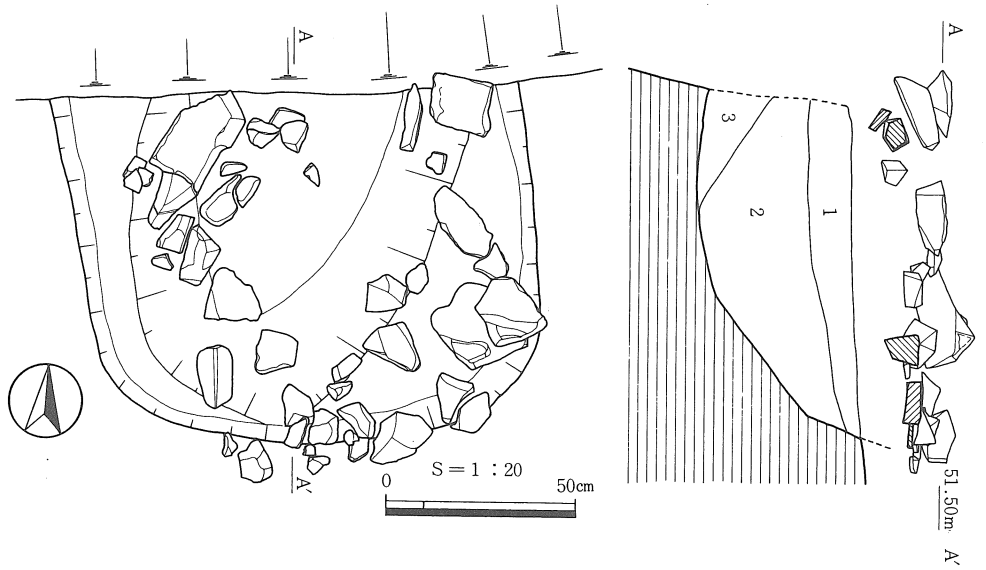
挿図62 第1号木棺墓実測図

2 第1号集石遺構（挿図63、図版20、31）

第1号集石遺構は33号墳の南東約2m、標高50m付近にあり、第2号集石遺構の17m南東、第3号集石遺構の11m南に位置する。第1号木棺墓を切って掘り込まれる土壌の中に大小10数個の石が落ち込んでいた。土壌は隅丸長方形を呈し、主軸をN-17°-Wにとる。その規模は上縁部で長さ92cm、幅63cm、深さ35cmを測る。出土遺物は土師質の坏6個体（Po1～6）である。床面上でPo1～3、Po6、床面より10cm程浮いてPo4・5が出土した。中世墓と思われる。



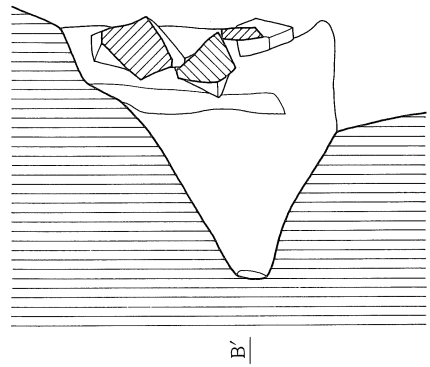
挿図63 第1号集石遺構及び出土土器実測図



- 1. 灰褐色土
- 2. 灰茶褐色土(炭を少量含む)
- 3. 灰橙色土(ややしまる)

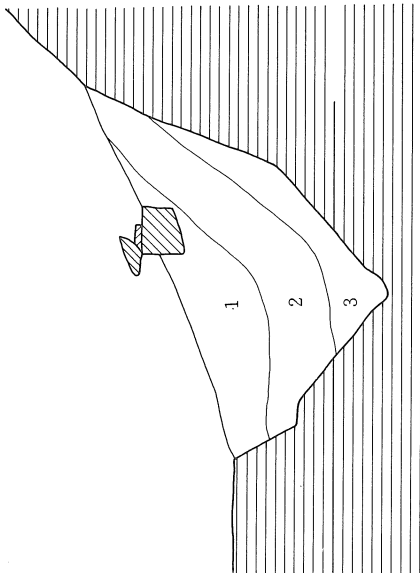
A 51.70m

51.70m A'

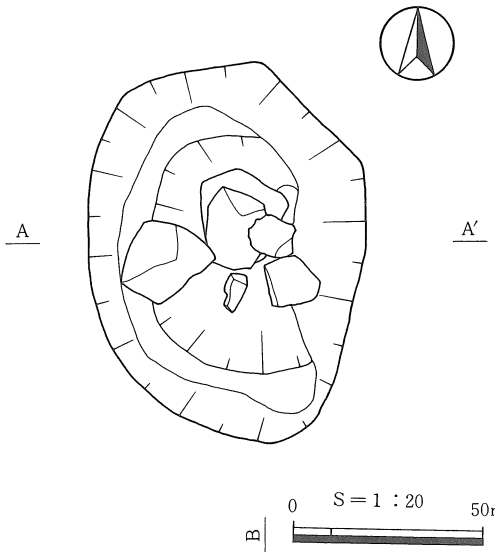


- 1. 暗灰橙褐色土(しまりがわるい)
- 2. 淡橙灰褐色土
- 3. 淡明黄褐色土

51.70m B'



B 51.70m



挿図64 第2号(上)・第3号(下)集石遺構実測図

3 第2号集石遺構 (挿図64、図版20)

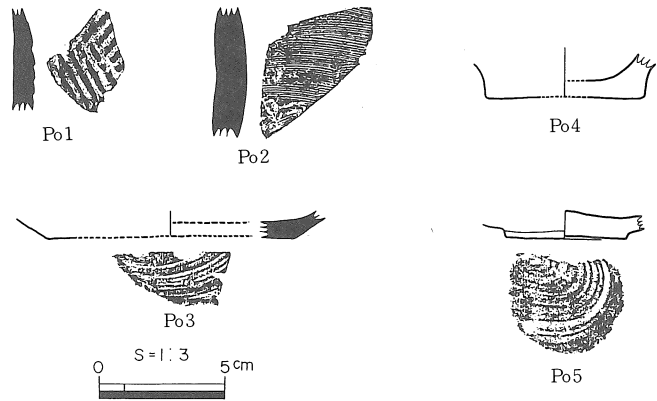
第2号集石遺構は32号墳の南西側墳丘斜面に位置する。北側部が崩れ落ちるが、調査時において約40個の大小の石が馬蹄形状に残っていた。ほとんどが山石で河原石は数個混ざるのみである。石を囲む様に上縁部で長さ93cm(残存)、幅124cm、深さが45cmの土壌が検出された。埋土は第2層が炭を少量含む。遺物は全く出土しなかった。中世墓であろうか。

4 第3号集石遺構 (挿図64、図版20)

第3号集石遺構は32号墳の南東側墳丘斜面の墳頂部からやや下る辺りに位置する。大小5個の石が集まる。石を囲む様にいびつな楕円形を呈する土壌が検出された。上縁部で長軸100cm、短軸74cmを測り、底面に向ってすぼまってゆく。底面までの深さは最大80cmを測る。埋土は全体的にしまりが悪い。遺物は全く出土しなかった。中世墓であろうか。

第7節 遺構外出土遺物 (挿図65)

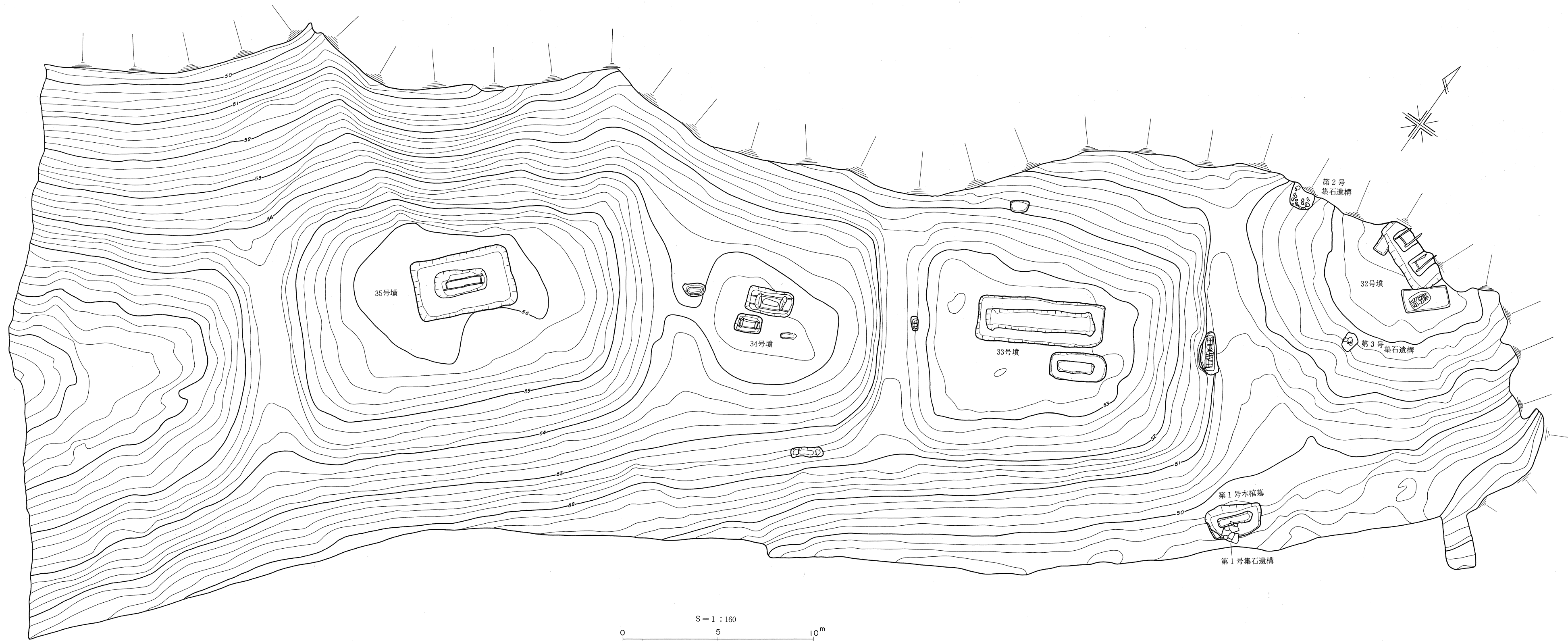
調査区内において堆積土中で古墳
その他の遺構に伴わない遺物が若干ではあるが出土した。須恵器片3点(Po1~3)、弥生土器の底部と思われるもの(Po4)、土師器坏底部(Po5)である。Po1は外面にタタキ目をもつ。Po2は外面に同心円状のカキ目をもつことからみて提瓶であろうか。Po3は底面に糸切り痕をもつ坏である。Po5は底面に回転糸切り痕をもつ。



挿図65 遺構外出土遺物実測図

遺物番号 挿図番号 図版番号	出土遺構	器種	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径 ⑤凸帯高 ⑥器壁厚	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
Po1 63 31	第1号集石遺構	土師器坏	①11.4 ②4.0 ③6.2	平らな底部から極わずかに彎曲気味に外傾して立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面に回転糸切り痕がわずかに残る。他の部分は回転ヨコナデ。	精良。少砂粒を含む。	良好	淡黄灰褐色	
Po2 63 31	第1号集石遺構	土師器坏	①12.0 ②3.7 ③6.1	ややいびつな平底から外傾して立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部はPo1よりわずかに肥厚し丸くおさめる。	底部外面は剝離して不明だが糸切りをしたものと思われる。他の部分は回転ヨコナデ。	良。砂粒を多く含む。	やや不良	淡黄茶褐色	
Po3 63 31	第1号集石遺構	土師器坏	①7.0 ②1.8 ③4.2	小型の坏。平らな底部から外傾して立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味。底部内面は高くなる。	底部外面に静止糸切り痕がわずかに残る。他の部分は回転ヨコナデ。	精良。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	
Po4 63 31	第1号集石遺構	土師器坏	①7.5 ②2.2 ③4.4	小型の坏。平らな底部から外傾して立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部はPo3より肥厚し丸くおさめる。底部内面は高くなる。	底部外面は剝離して不明だが、糸切りをしたものと思われる。他の部分は回転ヨコナデ。	精良。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	
Po5 63 31	第1号集石遺構	土師器坏	①7.4 ②2.5 ③4.4	小型の坏。平らな底部から外傾して立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部はPo3より肥厚し丸くおさめる。	底部外面は静止糸切り痕が残る。他の部分は回転ヨコナデ。	精良。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	
Po6 63 31	第1号集石遺構	土師器坏	①7.4 ②2.2 ③4.2	小型の坏、平らなやや腰高な底部から外傾して立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味。	底部外面は静止糸切り痕が残る。他の部分は回転ヨコナデ。	砂粒を多く含む。	良好	淡黄褐色	
Po1 65	遺構外	須恵器片			外面にタタキ目。内面は剝離が激しい為不明。	精良	良好	外面は淡青灰色。内面は淡灰褐色。	
Po2 65	遺構外	須恵器片 提瓶			外面にカキ目。内面は回転ヨコナデ。	精良	良好	外面は青灰色。内面は淡白灰色。	
Po3 65	遺構外	須恵器皿	②1.0残 ③9.9復	平らな底部から大きく外傾して立ち上がる。	外面底部に糸切り痕が残る。その部分は回転ヨコナデ。	精良	良好	青灰色	
Po4 65	遺構外	弥生土器	②1.8残 ③6.0復	平底。	調整不明	精良	良好	淡黄褐色	
Po5 65	遺構外	土師器坏	②1.1残 ③4.7復	平底。	底部外面に回転糸切り痕残る。	精良	やや不良	淡黄茶褐色	

挿表9 集石遺構・遺構外出土土器観察表



挿図66 調査区全体図

第4章 遺構と遺物の検討

里仁古墳群のうち32～35号墳の4基は新発見の古墳であり、調査の結果、保存のよい典型的な中期様相をもつ古墳の姿が浮びあがってきた。本章では里仁古墳群の遺構と遺物について若干の検討を加え、里仁古墳群の歴史的な位置を模索してまとめしておく。

第1節 墳丘・埋葬施設について

1. 墳丘

調査を行なった32～35号墳はいずれも1辺14～18mの方形墳であった。近年の墳丘全体における面的な調査によって方墳の数はかなり増えてはいるが、円墳に比べて稀少な存在ではある。その数少ない類例をみると、古墳時代前・中期以前の古墳が殆どであって、里仁古墳群のように舌状丘陵尾根主軸に直交して掘り割りを掘削し、墳丘の大部分を地山整形によって形成するものである。これは、弥生時代の方形台状墓以来の方形墳丘の伝統を受けつぐものと考えられる。里仁周辺では舶載鏡二面を出土した桂見2号墳が1辺28mの方墳で、1号墳も1辺22mの方墳であり、庄内～布留初頭に併行する時期の築造とされている。^{註1} 他には湖山池南西岸吉岡周辺の丘陵尾根上に並ぶ小規模方形墳墓の存在が確認されている。^{註2} 湖山池周辺には古相の古墳が集中しており、方系墳の類例は今後も増加するものと思われる。

2. 埋葬施設

埋葬施設としては箱式石棺、箱式木棺、埴輪棺、土墳墓が検出された。

箱式石棺 灰緑色を呈する石英板状安山岩を用いており、板石を縦長に用いて深く埋め立てた小口石を両側石で挟み込む通有の形態であった。棺底には板石を敷き、石材の合せ目等には粘土で目張りをした丁寧な造りである。32、35号墳の中心主体となっており、32号墳では2棺が1墓墳内に計画的に納められていたのが注目される。

箱式木棺 棺材痕跡が確認できたのは34号墳の2基だけであるが、墓墳の形状等から木棺を直葬したと考えられる土壌が5基検出された。これらを推定しうる木棺の構造から分類すると、

I類 深い小口穴を伴い、基本的に箱式石棺と同じ構造の木棺……34号墳第1・2号埋葬施設

II類 片側に浅い小口穴を伴い、外小口となる長大な木棺……33号墳第1号埋葬施設

III類 小口穴をもたない小規模な木棺……33号墳第2号埋葬施設、第1号木棺墓に分けられる。I類では34号墳第1号埋葬施設が木棺（木槨）内に土壌があり、特異な構造となるが、小規模な埋葬施設で出土遺物はみられなかった。II類は長さ480cm、幅55cmの長大な組合せ箱式木棺で、墓墳両短壁が外側へ張り出しており、ここに小口板をはめ込む外小口構造を想定した。外小口となる棺構造の類例としては西山5号墳など倉吉市の3例が知られるが、^{註3} これらは小口部に板石を立てているものであり、西山例は割竹形木棺と考えられるなど棺構造自体は異っている。今後、この形態の類例を待ちたい。III類は木棺を納めたと考えられる土壌であり、墳底に掘り込んだ小口穴や側板痕跡がみられないことから、I類の石棺構造を模した箱式木棺とは異った組合せ木棺が推定される。

埴輪棺 32号墳第3号埋葬施設、33号墳第3・4号埋葬施設が埴輪を用いた埋葬施設であるが、

33号墳の2基は墓墳に納めた遺体を覆うように埴輪片をかぶせたものであり、厳密には埴輪棺とはいえないものである。弥生土器、土師器を縦割りにした同形態の埋葬施設はいくつかみられるが、埴輪を用いたものとしては当地域において初見となる。33号墳第3号埋葬施設でみると墓墳内の東端においた埴輪片を枕として遺体を納めた上に、他古墳から移した基部を欠損する(鱗付)円筒埴輪6個以上を縦割りにして、おおいかぶせている。埴輪片で蓋をしたというのが正しい表現であるかもしれない。32号墳第3号埋葬施設は特異な壺円筒埴輪(後述)を棺本体とする単棺構造であり、両端、胴部透し孔を他の円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪・塊石で塞いでいる。典型的な埴輪棺といえるであろう。現在、県内では円筒埴輪棺が25例知られており、^{註4} 今後も類例は増えるものと思われる。埴輪棺は本来従属的な埋葬施設であり、周溝内、埴丘端あるいは前方後円墳でいえば前方部に設けられるのが普通とされるが、32号墳第3号埋葬施設は中心主体でこそないが墳頂部に位置している。鳥取市津ノ井の生山42号墳では埴輪棺が円墳(径8m)の中心主体となっている例があるが、^{註5} 全国的にみても奈良県近内7号墳2号棺例を初め数例しかなく、^{註6} 墳頂第2次埋葬施設である本例も含めて特例といえるだろう。注目すべきは、これらの墳頂部埴輪棺埋葬施設の多くが、円筒埴輪の転用でなく、棺体として用いることを意図して作られた円筒棺であることで、32号墳第3号埋葬施設Po1も、同様な意図で造られた可能性を示唆するものであろう。

註1 平川誠、船井武彦氏の御教示による。

註2 『葦岡長者古墳発掘調査報告書』明日の湖南を考える会。1984年

註3 真田廣幸、森下哲哉氏御教示による。

註4 寺西健一編『特別展 はにわ』鳥取県立博物館 1984年

註5 中野知照氏御教示による。

註6 橋本博文「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢』1979年

第2節 遺物について

古墳、集石、木棺墓の調査を通して鉄器、玉類、土師器、埴輪等の出土遺物を多数検出した。本節ではこの中で特に注目される、豎櫛、鑄造鉄斧、埴輪について若干の検討を加えておく。

1 豎櫛(挿図12、60 図版21、29)

32号墳第1号埋葬施設第1号石棺で18個以上、35号墳主体部石棺からは16個が出土した。豎櫛は串状に削った竹ひごを必要な本数をそろえて中央を糸でかがり、そこを中心にしてU字状に彎曲させ、横糸でかがった上部を0.8~2cmの幅でまきかためて、黒漆を塗っており、所謂「結歯式」の豎櫛である。結縛部漆膜のみが残存しており、歯部を欠損するが完形例等^{註1}をみると結縛部に対して歯部が2倍くらいの長い歯がつくものとされる。本古墳群出土の豎櫛は結縛部幅2cm前後の小型の個体(歯数16前後)、と幅4.5~5cm前後の大型品(歯数40前後)に分けられ、それぞれ歯を含めた推定復原長は6cmと12cm前後と思われる。豎櫛の用途は、髪をくしけずる「梳櫛」ではなくて「髪留め」あるいは「飾櫛」であったといわれ、人物埴輪(女子)の頭部前額に1個の櫛をさしている表現が多く確認されている。羽合町長瀬高浜1号墳第1号埋葬施設(箱式石棺)に埋葬された女性人骨(25~40才)前額部で検出された豎櫛が装着状態を示すと思われるのは、これを証明するものであり、髪留めなどの実用としては1~数個で足りたものと思われる。ところが、本調査では1石棺から16~18個の豎櫛が出土しており、岡山県金蔵山古墳からは40個以上が出土した例^{註3}もある。県内出土例(挿表10)をみても、倉吉市屋喜山9号墳で11個以上出土した例

No	古墳名	所在地	墳形・規模	出土遺構	櫛			(人骨) 伴出遺物
					点数	大きさ(結縛部幅)	備考	
1	土下狼谷古墳	東伯郡北条町土下字狼谷	円墳 径21m	箱式石棺(A棺)	2	小型 (2cm前後)	竹ひご10本	(男性) 勾玉・管玉・直刀
2	古郡家1号墳	鳥取市古郡家字上山	前方後円墳 全長90m	箱式石棺 (3号棺)	4	中～大型 (3.5～4cm)	頭部付近で出土	(男性) 土師器(壺) 鏡・短甲・鉄剣・鉄鏃・鉈・刀子・針・錐状鉄器
3	湯山6号墳	岩美郡福部村湯山字宮ノ前	円墳 径13m	箱式石棺	1	小型 (推定2cm)	側壁際に置かれた直刀身に付着	土師器(器台)直刀・冑・短甲・棺外より鉄鏃・土師器
4	長瀬高浜1号墳	東伯郡羽合町長瀬字高浜	円墳 径24m	箱式石棺 (第1埋葬)	1	小型 (1.2cm)	人骨頭蓋骨前頭部に付着しており装着状態を推定させる。竹ひご6本	(女性) 土師器(高杯)・直刀
5	屋喜山9号墳	倉吉市和田字屋喜山	円墳 径20m	箱式石棺	11	大型5 (4～5cm) 小型6 (2cm前後)	大(5)竹ひご20本 小(6)竹ひご8本 大型の堅櫛の中軸に柄がつく	(男性か) 勾玉・管玉・ガラス小玉・丸玉・鉄剣・鹿角装刀子
6	六部山38号墳	鳥取市久末字長谷	円墳径15m程	箱式石棺	2	中～大型 (3.5～4.5cm)	攪乱土中出土 竹ひご14～16本	(なし) 鉄剣・刀子
7	里仁32号墳	鳥取市里仁字岩谷大桶字村土居	方墳一辺14m	箱式石棺 (第1埋葬2号石棺)	18以上	小型 (2cm前後)	石棺南東隅でかままって出土? 竹ひご8本前後	なし
8	里仁35号墳	鳥取市字岩ヶ谷大桶字村土居	方墳一辺18m	箱式石棺	16	大型9 (4.5～5cm 前後) 小型7 (2cm前後)	石棺内に散在する。大竹ひご20本前後 小竹ひご8本前後	(なし) 管玉・ガラス小玉・鉄剣・刀子

挿表10 鳥取県内堅櫛出土地名表 (埋文センター野田久男氏作製地各表に加筆)

註4
があり出土本数が少ないものでも出土状況等から装着が考えられない例は多い。里仁35号墳も石棺内に散在する出土状況(挿図57)からは全部が装着されていたとは考えられない。従来、堅櫛の副葬には単なる実用品・貴重品として納める以上に呪術的な意味あいがあるとされてお^{註5}り、そういった性格も考えねばならないであろう。

2 鑄造鉄斧(挿図39、図版26)

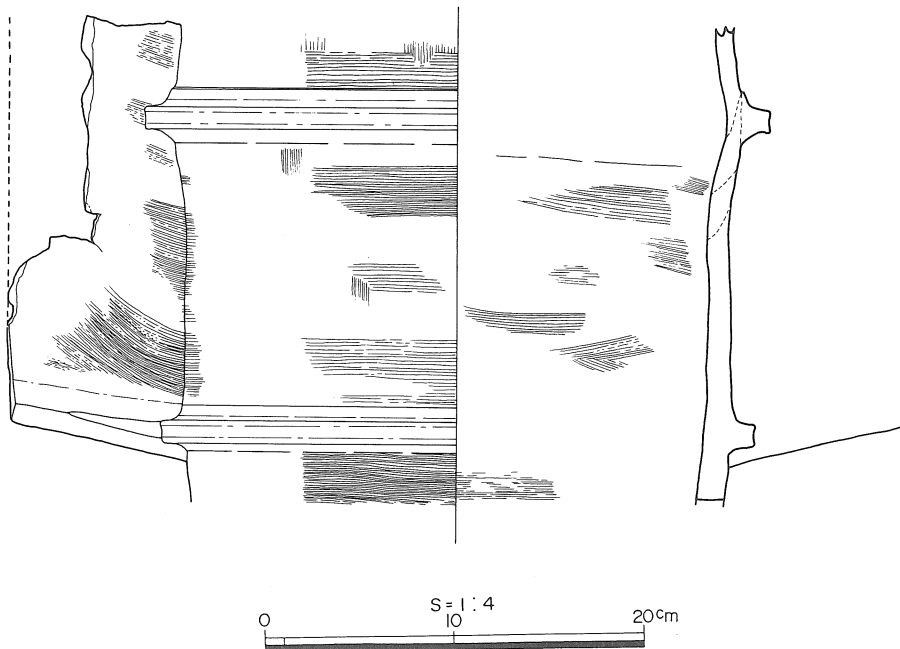
里仁33号墳では、多彩な鉄製武器、農工具類を検出したが、北東側掘り割り、及び北西側墳裾から鑄造鉄斧2点が出土した。鑄造鉄斧は2点とも袋部(登)の一部を欠損しており、F29が残存長10.5cm、F30が残存長13.3cmを測り、F30がやや大きく、遺存状態も良い。鉄製品が鑄造品であるか鍛造品であるかは化学分析あるいは外形の特徴などから判断される。F29、30は木柄を装入する袋部の横断面が明瞭な稜をもつ梯形を呈し、鍛造鉄斧の袋部のように折り返しの合せ目がみられず、側面形は楔形で側面～刃部にかけて鑄型の合せ目の「こうばり」が残っている。鉄鑄の状況も鍛造品に比べれば少なく、層状の剝離もみられない。むしろ、F29では鑄造品特有のヒビ割れが顕著であり、これらの諸特徴は鑄造鉄斧の特徴と一致しており、形態、大きさも三国時代の朝鮮半島、日本国内出土の鑄造鉄斧に酷似している。しかしながら、これらの特徴はともすれば主観的になりやすいものであり、最終的に鑄造品であるという断定と産地同定などは現在、奈良国立文化財研究所保存処理室に依頼している化学分析の結果を待ちたいと思う。とりあえず外形の特徴からF29・30を鑄造鉄斧であると仮定して考えると、山陰地方では初めての出土であり、弥生、古墳時代において、韓国・日本合わせても約60遺跡出土例にすぎないという^{註6}。したがって鍛造鉄斧に比べて稀少価値のある品ではあるが、33号墳では掘り割り及び墳裾から廃棄を思わせる状況で出土している。古墳時代の鑄造鉄斧は古墳から出土したものが殆どであるが、その出土状況には里仁33号墳とよく似た例が多く、岡山県殿山8号墳(周溝内)^{註7}、福岡県炭焼3号墳(周溝内)^{註8}、広島県地藏堂山1号墳(土壇上縁)^{註9}、奈良県兵家6号墳(堅穴式石室上)^{註10}などのよう

な特異な出土状況を示しており、副葬されていたとしても他の副葬品とは区別された扱いを受けている。これは、1つには鑄造鉄斧が刃部の脱炭処理等を施さなければ靱性において鍛造品に著しく劣っており、脆いという点から破損の可能性が高く、^{註11}実用的でなかったためとも考えられるが、元々壊れていたものであれば古墳まで持ち運ぶ必要もなく、古墳祭式の中で使用され、欠損したため廃棄された可能性も考えられるのではなからうか。^{註12}鑄造鉄斧盛行の時期についてみると、^{註13}里仁33号墳で出土した所謂「鑄造梯形鉄斧」としては福岡県炭焼3号墳出土例が最も古く4世紀後半まで溯るとされており、主に5世紀代の古墳から出土していることから、本古墳群の推定築造時期と合致している。

3 埴輪

32、33号墳から普通円筒埴輪（以下円筒埴輪）、鱗付円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪、壺形埴輪、家形埴輪が出土している。出土状況からみると32号墳の埴輪棺に用いられた個体は、墳丘に樹立されていた円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪とは異なるようであり、33号墳は墳丘に埴輪を立て並べた形跡がみられず、埴輪棺に用いた個体は他から転用されたものと思われる。以下、各埴輪について概略をまとめておく。

○鱗付・円筒埴輪 埴輪棺に用いられた個体には、普通円筒と鱗付円筒があるが、32号墳掘り割り出土の個体には鱗付はみられない。円筒埴輪についてみると、高さは60cm前後と推定され、径は30～35cm前後でやや差異がみられる。全体を知り得る個体はみいだせないが、破片を集めて全体を窮うと3条凸帯3段で口縁部も凸帯状を呈す。透し孔は第1段に半円があり、第2・4段に逆三角形、縦位長方形がみられる。外面調整は第1段がタテハケのみで、第2段以上はタテハケ後ヨコハケを施しているが（図版31・②）、^{註14}33号墳第3号埋葬施設出土埴輪にはタテハケ後のヨコハケ



挿図67 里仁2号墳出土鱗付円筒埴輪実測図（鳥取県立博物館蔵）

を施さない個体もある(図版31・①)。内面はナナメヨコハケの後、凸帯裏面などにナデを施してハケメが消されている。鱗付円筒埴輪は33号墳の第3・4号埋葬施設に用いられた個体であるが、消滅した里仁2号墳でもかつて鱗付円筒埴輪が出土しており(挿図67)、里仁古墳群は、山陰で唯一鱗付円筒埴輪を出土する古墳群である。鱗付円筒埴輪の形態、調整等は鱗の付かない円筒埴輪と殆ど同じであるが、透し孔に正方形に近いものがある(挿図17、Po2)。鱗部は円筒埴輪が調整、凸帯貼り付けを終えて完成した後に、器壁に2条の沈線を入れ凸帯を切り欠いて、第1凸帯～口縁部にわたって板状の鱗部を貼りつけ、両側に粘土を補填し、その上からヨコ及びナナメ方向にハケメを施している(図版31・③)。Po11(挿図19)は普通円筒埴輪として実測したが、器壁が薄いなど他の円筒埴輪と様相が異っており、楕円形円筒埴輪の可能性を示摘しておく。

○壺形埴輪 32号墳墳丘掘り割り中から壺形埴輪片を多数検出した。全体を復原できた個体はなかったが、胎土・色調・出土状況からみて同一個体と思われる破片を用いて復原したのがPo21である(挿図22、図版23)。推定器高57cmで、底径12.4cmの有孔筒状の底部からハの字状に斜め上方に開き、肩の張る胴部に径12cm前後の筒状の頸部が続き、口径29cmまでラッパ状に開く口縁部は下端に明瞭な稜をもつが、朝顔形埴輪のような凸帯は貼り付けられない。朝顔形埴輪と比べて口頸部の器壁が薄いのも特徴といえる。県内での壺形埴輪の出土例としては倉吉市小林1号墳、^{註16}高鼻2号墳、^{註17}向山309号墳^{註18}で美作地域との交流を想定させる壺形埴輪を出土しており、小林1号墳^{註19}や名和町釈迦堂古墳出土の朝顔形円筒埴輪も系譜的にはこの壺形埴輪に関係する存在であろう。^{註20}他には東郷池周辺の馬の山4号墳、14号墳、北山1号墳でも壺形埴輪が出土しているといわれるが詳細は不明である。これら倉吉周辺の壺形埴輪と里仁32号墳の壺形埴輪は形態などからは直接的に連がるものではないが、^{註21}両者の築造時期の差を勘案すれば、墳丘に仮器としての壺を並べるという認識が長く受け継がれていることが窺える。

○壺円筒埴輪^{註22} 32号墳第3号埋葬施設埴輪棺本体に用いられていた個体であり、鱗付円筒埴輪に壺形埴輪が結合していれば、「鱗付朝顔形円筒埴輪」なのであるが、本例はその壺部口縁がラッパ状に開く複合口縁を呈さず、屈曲部から短く内傾して立ちあがり、端部が平坦面をなす所謂「山陰的」な複合口縁土師器壺形土器の形態をみせている。これは器台と壺の結合体である朝顔形円筒埴輪がその結合体としての性格を抽象化され、定型化したかたちとして当地にもたらされたのではなく、壺と器台の結合という本来の意味を失っていないがために生れた形態と考えられる。先述した32号墳墳丘には円筒埴輪と壺形埴輪がセットで樹立されていたと思われる事実も、これを裏付けている。加えて、里仁古墳群の埴輪は古式の埴輪の様相をよく残し、鱗付円筒の存在など、畿内的に洗練された様相が強いが、Po1は在地で生産されたことは明らかで、他の個体も在地産と考えることができる。この意味で、定型化した朝顔形円筒埴輪と区別するため「壺円筒埴輪」と仮称した。広義においては両者は同じものと考えてよいであろう。次にPo1は埴輪棺として用いるために造られたか否かが問題となる。埴輪棺として製作したのであれば鱗部をつける必要はないとも考えられるが、山陰地方には、当該期の埴輪棺と並ぶ土器棺葬として土師器壺形土器を用いた壺棺が多くみられる。^{註23}Po1の壺部が「山陰型」の壺形態をとっているのは壺棺葬としての意識の表象と考えることもできよう。

○家形埴輪（挿図24、Po30、図版22）32号墳南西側掘り割り底において検出された。家形埴輪は古墳における埴輪祭式の中で重要な位置を占るといわれ、本来埴輪頂部におかれるものであるにもかかわらず、Po30は転落した様子もなく、掘り割り底におかれたものである。しかも削平された痕跡がないにもかかわらず上半部を欠失し、周辺に家形埴輪上屋部の破片がみられないのは、風化が著しいことと併せて、埴輪頂部におかれていたものが風化して欠損した後、掘り割り内に2次的移動をしたものと考えざるをえない。その目的は不明であるが、埋葬施設として転用された可能性もあるであろう。

- 註1 山形県漆山古墳出土例は全長約9.6mになるという。亀井正道他『日本の考古学』V 1966年
 註2 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V』鳥取県教育文化財団 1983年
 註3 西谷真治他『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959年
 註4 森下哲哉『屋喜山9号墳発掘調査報告書』『四王寺地域遺跡群遺跡詳細分布調査報告書』倉吉市教育委員会 1982年
 註5 大場磐雄『櫛私考』『古代研究』1 1950年
 註6 柳沢一男氏の御教示によるが、類例はその後増加しているとのことである。
 註7 平井勝『鑄造鉄斧』『殿山遺跡、殿山古墳群』岡山県教育委員会 1982年
 註8 柳田康雄他『炭焼古墳群』福岡県教育委員会 1968年
 註9 松村昌彦『地藏堂山古墳群』『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会 1977年
 註10 伊藤勇輔他『兵家古墳群』奈良県立橿原考古学研究所 1978年
 註11 大澤正己『馬場山遺跡出土の鑄造鉄斧の分析調査』『馬場山遺跡』北九州市教育委員会 1980年
 註12 鑄造鉄斧の性格については、かつて鉄素材の可能性を示適されたことはあるが、(森浩一「古墳出土の鉄鋌について」『古代学研究』21・22号 1959年)、本来道具として造られたものが、その性質の特性から「珍貴なもの」としての「奢侈的色彩」をもつように至ったものと考えられており、さらに「斎斧」といった祭祀的性格まで示摘されている。川越哲志「弥生時代の鑄造鉄斧をめぐって」『考古学雑誌』第65巻第4号 1980年
 註13 岡崎敬「鑄造梯形鉄斧」『沖ノ島』1979年
 註14 凸帯貼り付け工程をして第1次調整と第2次調整ハケメを区別するのであれば、里仁古墳群出土円筒埴輪のハケメ調整は、タテハケもヨコハケも凸帯貼り付け以前のもので第1次調整となる。(図版31・④)
 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
 註15 久保稔二郎 寺西健一氏教示による。文化課田中秀明氏採集。鳥取県立博物館保管
 註16 根鈴輝雄『イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1982年
 註17 真田廣幸『高鼻2号墳発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1982年
 註18 森下哲哉氏教示による。
 註19 清水真一他『釋迦堂古墳・埴輪について』『名和遺跡群発掘調査報告書』名和町教育委員会 1981年
 註20 鳥取県埋蔵文化財センター「鳥取県内出土埴輪地名表」『特別展 はにわ』鳥取県立博物館 1984年
 註21 形態的には福岡市老司古墳の壺形埴輪などに近い。森貞次郎他『福岡市老司古墳発掘調査概報』福岡市教育委員会 1969年
 註22 「壺円筒埴輪」の名称は伊達宗泰「円筒系埴輪の呼称と分類についての再検討」『考古学と古代史』1982年の「円筒壺形埴輪」から採ったが、その意味においては伊達氏の主張を生かしていない。
 註23 東森市良「山陰地方発見の壺棺とその特色」『考古学研究』第14巻第2号 1967年

遺構名	埴形 (最大辺×高m)	埋葬施設	出土遺物
32号墳	方墳(14×1.8)	箱式石棺2、土壇墓1、埴輪棺1	鱈付壺円筒埴輪、円筒埴輪、鱈付円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪、家形埴輪、壺
33号墳	方墳(14×3.2)	箱式木棺2、土壇墓1、埴輪棺(?)2	円筒埴輪、鱈付円筒埴輪、壺、鉄剣、刀子、鉄鏃、鉞、鏝、鎌、斧(鍛造、鑄造)、鋤先
34号墳	方墳(11×2.1)	箱式木棺2、土壇墓3	なし
35号墳	方墳(18×2.6)	箱式石棺1	壺、鉄剣、刀子、鎌、斧(鍛造)、ガラス小玉、碧玉製管玉、壺
第1号木棺墓		箱式木棺	なし
第1号集石遺構			土師器杯
第2号集石遺構			なし
第3号集石遺構			なし

挿表11 里仁古墳群調査遺構一覧表(1984)

第3節 まとめ 一里仁古墳群の歴史的位置一

里仁32～35号墳は外部構造・内部施設・出土遺物から中期的様相をもつ方墳であることが明らかとなった。これらのうち最も時期判定の資料となり得るものは33号墳北東墳裾で出土した土師器壺形土器Po1～3であろう。しかしながら、千代川流域因幡地方での当該期の土師器編年は確立されておらず、県中部長瀬高浜遺跡の土師器編年でみるとそのⅢ期より後出する段階のもの^{註1}と考えられる。また、32・33号墳出土の円筒埴輪は形態・調整の特徴からみて川西編年のⅡあるいはⅢ期に併行するものと思われる。埴輪を初めとした他の出土遺物の年代観もこれら土器類の編年観と大きく矛盾せず、実年代でいえば5世紀前半代から次々と築造されたものであろう。里仁古墳群は湖山池南岸の古墳群の中で、大規模首長墳の系統とは別に在地の弥生時代墳墓の系譜をひく中・小規模古墳群として位置付けられ、南方300mの楕円1号墳（前方後円墳・90m）を頂点とする支配者層の奥津城とすることができよう。本調査において、墳頂部並葬からみた、被葬者内部構造の検討などの提示された問題は紙幅と時間的制約もあり、後論に譲ることとする。また、近年の開発と破壊による里仁古墳群の現状には憂えうべきものがあり、挿表12に古墳群の現状を整理して本調査記録の結語としたい。

註1 土井珠美氏教示による。『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 1981年

註2 川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年

番号	古墳名	概要			『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』の番号。他の名称	備考
		墳形(規模)m	埋葬施設	出土遺物		
1	里仁1号墳	円・(7.5)	小塚込め土壇?	須恵器	67	1981年鳥取市調査(文献3) 消滅
2	里仁2号墳	円・(一)	—	髷付円筒埴輪	68	埴輪棺か? 消滅
3	里仁3号墳	円・(68)	—	—	69	
4	里仁4号墳	円・(10)	—	—	70	
5	里仁5号墳	円・(12.1)	—	—	71	
6	里仁6号墳	円・(13)	—	—	72	盗掘穴
7	里仁7号墳	円・(11)	—	—	73	
8	里仁8号墳	円・(10)	—	—	74	盗掘穴
9	里仁9号墳	円・(12)	—	—	75	
10	里仁10号墳	円・(9)	—	—	76	石棺材散乱
11	里仁11号墳	円・(20)	—	—	77	石棺材散乱
12	(里仁12号墳)				78 布勢グラウンド1号墳	1980財団調査(文献2)古墳ではない 欠番・消滅
13	里仁13号墳	—	横穴式石室	—	79	石室露出(文献1)以後確認できず 消滅
14	里仁14号墳	円・(一)	横穴式石室(片柱式)	—	80	石室露出(文献1)以後確認できず 消滅
15	里仁15号墳	円・(14)	—	—	81 布勢グラウンド4号墳	1980測量(文献2)調査放棄 消滅
16	里仁16号墳	円・(16.5)	—	—	82 布勢グラウンド5号墳	1980測量(文献2)調査放棄 消滅
17	里仁17号墳	円・(20)	—	—	83	葦石
18	里仁18号墳	円・(13)	—	—	84	
19	里仁19号墳	円・(11.4)	—	—	85	
20	里仁20号墳	円・(12)	—	—	86	
21	里仁21号墳	—	—	円筒・形象埴輪	87	埴輪棺(合口)か?盗掘穴(文献1)
22	里仁22号墳	円・(18)	—	—	88	

番号	古墳名	概要			『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』の番号。他の名称	備考
		墳形(規模)m	埋葬施設	出土遺物		
23	里仁23号墳	円・(23)	—	円筒埴輪	89	盗掘穴
24	里仁24号墳	前方後円・(22.6)	—	—	90	
25	里仁25号墳	円・(20)	—	—	91	葦石、盗掘穴
26	里仁26号墳	円・(11)	—	—	92	
27	里仁27号墳	円・(11)	—	—	93	
28	里仁28号墳	円・(13.4)	—	—	94	盗掘穴
29	里仁29号墳	円? (25?)	箱式石棺	埴輪	95	石棺材・埴輪片散乱(文献1)
30	里仁30号墳	円・(27)	—	—	96	
31	(里仁31号墳)	円・(5)	—	—	97 布勢グラウンド13号墳	1980財団調査(文献2)古墳と確認できず 欠番・消滅
32	里仁32号墳	方・(14?)	箱式石棺土壇墓埴輪棺	新発見	98	1984財団調査(本報告) 消滅
33	里仁33号墳	方・(14)	箱式木棺埴輪棺土壇墓	鉄剣・刀子・鏃・鋤・先・鏃・鉄・石・髷付円筒埴輪・葦・鑄造鉄	新発見	1984財団調査(本報告) 消滅
34	里仁34号墳	方・(11)	箱式木棺土壇墓	新発見	99	1984財団調査(本報告) 消滅
35	里仁35号墳	方・(18)	箱式石棺	新発見	100	1984財団調査(本報告) 消滅
36	里仁36号墳	円・(15)	—	—	101	新発見里仁32号墳 1981鳥取市発見(文献3)

*里仁36号墳は文献3に新発見で里仁32号墳として記載されている。今回鳥取市教育委員会の御好意で36号墳に変更させていただいた。

挿表12 里仁古墳群古墳一覧表(1985・3作製)

- 文献1 『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』鳥取県教育委員会 1973年
 文献2 『布勢遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団 1981年
 文献3 『里仁1号墳発掘調査報告書』鳥取市教育委員会 1981年